



Title	大阪大学・京都大学 公共圏における科学技術 活動報告2020
Author(s)	公共圏における科学技術・教育研究拠点
Citation	大阪大学・京都大学 公共圏における科学技術 活動報告2020. 2021, p. 1-99
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89261
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

科学技術イノベーション政策における
「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点

大阪大学・京都大学
公共圏における科学技術

活動報告

2020

目次

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか	1
• 公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について	2
1. 教育プログラムの実施	6
• 大阪大学の取組	6
• 大阪大学 特色ある授業	12
• 京都大学の取組	15
• 京都大学 特色ある授業	20
• 合同講義	22
• 阪大学生の声	27
• 京大学生の声	29
• STiPS 修了生ネットワーク	30
2. プログラム推進委員会の運営	32
• 実施体制	32
• アドバイザー会議	33
• カリキュラムの発展及び拡充	33
• 研究会やイベント開催の企画及び調整	34
3. SciREX 事業への参画	40
• サマーキャンプへの参画	40
• サマースクールへの参画	41
• 政策のための科学オープンフォーラムへの参画	42
• 他拠点への講師派遣	43
• コアコンテンツ作成、行政官研修への講師派遣	43
4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施	46
• 阪大拠点主催:「公共圏における科学技術政策」に関する研究会(STiPS Handai研究会) ..	47
• その他	64
5. 共進化実現プロジェクトの実施	68
• 新興・融合科学領域における「予見・分析手法」の検討と人的ネットワークの形成 ...	68
• 国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構(JAXA)の歴史・現状・未来像に関する研究 ...	69
6. 関西ネットワークの発展	72
• SpringX 超学校シリーズ	72
7. 国際連携の推進	78
• 国際連携	78
• 海外調査及び発表等	78
8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）	80
• 大阪大学	80
• 京都大学	89

はじめに：なぜ、今、「公共のための科学技術政策」が必要なのか

「この論争は安全性に関するものではなく、どのような世界に生きてみたいと欲するかという、はるかに大きな問題に関するものである。」(Select Committee on Science and Technology 2000)

この一文は、英国で1990年代末に過熱した遺伝子組換え作物(GM)論争の教訓として英国政府がまとめた報告書のものであります。

現代社会における科学技術政策は、社会の駆動力としての科学技術のあり方を形成する重要な政策となっています。一方で当然のことながらその政策は、科学技術の研究者集団のための振興策に尽きるものではありません。この点は、科学技術政策を「社会及び公共のための政策」の一つと位置づけた第4期科学技術基本計画(2011年)においても前提とされており、社会的課題に対応した科学技術政策の形成が必要とされています。つまり、これからの科学技術政策は「どのような世界に生きてみたいと欲するか」という問いに答えるものでなければならないのです。

また科学技術政策を進めるにあたっては、「客観的証拠(エビデンス)」に基づいた「政策のための科学」が整備されるべきであることは言うまでもありません。しかしそれと同時に、そのような「政策のための科学」が、とすれば客観的証拠を論文引用数や経済指標など「定量化可能なデータ」に限定した営みになることも私たちは懸念しています。

英国のGM論争の事例は、定量化可能なリスクに基づく安全性の説得という政策的対応が、問題の解決に至らなかったという反省を示しています。決定的に欠落していた視点は、世の中の人々が、科学技術や公共政策に何を期待し、何を懸念しているか、どのような世界に生きてみたいと欲しているのか、といった社会の期待と懸念を把握することであり、これは統計的世論調査のような定量的方法だけで把握することは困難です。そのために必要なのは、研究者コミュニティや産業界、政策立案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組

織・集団が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスであると私たちは考えています。本拠点では、これを「科学技術への公共的関与(public engagement)」と呼んでいます。

大阪大学および京都大学の連携による本人材育成拠点で重点を置くのは、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題(ELSI)」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成です。

こうした公共的関与は、政策形成の初期の段階(アジェンダ形成段階)を含む各段階で、一般市民を含む多様なステークホルダーが参画・関与する公共的関与の活動と分析を行い、そこから社会的課題(期待や懸念、問題)を発見・特定し、政策や研究開発の立案・計画、テクノロジーアセスメントや社会的な合意形成等に反映させていく必要があります。そこで重要なのは、科学者・技術者の側が何を問題とし何をしたいかのみならず、社会の側が何を解決すべき問題と考え、科学技術に何を期待し、何を懸念しているかを把握することです。

そのためには、自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を備えた人材の育成が急務であるとと考えています。

STiPS 設立拠点長 小林傳司(大阪大学)

❖ 公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）について

「公共圏における科学技術・教育研究拠点 (Program for Education and Research on Science and Technology in Public Sphere : STiPS)」は、大阪大学および京都大学の連携による人材育成プログラムです。文部科学省の科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業の一環として、2012年1月に発足しました。なお、同推進事業には5拠点が採択されており、有機的な拠点間連携を通じた人材の育成を目指しています。

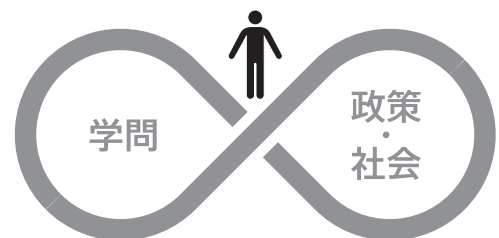
STiPSでは、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。



教育拠点としての STiPS

STiPSでは、科学技術や公共政策に対する社会の期待と懸念を把握するために、研究者コミュニティや産業界、政策立案者のみならず、一般の市民も含めた多様な人々や組織が、直接・間接に議論し、熟慮を深め、自ら期待と懸念を顕在化し共有していく参加・関与・熟議のプロセスが必要と考えています。

こうした「科学技術への公共的関与（public engagement）」に関する活動と教育を行うことにより、自分の専門分野の枠組みを超えて、多角的に科学技術と社会の諸問題を理解し、学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材の育成を目指しています。



研究拠点としての STiPS

STiPSでは、政策形成における公共的関与の活動と分析をより効果的にするために、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を行います。また ELSI に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、公共的関与に関する理論的かつ実践的な能力を備えた人材育成を進めています。

実践拠点としての STiPS

STiPSでは、大学の知と社会の知をつなぐ「社会学連携」の実践と、そこに学生が主体的に関与することも含めた教育を実施します。大阪大学・京都大学は、関西圏の経済界や地域行政との関わりも密接であり、科学技術を通じた連携・交流が極めて盛んです。これに加えて、一般市民や NGO/NPO など市民社会の公共的関与活動への参画を促進することにより、地域社会のニーズや事情、課題をよりの確に反映した科学技術イノベーション政策や研究開発の立案・企画に貢献しています。



主要メンバー一覧（2021年3月現在）

大阪大学			
小林 傳司	大阪大学	名誉教授／設立拠点長	科学哲学、科学技術社会論
山中 浩司	大阪大学大学院人間科学研究科	教授	科学社会学、医療社会史、医療社会学、技術社会学
加藤 和人	大阪大学大学院医学系研究科	教授	生命倫理、医学倫理、科学コミュニケーション論
瀬戸山 晃一	大阪大学大学院法学研究科・高等司法研究科	客員教授	法と医療・生命倫理、法理学、法哲学、行動心理学的「法と経済学」
平川 秀幸	大阪大学COデザインセンター	教授	科学技術社会論
岸本 充生	大阪大学データリテリィフロンティア機構	教授	リスク評価、社会経済分析
神里 達博	大阪大学COデザインセンター	客員教授	科学史、科学技術社会論
八木 絵香	大阪大学COデザインセンター	教授	科学技術社会論、ヒューマンファクター研究
中村 征樹	大阪大学全学教育推進機構	准教授	研究倫理、科学技術社会論、科学技術史、科学コミュニケーション
渡邊 浩崇	大阪大学COデザインセンター	特任准教授	国際政治学、外交史、宇宙政策、宇宙法
工藤 充	大阪大学COデザインセンター	特任講師	科学技術社会論、科学コミュニケーション論
水町 衣里	大阪大学社会技術共創研究センター	特任講師	科学コミュニケーション論、科学教育
小林 万里絵	大阪大学COデザインセンター	特任研究員（非常勤）	
鍛冶 一郎	大阪大学COデザインセンター	特任研究員（非常勤）	国際政治学、外交史
若林 魁人	大阪大学COデザインセンター	特任研究員（非常勤）	
京都大学			
川上 浩司	京都大学大学院医学研究科	教授（ユニット長）	薬剤疫学、医療技術評価、レギュラトリーサイエンス
小山田 耕二	京都大学学術情報メディアセンター	教授（副ユニット長）	可視化
依田 高典	京都大学大学院経済学研究科	教授	応用経済学
伊藤 順一	京都大学大学院農学研究科	教授	農業経済学、応用ミクロ経済学、計量経済学
岩下 直行	京都大学公共政策大学院	教授	フィンテック
大手 信人	京都大学大学院情報学研究科	教授	生態系生態学、森林水文学
カール・ベッカー	京都大学学際融合教育研究推進センター	特任教授	倫理学、ターミナルケア、死生学
佐野 亘	京都大学大学院人間・環境学研究科	教授	政治理論、公共政策
末松 千尋	京都大学経営管理大学院	教授	IT、事業創成
富田 直秀	京都大学大学院工学研究科	教授	医療工学、QOLデザイン
中山 建夫	京都大学大学院医学研究科	教授	健康情報学、疫学、ヘルスコミュニケーション
広井 良典	京都大学こころの未来研究センター	教授	公共政策、医療・社会保障、持続可能な福祉社会
二木 史朗	京都大学化学研究所	教授	薬学、生体機能化学
要藤 正任	京都大学経営管理大学院	特定教授	地域経済、ソーシャル・キャピタル
伊勢田 哲治	京都大学大学院文学研究科	准教授	科学哲学、倫理学
関根 仁博	京都大学経済研究所	特定准教授	科学技術・イノベーション政策
南 真祐	京都大学IPS細胞研究所	准教授	科学技術・イノベーション政策
宮野 公樹	京都大学学際融合教育研究推進センター	准教授	大学論、学問論、政策哲学
荒川 裕司	京都大学IPS細胞研究所	特命講師	薬事、薬価
市川 正敏	京都大学大学院理学研究科	講師	生命現象の物理、ソフトマター物理
井出 和希	京都大学IPS細胞研究所	特定助教	薬学、疫学、社会医学
祐野 恵	京都大学学際融合教育研究推進センター	特定助教	公共政策、地方自治、地方議会

1. 教育プログラムの実施

1. 教育プログラムの実施

❖ 大阪大学の取組

大阪大学 大学院副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」・大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」概要

STiPS では、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究と教育を行い、政策形成に寄与できる「政策のための科学」の人材育成を進めています。大阪大学 CO デザインセンター（2016年6月までは大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）では STiPS の教育プログラムとして、2013年4月より「公共圏における科学技術政策」という大学院副専攻プログラムを提供しています。

大学院副専攻プログラム制度は、大阪大学が2011年度から始めたものです。これは、所属する研究科（主専攻）と異なる視点、学際的な視点、俯瞰的な視点といった複眼的視野の涵養のため、教育目標に沿って、主専攻に準ずるまとまりのある高度な専門的素養又は幅広い分野の素養を培うための大学院生に特化したプログラムです。プログラムに定める修了の要件を満たすことで、副専攻プログラム修了認定証が授与されます。副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」の修了には、必修科目6単位および選択科目8単位以上の計14単位以上の修得が必要です。

副専攻プログラム「公共圏における科学技術政策」は、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）」に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間を“つなぐ”ことを通じて政策形成に寄与できる人材、言い換えるならば「科学技術への公共的関与」を促進する人材の育成を目指しています。自分の専門分野の枠組みを超えて、広く俯瞰的・多角的に科学技術と社会の諸問題・課題を洞察・理解し、かつ公共的関与の活動と分析を行えるような知識とセンス、実践的な能力を学ぶためのプログラムを用意しています。

キャリアパスとしては、主専攻の専門性を中心としつつ、さらに「政策のための科学」の素養を備えた人材として、大学、研究機関、企業などに就職することが想定されます。また、地方及び国の行政、政策秘書、シンクタンク、研究大学の研究戦略（research policy）担当者、様々なセクターのリスクコミュニケーション人材としての活躍も期待されます。

本副専攻プログラムは、全国5拠点（政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学）合同の合宿セミナーを始め、他の「政策のための科学」拠点と連携して進めています。拠点間ネットワークを生かし、公共的関与や政策形成の現場とのつながりを、より一層強化できるように努めています。

また、以上の副専攻プログラムに加えて、同じく2013年4月より大学院等高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」も提供しています。大学院等高度副プログラム制度は、大阪大学が2008年度から始めたものです。これは、大学院生および6年制課程の学部5、6年次を対象に、幅広い分野の知識と柔軟な思考能力を持つ人材など、社会において求められる人材の多様な要請に対応する取組として、教育目標に沿って、一定のまとまりを有する授業科目により構成され、体系的に履修することができるプログラムです。所定の単位を修得した学生には高度副プログラム修了認定証が授与されます。高度副プログラム「公共圏における科学技術政策」プログラム修了には、必修科目2単位および選択科目6単位以上の計8単位以上の修得が必要です。

大阪大学 大学院副専攻プログラム・大学院等高度副プログラムの運営状況

副専攻プログラム（修了要件 14 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2020 年度 在籍者数の合計：27 人

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、理学：6 人、薬学：1 人）

修了者数：8 人（進路内訳 在学中：2 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：4 人、不明：1 人）

*副専攻プログラムの修了証はこれまで、学生が副専攻の 14 単位以上を修得し、さらに主専攻を修了した後に授与されたため、14 単位以上を修得したものの、主専攻を次年度以降に修了予定の学生はこの数に含まれていませんでした。しかし、2020 年度より大阪大学全体として、主専攻の修了に関係なく副専攻プログラムの修了証が授与されることになったため、ここでは 14 単位以上を修得して修了した学生数を掲載しています。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度

履修登録者数：15 人（所属研究科内訳 文学：1 人、人間科学：1 人、法学：1 人、理学：5 人、薬学：1 人、工学：2 人、基礎工学：3 人、生命機能：1 人）

修了者数：2 人（進路内訳 民間企業：2 人）

2014 年度

履修登録者数：14 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、理学：2 人、医学系：1 人、工学：4 人、基礎工学：2 人、国際公共政策：1 人、生命機能：3 人）

修了者数：4 人（進路内訳 政府・公的研究機関：2 人、民間企業：2 人）

2015 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 文学：1 人、理学：3 人、工学：2 人）

修了者数：4 人（進路内訳 内部進学：1 人、大学：1 人、民間企業：2 人）

2016 年度

履修登録者数：12 人（所属研究科内訳 文学：2 人、理学：2 人、医学系：1 人、工学：4 人、基礎工学：2 人、国際公共政策：1 人）

修了者数：6 人（進路内訳 大学：2 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：2 人、不明：1 人）

2017 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 文学：1 人、理学：1 人、医学系：1 人、工学：2 人、基礎工学研究科：1 人、生命機能：2 人）

修了者数：6 人（進路内訳 進学：1 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：4 人）

2018 年度

履修登録者数：6 人（所属研究科内訳 文学：1 人、理学：2 人、医学系：1 人、基礎工学：2 人）

修了者数：3 人（進路内訳 民間企業：3 人）

2019 年度

履修登録者数：17 人（所属研究科内訳 文学：1 人、人間科学：1 人、法学：1 人、理学：5 人、工学：4 人、基礎工学：2 人、国際公共：1 人、生命機能：1 人、情報科学：1 人）

修了者数：2 人（進路内訳 進学：1 人、民間企業：1 人）

高度副プログラム（修了要件 8 単位以上）履修登録者数、修了者数など

2020 年度 在籍者数の合計：12 人

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 理学：3 人、薬学：1 人、工学：3 人、基礎工学：1 人）

修了者数：9 人（進路内訳 進学：3 人、在学中：2 人、不明：4 人）

* 高度副プログラムの修了証はこれまで、学生が高度副の 8 単位以上を修得し、さらに主専攻を修了した後に授与されたため、8 単位以上を修得したものの、主専攻を次年度以降に修了予定の学生はこの数に含まれていませんでした。しかし、2020 年度より大阪大学全体として、主専攻の修了に関係なく高度副プログラムの修了証が授与されることになったため、ここでは 8 単位以上を修得して修了した学生数を掲載しています。

参考資料：過去の履修登録者数、修了者数

2013 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、理学：2 人、医学系：3 人、国際公共政策：1 人、生命機能：1 人）

修了者数：0 人

2014 年度

履修登録者数：12 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、理学：1 人、工学：4 人、基礎工学：3 人、国際公共政策：2 人、生命機能：1 人）

修了者数：3 人

2015 年度

履修登録者数：10 人（所属研究科内訳 文学：1 人、理学：2 人、医学系：1 人、工学：3 人、基礎工学：1 人、国際公共政策：1 人、生命機能：1 人）

修了者数：5 人

2016 年度

履修登録者数：9 人（所属研究科内訳 人間科学：1 人、法学：1 人、理学：2 人、工学：1 人、基礎工学：2 人、生命機能：1 人、情報科学：1 人）

修了者数：8 人

2017 年度

履修登録者数：7 人（所属研究科内訳 理学：2 人、医学系：1 人、工学：2 人、基礎工学：1 人、国際公共政策 1 人）

修了者数：8 人

2018 年度

履修登録者数：8 人（所属研究科内訳 文学：1 人、医学系：3 人、工学：2 人、基礎工学：1 人、生命機能：1 人）

修了者数：4 人

2019 年度

履修登録者数：7 人（所属研究科内訳 理学：4 人、医学系：2 人、工学：1 人）

大阪大学 副専攻プログラム（修了要件 14 単位以上） 開講科目一覧（2020 年度）

科目カテゴリー	開講部局（課程）	授業科目名	主担当教員	単位	学期
入門必修科目（2単位）	COデザインセンター（院）	社会の中の科学技術概論	平川 秀幸、他	2	春～夏
	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策概論A	平川 秀幸、他	1	不開講
	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策概論B	平川 秀幸、他	1	不開講
必修科目（2単位）	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション演習	八木 絵香、他	2	集中（夏）
連携必修科目（2単位）	COデザインセンター（院）	研究プロジェクト	平川 秀幸、他	2	通年
	COデザインセンター（院）	研究手法入門	平川 秀幸、他	2	秋～冬
	COデザインセンター（院）	ファシリテーション入門	八木 絵香、他	1	春
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門A	工藤 充、他	1	春、不開講
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門A	工藤 充、他	1	秋
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門B	八木 絵香、他	1	夏（豊中）
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門B	八木 絵香、他	1	冬（吹田）
	COデザインセンター（院）	科学技術社会論入門	平川 秀幸、他	1	春
	COデザインセンター（院）	科学史・科学哲学入門	平川 秀幸	1	夏
	COデザインセンター（院）	科学技術と公共政策A	渡邊 浩崇	1	秋
	COデザインセンター（院）	科学技術と公共政策B	渡邊 浩崇	1	冬
	COデザインセンター（院）	訪問術A（質的研究のデザインA）	池田 光穂	2	春
	人間科学研究科（博士前期）	フィールド調査法特講	森田 敦郎、他	2	春～夏
	人間科学研究科（博士前期）	社会における科学技術特定演習	山中 浩司	2	不開講
工学研究科（博士前期）	サステナビリティ評価・技術論	下田 吉之、他	2	春～夏	
基礎工学研究科（博士前期）	科学技術移転論	草部 浩一	2	秋～冬	
選択科目Ⅰ： 基軸科目群	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策総合演習	平川 秀幸、他	2	集中（夏）
	COデザインセンター（院）	科学技術と社会特論A	平川 秀幸、他	1	不開講
	COデザインセンター（院）	科学技術と社会特論B	平川 秀幸、他	1	不開講
	COデザインセンター（院）	特別講義A（Science, Technology and Society）	工藤 充	1	不開講
	COデザインセンター（院）	特別講義B（Crossing Borders in Higher Education and Research）	工藤 充	1	不開講
	COデザインセンター（院）	特別講義（Effectively Communicating Your Science & Research）	BARRETT BRENDAN、他	2	春
	COデザインセンター（院）	特別講義（Climate Change in Asia Pacific - Science and Solutions）	BARRETT BRENDAN	2	秋～冬
	COデザインセンター（院）	メディアリテラシー	久保田 テツ、他	2	集中（冬）
	COデザインセンター（院）	COデザイン講義（インターネット技術と法規制）	渡邊 浩崇、他	2	秋～冬
	法学研究科（博士前期）	総合演習（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
選択科目Ⅱ： イシュー科目群	法学研究科（博士後期）	特定研究（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
	医学系研究科（修士）	ライフサイエンスの倫理と公共政策学	加藤 和人、他	2	集中（夏）
	工学研究科（博士前期）	産業環境マネジメント論	東海 明宏	2	春～夏
	工学研究科（博士前期）	サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	春～夏
	基礎工学研究科（博士前期） （ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論A	竹田 精治	2	集中（春～夏）
	基礎工学研究科（博士前期） （ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）	ナノテクノロジー社会受容特論B	竹田 精治	2	不開講
	国際公共政策研究科（博士前期）	環境法	松本 充郎	2	不開講
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（環境法）	松本 充郎	2	不開講
	国際公共政策研究科（博士前期）	特殊講義（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬
	国際公共政策研究科（博士後期）	特殊研究（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬

大阪大学 高度副プログラム（修了要件 8 単位以上） 開講科目一覧（2020 年度）

科目カテゴリー	開講部局（課程）	授業科目名	担当教員	単位	学期
必修科目（2単位）	COデザインセンター（院）	社会の中の科学技術概論	平川 秀幸、他	2	春～夏
	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策概論A	平川 秀幸、他	1	不開講
	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策概論B	平川 秀幸、他	1	不開講
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション演習	八木 絵香、他	2	秋～冬
	COデザインセンター（院）	研究手法入門	平川 秀幸、他	1	春
	COデザインセンター（院）	ファシリテーション入門	八木 絵香、他	1	春
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門A	工藤 充、他	1	春、不開講
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門A	工藤 充、他	1	秋
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門B	八木 絵香、他	1	夏(豊中)
	COデザインセンター（院）	科学技術コミュニケーション入門B	八木 絵香、他	1	冬(吹田)
	COデザインセンター（院）	科学技術社会論入門	平川 秀幸、他	1	春
	COデザインセンター（院）	科学史・科学哲学入門	平川 秀幸	1	夏
	COデザインセンター（院）	科学技術と公共政策A	渡邊 浩崇	1	秋
	COデザインセンター（院）	科学技術と公共政策B	渡邊 浩崇	1	冬
	COデザインセンター（院）	訪問術A（質的研究のデザインA）	池田 光穂	2	春
	人間科学研究科（博士前期）	フィールド調査法特講	森田 敦郎、他	2	春～夏
	人間科学研究科（博士前期）	社会における科学技術特定演習	山中 浩司	2	不開講
	工学研究科（博士前期）	サステナビリティ評価・技術論	下田 吉之、他	2	春～夏
	基礎工学研究科（博士前期）	科学技術移転論	草部 浩一	2	秋～冬
	選択科目：6単位以上	COデザインセンター（院）	科学技術イノベーション政策総合演習	平川 秀幸、他	2
COデザインセンター（院）		科学技術と社会特論A	平川 秀幸、他	1	不開講
COデザインセンター（院）		科学技術と社会特論B	平川 秀幸、他	1	不開講
COデザインセンター（院）		特別講義A（Science, Technology and Society）	工藤 充	1	不開講
COデザインセンター（院）		特別講義B（Crossing Borders in Higher Education and Research）	工藤 充	1	不開講
COデザインセンター（院）		特別講義（Effectively Communicating Your Science & Research）	BARRETT BRENDAN、他	2	春
COデザインセンター（院）		特別講義(Climatic Change in Asia Pacific - Science and Solutions)	BARRETT BRENDAN	2	秋～冬
COデザインセンター（院）		メディアリテラシー	久保田 テツ、他	2	集中(冬)
COデザインセンター（院）		COデザイン講義（インターネット技術と法規制）	渡邊 浩崇、他	2	秋～冬
法学研究科（博士前期）		総合演習（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
法学研究科（博士後期）		特定研究（生命倫理と法）	瀬戸山 晃一	2	秋～冬
医学系研究科（修士）		ライフサイエンスの倫理と公共政策学	加藤 和人、他	2	集中(夏)
工学研究科（博士前期）		産業環境マネジメント論	東海 明宏	2	春～夏
工学研究科（博士前期）		サステナブルシステムデザイン論	小林 英樹	2	春～夏
基礎工学研究科（博士前期） （ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）		ナノテクノロジー社会受容特論A	竹田 精治	2	集中(春～夏)
基礎工学研究科（博士前期） （ナノサイエンスデザイン教育研究センター提供）		ナノテクノロジー社会受容特論B	竹田 精治	2	不開講
国際公共政策研究科（博士前期）		環境法	松本 充郎	2	不開講
国際公共政策研究科（博士後期）		特殊研究（環境法）	松本 充郎	2	不開講
国際公共政策研究科（博士前期）		特殊講義（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬
国際公共政策研究科（博士後期）		特殊研究（開発と環境）	大槻 恒裕	2	秋～冬

❖ 大阪大学 特色ある授業

「社会の中の科学技術概論」(春・夏学期 隔週水曜5・6限)

この科目は、例年であれば、ゲストレクチャー(90分)と学生同士のグループディスカッション(90分)とがセットになったオムニバス形式の講義・演習スタイルで運営されていますが、2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、その方法とテーマを変更して開始されました。

2020年度に取り上げたテーマは、「新型コロナウイルス感染症(以下、新型コロナ)とその対応の現在と将来("ポストコロナ時代")について」です。疾患としての新型コロナのリスクへの不安だけでなく、事業や生活の見通しが立たない経済リスクへの不安も広がっているなか、日本でも2020年4月7日に7都道府県に対して緊急事態宣言が発表されました(授業を開始した2020年4月15日時点)。そこでこの科目では、現在進行中の新型コロナについて、特に日本の状況に焦点をあてて、国や自治体、医療、専門家、報道、事業者、個人が直面している政策や医療体制、仕事、生活、コミュニケーション等における問題点をELSIの観点から多角的にとらえ、どのような対応が取られるべきだったか、取られるべきか、また将来、類似した問題が発生したときに適切に対処できる"ポストコロナ時代"の社会を実現するには何が必要なのか、社会や個人の課題について考えていきました。

「社会の中の科学技術概論」

第1回全体セッション(2020年4月15日)

第2回全体セッション(2020年5月13日)

- 問題構造化と課題設定のグループワーク
- グループワークの結果のシェアと講評

第3回全体セッション(2020年6月17日)

- 問題分析の深掘りのグループワーク
- グループワークの結果のシェアと講評

第4回全体セッション(2020年7月1日)

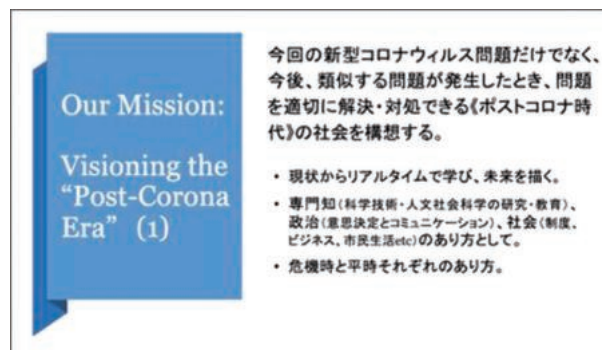
- 望ましい未来像に向けたグループワーク
- グループワークの結果のシェアと講評

第5回全体セッション(2020年7月15日)

- 望ましい未来像の深掘りのグループワーク
- グループワークの結果のシェアと講評

第6回全体セッション(2020年7月29日)

- 最終発表と総合討論
- レポート課題の提示



「科学技術コミュニケーション演習」(集中講義(夏))

研究の細分化により生じている専門家間のコミュニケーションの困難さを実感すると同時に、異なる専門知識や背景を持つ人々とのコミュニケーションの作法を獲得することを目的として実施している集中講義です。3日間、一つのテーマについて、じっくりと議論を重ねます。講義のテーマは例年、現在進行形の科学技術に関する社会的な課題を選んでいきます。

2020年度は「COVID-19をめぐる科学的助言のあり方」を取り上げました。まず、COVID-19以前に、科学的(専門的)助言のあり方が課題となった事例についての講義を行い、それらの過去事例から学ぶこと、そして、COVID-19をめぐる問題に活かせることなどを議論するという流れでした。

新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、全ての行程をオンラインで実施しました。

3日間のスケジュールと内容は次の通りです。主に、グループワークを中心に進められました。

1日目

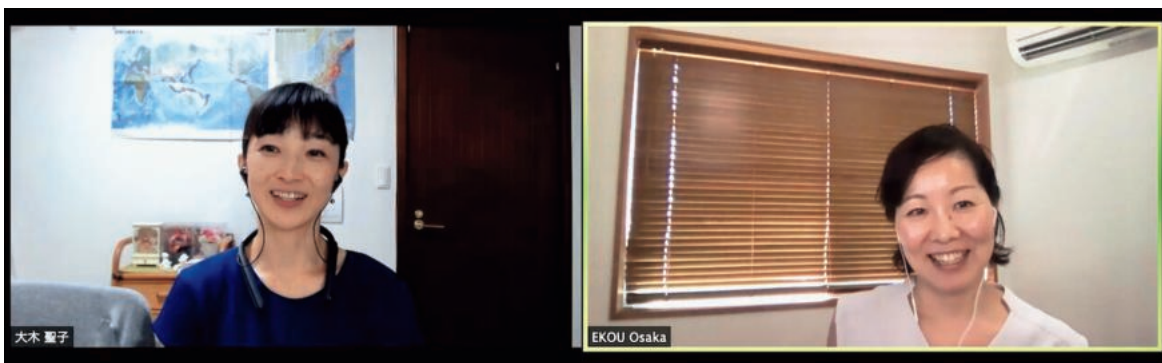
オリエンテーションと自己紹介

講義：過去事例に学ぶ

講義1「ラクイラ地震と科学的助言」大木 聖子(慶應義塾大学 准教授)

講義2「BSE問題と科学的助言」小林 傳司(大阪大学名誉教授)

講義3「福島第一原子力発電所事故と科学的助言」寿楽 浩太(東京電機大学 准教授)



2日目

「問1」への個人の見解の作成(個人の作業時間)

「問1」へのグループの見解の作成(グループディスカッション)

「問1」に関する発表・全体ディスカッション

全体ふりかえり

*問1(抜粋):新型コロナウイルス感染症対策専門家会議(「専門家会議」)は、2/24から5/29までの期間、文章を発表し記者会見を行うと同時に、コロナ専門家有志の会ウェブサイト等を通じて、積極的な情報発信を行ってきました。この専門家達の一連の行動を、あなたは肯定的に評価しますか、否定的に評価しますか。どちらかの評価を選んだ上で、その論拠について示しなさい。

3日目

「問2」への見解の作成（個人 or グループの作業時間）

「問2」への見解の作成（グループディスカッション）

「問2」に関する発表・全体ディスカッション

全体ふりかえりと最終レポート課題の説明

*問2（抜粋）：問1をうけて、2020年2月段階に時間を巻き戻して専門家会議を設計すると仮定した場合、その専門家会議は、どのようなメンバーで構成されるべきでしょうか。また、その場合の専門家会議のあり方（政治的判断へのコミットの仕方・国民への情報発信のあり方等）は、どうあるべきでしょうか。

最終発表の時間には、新型コロナウイルス感染症対策専門家会議をはじめ、さまざまな提言などを行っている田中幹人氏（早稲田大学 准教授）にゲストとしてご参加いただきました。また、初日に講義をお願いした大木聖子氏、寿楽浩太氏にも再びご参加いただきました。



❖ 京都大学の取組

京都大学 学際融合教育研究推進センター 「政策のための科学ユニット」 概要

「さまざまな分野を“つなぐ”人材」の育成

人類の持続的発展への願望を実現するために科学技術の発展に寄せられる社会の期待は、世界的規模で急速に高まっています。こうした社会の科学技術への期待の高まりは科学の知見の蓄積とそれを技術開発に結びつける創造力の結実が生み出した成果であるといっても過言ではありません。しかし一方で、このような科学技術の進歩が、グローバルな社会環境を生み出すとともに、人類の持続的発展に向けて我々が解決すべき課題を多様化・複雑化させています。このような社会的課題の解決には、研究者自身が解決すべき社会の課題を発見し解決するための研究を進め、その科学技術の成果を社会に実装し、社会システムの改革を含めて新しい社会的価値の創造をもたらすイノベーションを生起させることが必要です。

このような問題意識は我が国に限ったことではなく、現在世界各国がイノベーションによる経済社会の発展を目指して活発な取組を行っています。我が国がこのようなグローバルな世界で、持続的に発展していくためには、現代社会の解決すべき課題の多様性と複雑性に対応しつつ、資源や人材を有効に活用し国際競争力を高めていくことが不可欠です。

「政策のための科学」の扱うべき領域は、科学技術イノベーションに対する理解に加え、政策及びその形成過程、政策と自然・社会との相互作用といった、自然科学及び人文社会科学の諸科学分野に跨るものです。そしてまた、そこで得られた知見が実際の政策形成とその実施に寄与することが求められています。したがって、ここで育成される人材には、多様な学問分野の知見を総合し、社会的課題を的確に捉え、多様な利害関係者と協力しつつ政策形成・実施していくという合意形成の能力も求められます。

研究においては、政策を実施すべき各分野において、何を仮説として設定するのか、また、複数の異なる領域、価値観から、どのように優先順位をつけて予算配分をするのかといった問題が重要な課題です(図1)。

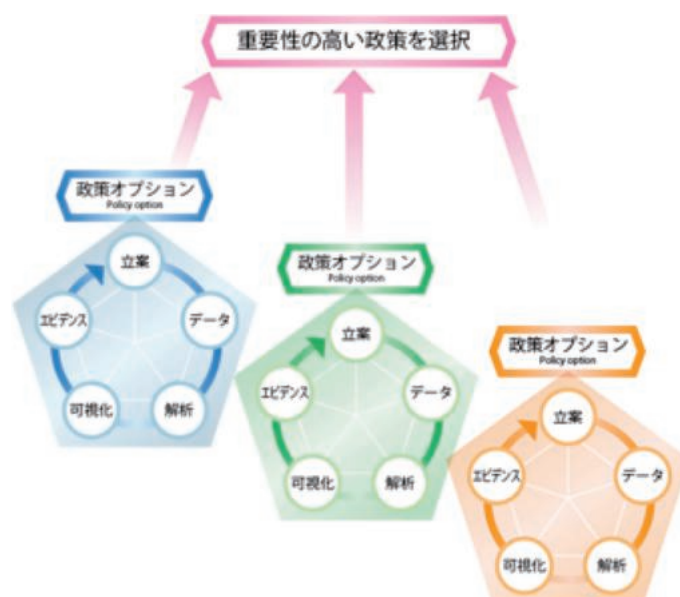


図1 さまざまな領域からの政策決定の概念図

定量的なエビデンスは、実世界における各種のデータを可視化し、そこから様々な手法で解析評価をする手法の深化が重要となります。実世界のデータからエビデンスへ、エビデンスから政策へ、そして政策を実施したのちにそれを評価していくというサイクルが形成されていくことになります（図2）。

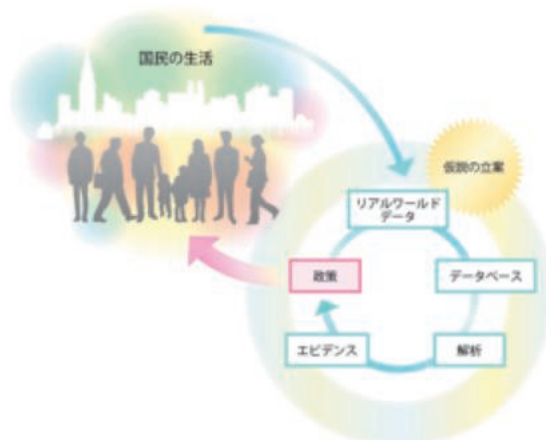


図2 エビデンスベースの政策決定の概念図

政策のための科学プログラムでは、大阪大学と京都大学の連携により、幅広く科学技術の研究現場の動向を踏まえつつ、科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を基盤として、テクノロジーアセスメントなどの公共的関与の活動と分析を行うことにより、その分野と他分野・他業種・市民等をつなぐ人材育成を行います。育成された人材は、我が国の科学技術イノベーション政策の将来を担う人材として、多様なキャリアパスの中で、社会を先導できる人材となることが期待されています。修了後のキャリアパスとしては、各種研究職、行政職、政策秘書、シンクタンク職員、大学の研究戦略担当、リスクコミュニケーション人材などを想定しています。

京都大学 「政策のための科学ユニット」 運営状況

研究プロジェクト修了コース（修了要件 14 単位以上）

2020 年度 在籍者数の合計：11 人

履修者数：6 人（所属研究科内訳 公共政策教育部：3 人、医学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人、文学研究科：1 人）

修了者数：3 人（進路内訳 政府・公的研究機関：1 人、博士課程在学中：2 人）

参考資料：過去の履修者数、修了者数

2013 年度

履修者数：7 人（所属研究科内訳 医学研究科：3 人、経営管理大学院：1 人、工学研究科：1 人、農学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人）

2014 年度

履修者数：7 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：2 人、医学研究科：2 人、農学研究科：2 人、薬学研究科：1 人）

修了者数：7 人（進路内訳 政府・公的研究機関：2 人、民間企業：2 人、博士課程在学中：3 人）

2015 年度

履修者数：6 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：1 人、医学研究科：1 人、農学研究科：1 人、公共政策大学院：3 人）

修了者数：5 人（進路内訳 大学：1 人、民間企業：2 人、博士課程進学：2 人）

2016 年度

履修者数：8 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：3 人、医学研究科：2 人、文学研究科：2 人、理学研究科：1 人）

修了者数：6 人（進路内訳 公務員：3 人、民間企業：2 人、博士課程在学中：1 人）

2017 年度

履修者数：9 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：2 人、医学研究科：4 人、農学研究科：3 人）

修了者数：6 人（進路内訳 公務員：1 人、民間企業：4 人、博士課程進学：1 人）

2018 年度

履修者数：6 人（所属研究科内訳 医学研究科：2 人、工学研究科：1 人、情報学研究科：1 人、人間・環境学研究科：1 人、農学研究科：1 人）

修了者数：4 人（進路内訳 博士課程在学中：2 人、政府・公的研究機関：1 人、民間企業：1 人）

2019 年度

履修者数：6 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：3 人、農学研究科：2 人、医学研究科：1 人）

修了者数：2 人（進路内訳 政府・公的研究機関：1 人、民間企業：1 人）

学際プログラム履修コース（修了要件 8 単位以上）

2020 年度 在籍者数の合計：12 人

履修者数：6 人（所属研究科内訳 医学研究科：3 人、情報学研究科：1 人、総合生存学館：1 人、農学研究科 1 人）

修了者数：4 人（進路内訳 政府・公的研究機関：1 人、民間企業：1 人、進学：1 人、不明：1 人）

*それぞれのコースの修了証は、学生が修了要件の単位を修得すれば、主専攻の修了前でも授与されます。

参考資料：過去の履修者数、修了者数

2019 年度

履修者数：4 人（所属研究科内訳 人間・環境学研究科：1 人、医学研究科：2 人、農学研究科：1 人）

修了者数：1 人（進路内訳 博士課程在学中：1 人）

京都大学 開講科目一覧 (2020 年度)

区分	科目名	期間		主担当教員 (研究科)	単位	
		前期	後期			
入門必修科目	現代社会と科学技術 B		○	川上 浩司 (医学研究科)、他	2	
必修科目	科学技術コミュニケーション演習	通年		川上 浩司 (医学研究科)、他	2	
連携必修科目	研究プロジェクト	通年		川上 浩司 (医学研究科)、他	2	
選択科目 (8 単位以上)	選択科目Ⅰ… 基軸科目群 (1 科目以上選択)	現代社会と科学技術 A	○		川上 浩司 (医学研究科)、他	1
		科学技術イノベーション政策総合演習	夏期集中		川上 浩司 (医学研究科)、他	2
		科学技術イノベーション政策特別演習	夏期集中		川上 浩司 (医学研究科)、他	1
		科学技術・イノベーション政策概論	○		関根 仁 (経済研究所)	2
		科学技術・イノベーションと大学		○	関根 仁 (経済研究所)	2
		プログラミング演習 (Excel VBA)	○		小山田 耕二 (学術情報メディアセンター)	2
		経済原論Ⅰ (応用ミクロ経済学)	○		伊藤 順一 (農学研究科)	2
		医薬政策・行政		○	川上 浩司 (医学研究科)	1
		問題解決思考		○	末松 千尋 (経営管理大学院)	2
		疫学Ⅰ (疫学入門)	○		中山 建夫 (医学研究科)	1
		公共政策論Ⅰ		○	佐野 亘 (人間・環境学研究科)	2
	科学技術と社会に関わるクリティカルシンキング		○	伊勢田 哲治 (文学研究科)	2	
	選択科目Ⅱ… イシユール科目群 (1 科目以上選択)	可視化シミュレーション学		○	小山田 耕二 (学術情報メディアセンター)	2
		ビッグデータ分析による問題解決実践	○		小山田 耕二 (学術情報メディアセンター)	2
		医薬品の開発と評価		○	川上 浩司 (医学研究科)	1
		応用経済学		○	依田 高典 (経済学研究科)	2
		政策のための研究方法論	○		カール・ベッカー (学際融合教育研究推進センター)	2
		医療政策の ELSI		○	カール・ベッカー (学際融合教育研究推進センター)	2
		健康情報学Ⅰ		○	中山 建夫 (医学研究科)	2
		文献評価法	○		中山 建夫 (医学研究科)	1
		技術者倫理と技術経営	○		富田 直秀 (工学研究科)、他	2
		情報社会論	○		大手 信人 (情報学研究科)	2
		共生社会環境論演習 3 B		○	佐野 亘 (人間・環境学研究科)	2
		Fin Tech 概論	○		岩下 直行 (公共政策大学院)	2
		まちづくりとまち経営		○	吉田 恭 (経営管理大学院)	2
		現代社会論演習Ⅰ A	○		広井 良典 (こころの未来研究センター)	2
現代社会論演習Ⅰ B			○	広井 良典 (こころの未来研究センター)	2	

🍁 京都大学 特色ある授業

「現代社会と科学技術 A」(前期 木曜 1 限)、「現代社会と科学技術 B」(後期 木曜 4 限)

本 2 科目は、各回に様々な関連トピックを取り上げて、学内外からの講師による話題提供と、それに基づいた学生間のディスカッションを行い、科学の多様性と社会、政策を考えるための端緒としています。ユニット設立当初の 2013 年度から 2018 年度にかけて、「現代社会と科学技術入門」「現代社会と科学技術」として開講し、医薬政策、大学における学問、科学的手法、防災と情報通信、リスクコミュニケーション、計量書誌学、疫学とゲノム科学、医療技術が起す倫理問題、科学技術の社会への実装などをテーマとしてきました。2019 年度により体系的な学習を進めるために編制を見直し、「現代社会と科学技術 A」「現代社会と科学技術 B」と改めるとともに、前期は中央省庁の行政官をはじめとする実務家教員による講義を行っています。

また、講義終了後に学生から提出されるレポートについては、担当教員からのコメントを付けて学生にフィードバックしています。これらのレポート及びコメントは、各回それぞれの講義を受講した学生で共有されており、同じ講義を受けた他の学生の視点、その視点に対する教員の評価を通して、学びを深める役割を果たしています。インタラクティブな講義、学生同士のディスカッション、講義後の学びにより、学生の幅広い政策に関する知識の習得と政策分析の能力の習得を目指します。

2020 年度の「現代社会と科学技術 A」と「現代社会と科学技術 B」は各回下記のテーマに従って話題提供と学生同士によるディスカッションを行いました。

「現代社会と科学技術 A」

第 1 回 (2020 年 5 月 14 日) 宮野 公樹 (京都大学 准教授)

大学における学問とは? 分野融合・越境のダイナミクス

第 2 回 (2020 年 5 月 21 日) 小山田 耕二 (京都大学 教授)

科学的方法について

第 3 回 (2020 年 5 月 28 日) カール・ベッカー (京都大学 教授)

現代社会の問題と政策のための科学的考え方

第 4 回 (2020 年 6 月 4 日) 田淵 敬一 (京都大学 准教授)

社会と科学の関わり方

第 5 回・第 6 回 (2020 年 6 月 20 日) 全教員

現場から学ぶ政策のための科学・課題発表会

第 7 回 (2020 年 6 月 25 日) 関根 仁博 (京都大学 准教授)

科学技術と大学の役割

第 8 回 (2020 年 7 月 2 日) 荒川 裕司 (京都大学 講師)

高騰する薬剤費と医療保険制度

第 9 回 (2020 年 7 月 9 日) 広井 良典 (京都大学 教授)

持続可能性と人口減少社会のデザイン

第 10 回 (2020 年 7 月 16 日) 末松 千尋 (京都大学 教授)

トランザクション・コストと経済政策

第 11 回 (2020 年 7 月 30 日) 全教員

研究プロジェクト中間発表会

「現代社会と科学技術 B」

- 第1回（2020年10月1日） 佐野 亘（京都大学 教授）
価値の対立と合意形成
- 第2回（2020年10月8日） 平川 秀幸（大阪大学 教授）
責任ある研究・イノベーションとは何か
- 第3回（2020年10月15日） 全教員
研究プロジェクト中間発表会
- 第4回（2020年10月22日） 伊勢田 哲治（京都大学 准教授）
クリティカルシンキングの観点からみた科学技術と社会
- 第5回（2020年10月29日） 川上 浩司（京都大学 教授）
健康福祉政策と情報の利活用
- 第6回（2020年11月5日） 小山田 耕二（京都大学 教授）
データ可視化と政策立案
- 第7回（2020年11月12日） 岩下 直行（京都大学 教授）
ビットコインにおける非中央集権の理想と現実
- 第8回（2020年11月19日） 要藤 正任（京都大学 教授）
コンパクトシティ政策と科学
- 第9回（2020年11月26日） 伊藤 順一（京都大学 教授）
日本型直接支払制度の政策評価とその方法
- 第10回（2020年12月3日） 大手 信人（京都大学 教授）
森林の生態系サービスと政策
- 第11回（2020年12月10日） 富田 直秀（京都大学 教授）
技術の質の評価
- 第12回（2020年12月17日） 後藤 励（慶應義塾大学 准教授）
医療費の増加と医療技術評価
- 第13回（2020年12月24日） 中山 健夫（京都大学 教授）
医療の経済評価：その現状と課題
- 第14回（2021年1月7日） 瓜生原 葉子（同志社大学 准教授）
移植医療の社会的価値
- 第15回（2021年1月14日） 宮野 公樹（京都大学 准教授）
振り返りワークショップ

❖ 合同講義

「科学技術イノベーション政策総合演習」(集中講義(夏))

本科目は、科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」基盤的研究・人材育成拠点(政策研究大学院大学、東京大学、一橋大学、大阪大学・京都大学、九州大学)の拠点間共同プログラムの一つである SciREX サマーキャンプを活用したものです。例年、SciREX サマーキャンプでは、ゲスト講師による講義とともに、共同で問題分析や政策提言等を行うグループワークに取り組んできました。

2020年度は新型コロナウイルス感染症が全国的に拡大している状況を受け、SciREX サマーキャンプが中止になったため、本科目は不開講となりました。

「研究プロジェクト」(通年)

本科目では、副専攻プログラムの総仕上げとして、公共的視点から科学技術と政策や社会とを「つなぐ」活動や成果物の作成を行うことにより、自らの専攻分野を生かしつつ、プログラムで学んだ知識やスキルを活用する能力を獲得します。具体的には、科学技術イノベーション政策に関連するトピックと方法論を用いて、「政策のための科学」に関連する個人研究もしくは共同研究のプロジェクトを実施し、学術研究論文あるいはそれに準ずるもの(日英可)を作成します。

授業では、そのための基礎文献の輪読や論文の書き方の指導をゼミ形式で行うとともに、進捗報告や発表の練習を行います。加えて、それぞれの研究テーマや進捗に合わせ、複数の担当教員による個別指導を行い、最後に、その論文の口頭発表会を実施しました。2020年度の合同発表会は、2020年12月12日にオンラインにて、大阪大学7人と京都大学5人の合計12人が発表を行いました。

口頭発表の題名は以下のとおりになります。

2020年度 (口頭発表会:2020年12月12日 オンラインにて実施)

大阪大学

- (1) 日本のスマートシティ関連事業における府省庁連携—中央府省庁と地方自治体の視点から—
- (2) 高度教養教育に関する学習動機の分析—大阪大学高度副プログラムにおける調査から—
- (3) 日本の科学技術イノベーションに関する政策過程—戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)を事例として—
- (4) プラスチック資源循環の実現に向けた課題の検討—レジ袋有料化を事例として—
- (5) 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)における台湾政府と市民の科学コミュニケーション—記者会見のインターネットライブ中継に伴う課題—
- (6) 科学に関する市民参加の課題と、その解決に向けた実践形態の模索—大阪 NO₂一斉測定運動を事例に—
- (7) 要介護・要支援認定における医学的評価の在り方—主治医意見書を中心とした制度設計過程の分析—

京都大学

- (1) 外国人介護人材向けの介護のテキストの量的分析—介護現場での円滑なコミュニケーションを目指して—
- (2) 日本における女性の出産施設選択の嗜好—システムティックレビュー—
- (3) 多職種連携@精神科—質向上サイクルワーク—
- (4) 「見守り活動」への学生参加を増やせるか?—京都市と草津市の事例を対象に—
- (5) 農業大学校における環境保全型農業の実践についての提案—SDGsの達成を目指して—

参考資料：研究プロジェクト 学生論文・口頭発表題名

2013年度 (口頭発表会：2014年2月19日 大阪大学豊中キャンパスにて)

大阪大学

- (1) 日本の食品問題において消費者の不安感に影響を与える要素の考察
- (2) 多メディア時代の科学技術ジャーナリズム —「翻訳」、「批判」から「構築」へ—

2014年度 (口頭発表会：2015年2月14日 大阪大学中之島センターにて)

大阪大学

- (1) 「科学技術の智」プロジェクト・物質科学専門部会報告書の再編 —エネルギーを中心として—
- (2) 科学技術とフィクション —人工子宮の現実化に寄せて—
- (3) 大学院博士後期課程への進学、その後の進路選択に関わる各種要因についての調査 —先行研究を参考に学生側の視点を探る—
- (4) 環境ラベルに関する一考察 —NLマークを事例にあげて—
- (5) 福島第一原子力発電所事故における「市民測定」 —福島市の事例をもとに—
- (6) 中華人民共和国環境保護部による CNPC・Sinopec 石油精製プロジェクト差し止め事件 —習近平政権における政府と国有石油企業の関係性の変化—
- (7) 科学のイメージと PR —企業広告において「科学的である」とはどういうことか—

京都大学

- (1) 外科領域における医療技術評価 —社会の理解のために—
- (2) 医療ツーリズムにおける政策提言 —医療ツーリスト受け入れ最前線への調査を通じて—
- (3) 可視化情報学会における会員満足度の因果関係分析
- (4) トップジャーナルからみた基礎医学研究の臨床 —応用への実現に関する調査研究—
- (5) 京都府の高温耐性品種に対する消費者の価格評価の推定 —選択型実験による接近—
- (6) 社会的・情緒的学習の導入によるインクルーシブ教育の実現
- (7) 虚血性心疾患に対する心臓リハビリテーション実施状況の経年的変化 —レセプトデータベースを用いた疫学的研究—

2015年度 (口頭発表会：2016年2月13日 京都大学楽友会館にて)

大阪大学

- (1) 技術者倫理教育の現状と展望 —大阪大学・機械工学科目の「工学倫理」を題材として—

- (2) 科学技術政策における外部性とその内部化 —科学技術社会論と古典的自由主義の融合—
- (3) 日本における核融合研究と政策 —歴史、現状、そして今後に向けて—
- (4) 科学的証拠の証拠規則の整備に向けて —DNA 型証拠と足利裁判—
- (5) 科学のあいまいさ・不確実性を伝える手法開発のための予備調査 —大学生の科学に対する意識調査とワークショップ方式の有効性確認—

京都大学

- (1) 講義タイトルの表現方法に関する分析 —大学教員が出張講義で高校生の興味を捉える—
- (2) 問題解決における現場地の重要性 —自転車シェア事業を手掛かりに—
- (3) 診療報酬請求情報ナショナルデータベースの制度上の課題と展望 —新規経口抗凝固薬薬剤疫学研究を事例に—
- (4) 食中毒リスクコミュニケーションにおける確率的数量情報の認知に関する研究
- (5) 栄養・健康分野における教育者の情報リテラシー・情報活用能力の涵養に向けた教育のあり方に関する検討

2016年度 (口頭発表会：2016年12月10日 大阪大学中之島センターにて)

大阪大学

- (1) 人工知能利用における受容態度と判断基準 —若手研究者に対する探索的調査—
- (2) 専門職倫理における利益相反をめぐる論争 —日本の産学連携における利益相反ポリシーの再考に向けて—
- (3) 基礎研究における社会経済的評価について —物理分野を中心に—
- (4) 生活支援ロボット普及政策の分析と考察 —ユーザー参加の視点から—
- (5) 市民参加の手続きにおける理論と実際の比較 —過去の河川計画を例として—
- (6) パーソナライズによるサービス変化のユーザーの受け取り方 —偏る選択肢と見られている「気持ち悪さ」—

京都大学

- (1) 日本におけるペルフルオロオクタン酸の自主規制に影響を与えた要因と今後の課題
- (2) 口唇・口蓋裂の患者の会が当事者と保護者に与える影響について
- (3) 農山村における福祉集住政策 —奈良県十津川村「たかもりの家」計画を例に—
- (4) 自治体議員の研修に関する考察 —評価グリッド法を用いた分析—
- (5) 行政の信頼の構造について
- (6) 先端科学研究と結びついたまちづくりは地域の発展に貢献しているか？

2017年度 (口頭発表会：2017年12月9日 京都大学楽友会館にて)

大阪大学

- (1) マスメディアによる健康・医療情報に対する公衆衛生学専門家の認識
- (2) 大学院博士後期課程在籍者の民間就職を促す要因 —文献調査とインタビュー調査による探索的研究—
- (3) クロマイ薬害裁判における専門家証人尋問録の検討 —因果関係の判定条件と規範的・価値的含意—

- (4) 雛人形及び雛人形業界における「価値体系」の整理 —現状の振興政策等の文献調査および実践者への聞き取り調査を通じて—
- (5) 科学コミュニケーション活動への参加に関する意識の調査 —サイエンスカフェ「ひとこといちば」へ参加した研究者について—

京都大学

- (1) 新聞の社説にみる環境政策のパラダイムの変化 —韓国の全国紙の社説を中心に—
- (2) 福島第一原子力発電所事故後の情報拡散状況の分析 —大規模災害時の SNS による情報発信手法の検討—
- (3) 低線量放射線の生体影響に関する科学者の意識調査 —福島第一原子力発電所事故を例に—
- (4) 地域公共交通改革の事例分析 —地域の持続的な移動手段確保に向けて—
- (5) ヒト多能性幹細胞を用いた生殖細胞研究の課題抽出と研究者の意見
- (6) 事前指示書作成支援の通知時期および方法に関する質問紙調査研究 —健康保険証発行に併せた—斉通知の実現可能性を探る—

2018年度 (口頭発表会：2018年12月8日 大阪大学中之島センターにて)

大阪大学

- (1) 大学におけるデュアルユース研究 —「対話ツール」を利用した学生との議論—
- (2) “個人の予防・健康づくりに向けたインセンティブ”制度の比較調査 —兵庫県を事例として—

京都大学

- (1) 指定難病診察ガイドラインと医学文献の特徴 —文献検索数を用いた記述研究—
- (2) 福祉政策による社会環境変化と精神障害者の QOL との関連 —統合失調症患者を対象とした既存データを用いた研究—
- (3) 塩酸リトドリンの早産予防効果 —データベースを用いた検討—
- (4) 市民と専門家のサイエンス・コミュニケーションの「成功」についての検討 —サイエンスカフェの事例分析から—

2019年度 (口頭発表会：2019年12月14日 京都大学芝蘭会館別館にて)

大阪大学

- (1) 日本の科学技術イノベーションに関する政策過程の検討—革新的研究開発推進プログラム (ImPACT) を題材として—
- (2) 生命倫理への関心度の決定要因—情報収集行動を中心に—
- (3) 博士課程進学を選択する要因の調査—大阪大学大学院生命機能研究科における事例から—
- (4) 原子力工学科・専攻の改称による人材育成への影響—大阪大学大学院工学研究科を対象として—

京都大学

- (1) 京都市営バス路線ネットワークの最適化
- (2) 農業輸出における行政の役割と課題

阪大・京大間の講師の相互派遣

実質的な教育における協力として、講師の相互派遣を積極的に行っています。京都大学の入門必修科目「現代社会と科学技術」において、大阪大学の平川秀幸教授、選択科目「医療政策の ELSI」において、加藤和人教授が講師を務めました。

また、大阪大学の選択科目「科学技術コミュニケーション入門 B」において、京都大学の荒川裕司特任講師が講師を務めました。

❖ 阪大学生の声

科学技術と政策の関わりを深く学ぶことができました。

矢谷 元春さん（工学研究科 環境・エネルギー工学専攻 博士前期課程 2年）

私は「研究プロジェクト」で「スマートシティ関連事業の府省庁連携の検証」をテーマに選びました。中央府省庁と地方自治体が取組んできたスマートシティ関連事業がどのようなものであり、府省庁連携はどのように行われたのか、また、そうした府省庁連携は中央府省庁と地方自治体にとってどのような意味があったのかを、文献調査とインタビュー調査によって分析しました。主専攻ではアスベストの健康リスク評価とアスベスト管理規制の費用対効果の分析という研究テーマに取り組んでおり、資料分析や定量的評価によって政策立案に寄与するという点で共通点がある一方、この二つの研究は進め方や論文の書き方が全く違い、まるで頭の体操をしているようでした。STiPSの先生方のきめ細かなアドバイスのおかげでしっかりと段取りを組んで進めることができました。



「研究プロジェクト」を通し、科学技術の発展により社会が急激に変化していくなかでそれぞれの立場で理想とする社会の状態が異なるということを実感しました。卒業後に国家公務員として働くことが決まっている私にとって、これは非常に大きな収穫だったと思います。

STiPSの授業だからこそ自分の力で最後まで考えぬくことができました。

久松 万里子さん（理学研究科 物理学専攻 博士前期課程 1年）

私は、学部生のときからCOデザインセンターの授業を受講していました。大学院に進学して、高度副プログラムや副専攻プログラムの存在を知り、それなら体系的に学んでみようと思いました。



STiPSの授業では、実際に起きている社会課題を扱うので、なにが正解なのかは誰にも分かりません。過去の事例から得られる知見を基に自分たちで考えていきます。先生方は私たちの活動をサポートする存在であり、私たちが考えきれていなかったり、論点がずれてしまったりしても、それを否定するのではなく「こういう考え方もある」と議論を広げる方向に導いてくれます。授業のそのような雰囲気は、私にとってとても安心できるものでした。自分の意見を言いやすくなりましたし、自分の力で考えることができたという自信も得ることができました。そして、毎回の授業で思考を重ねていくうちに、自分の考えられる範囲まで少しずつ焦点を絞ることができるようになっていきました。もしSTiPSの授業でなければ、扱うテーマが大きすぎると感じて、もうこの辺でいいか、と、考えることを止めていたかもしれません。STiPSの授業で鍛えられたと思います。

科学技術と社会について現状をどうとらえるか。議論に熱中しました。

古閑 修輝さん（薬学研究科 創成薬学専攻 博士前期課程1年）

STiPSの授業は実践的で、将来につながる経験ができ、とても楽しいです。特に印象に残っているのは「科学技術コミュニケーション演習」の授業です。3日間があっという間に過ぎてしまい、それだけ議論に熱中していたのだな、と感じました。さまざまなバックグラウンドを持つ学生同士で議論することで、自分では思い付かないような意見や発想に触れることができたと同時に、議論した内容全体を一つの結論に持っていくことが難しいとも感じました。言葉一つをとっても、その捉え方は人によって違いますし、そもそもそれぞれの捉え方が違うということ自体をお互いに理解し合うことすら難しい。僕は最近、就職活動でグループディスカッションに取り組む機会が多いので、授業でこういった経験ができたのは良かったと思っています。



また、この授業で「新型コロナウイルス感染症をめぐる科学的助言のあり方」について議論することをおして、どのように科学的助言を行うかということだけに留まるのではなく、現状をどう捉えるのか、どういった状態を目指すべきなのか、というところまで踏み込んで考える重要性に気づくことができました。

❖ 京大学生の声

開かれた学問のあり方を考え、政策研究の面白さが見えてくる

黄 海洪さん（人間・環境学研究所 共生人間学専攻 博士課程 2年）

学問の本質は未知の対象との出会いによるみずからの言語の更新にあると言われていた。多彩な学びを提供してくれるシラバスに惹かれ、STiPSへの参加を決めた。

当初、留学生である私は、学際プログラム履修コースを選んだ。一年間、専門領域の枠を超えた普遍的な知的技法である、研究テーマの絞り方、問いの立て方、研究のまとめ方、発表の仕方などを、第一線で研究を行う先生方から教わった。学問のダイナミズムの面白さ、新鮮な驚きの連続で、あっという間に一年が過ぎ去り、二年目に突入する前に、研究プロジェクト修了コースに変更



した。熱心にご指導いただいた先生方はもちろん、多くの方々に支えられて、主専攻と異なる学際的な視点から日本社会の様々な政策の在り方を問い、他専攻・他大学の方々との交流を通して、学際融合のユニークな研究を進めることができた。無知や偏見と闘い、まなざしの転換を通して見えてくる政策研究の面白さは、社会の複雑さと多元性に気づく機会となり、言葉の壁を越えるインスピレーションを与えてくれた。

学問と社会を架橋するSTiPSは、政策研究に必要な学際的知見を身につけることができ、日本社会への理解を深め、より良く知るチャンスを得られる魅力的なプログラムである。

政策・学問・人とつながる 2年間

豊本 莉恵さん（医学研究所 社会健康医学系 博士課程 2年）



学生になる前、私は助産師として病院で働いていました。働いている中で、根拠に乏しいケアや妊娠・出産・子育てをめぐる苦悩する女性たちを目にして、臨床現場と研究、政策がうまく結びついていないことを感じていました。そして、大学院に進学し研究をしながら、研究と社会をつなぐ方法を学ぶためにSTiPSを受講することにしました。

STiPSの授業には多くの著名な先生方、官僚経験のある先生方がきてくださり、それぞれのプロジェクトの裏側の話も含めどのように政策決定がされたのか、研究成果を政策に生かすためにどのようにアプローチをすべきかなど具体的な事例に基づいた話を聞き、学ぶことができました。一方で、尊厳死や動物実験、臓器移植といった倫理的・法的・社会的な問題や、「学問とは?」、「生きるとは?」といった哲学的な問いに向き合う授業があったのもSTiPSの特徴だと思います。また、教員との対話やさまざまなバックグラウンドの学生との議論を通して自身の考えをアウトプットする機会を多く得ました。さらに、STiPSで得たさまざまな先生方、学生とのつながりは私自身の財産といえます。

🍷 STiPS 修了生ネットワーキング

STiPS 修了生対象の勉強会

2020年7月31日（金）20時より、主に大阪大学の修了生を対象とした勉強会を実施しました。「教育プログラムを修了した後も、科学技術と社会のことについて学び続けたい」、「ざっくばらんに話せるような機会が欲しい」という声を受けて開催することになったものです。Zoomを使ってオンライン形式で開催しました。この日は、STiPSの修了生6人の他、大阪大学の教員3人が参加しました。

題材の論考を予め読んだ上で集まり、テーマについて意見交換するという形式をとりました。今回は、実施当時、話題になっていた接触確認アプリをテーマにしました。題材にしたのは、以下の2本です。

岸本充生、工藤郁子（2020）「接触確認アプリとELSIに関する10の視点 Ver.1.0 ～読み比べ編～」，
ELSI NOTE 4 (<https://elsi.osaka-u.ac.jp/research/443>)

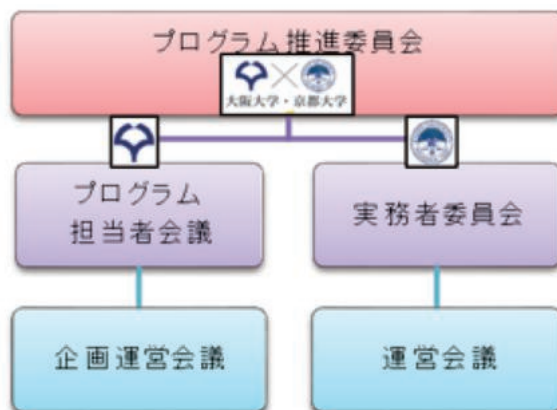
種村剛（2020）「新型コロナウイルス感染症抑制のために個人の行動を追跡することの是非：コンタクト・トレーシングアプリの社会実装に関する対話の場のための覚書」，科学技術コミュニケーション 27: 41-53 (<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/78474>)

2. プログラム推進委員会の運営

2. プログラム推進委員会の運営

❖ 実施体制

本拠点 STiPS では、教育研究プログラムを円滑かつ効率的に運営するためには、一大学内の部局間調整に加え、大阪大学と京都大学の両大学間において緊密な連携が不可欠です。これを実現するための実施体制は下記のとおりです（右図参照）。



阪大・京大会議（「プログラム推進委員会」）

2012年より、毎年3回から4回、大阪大学と京都大学の参画教員で構成される「プログラム推進委員会」を実施してきました。2020年度は計3回（5月29日、8月26日、3月にメール審議）実施しました。同会議では、両大学における調整に関する情報や教育研究プログラムの進捗状況を共有しています。加えて、合同講義の内容を含むカリキュラムの発展及び拡充、研究論文に関する指導調整、研究会やイベント開催の企画及び調整、サマーキャンプ、国際シンポジウム、出版事業などの拠点間同事業に関する調整を行っています。

各大学における参画教員会議（阪大：「プログラム担当者会議」、京大：「実務者委員会」）

本教育研究プログラムを実施するためには、上述のプログラム推進委員会とは別途、各大学内の部局間調整が不可欠です。そのため、大阪大学と京都大学それぞれにおいて、構想調書時のメンバーやプログラムに新たに科目提供頂いた教員で構成されるプログラム参画教員の会議を開催しています。同会議では、プログラム進捗状況を参画教員で共有するとともに、プログラム履修者の確定や修了者の確定、カリキュラムの調整などを行っています。

各大学におけるワーキンググループ（阪大：「企画運営会議」、京大：「運営会議」）

大阪大学・京都大学合同で開催するプログラム推進委員会や各大学における参画教員会議の議題調整や細かな決定事項を遂行するために、大阪大学と京都大学では、それぞれワーキンググループを設けています。メンバーは、大阪大学では主にCOデザインセンターの教員、京都大学では主に「政策のための科学ユニット」教員です。合同拠点として開催するイベントの内容や報告・公開する文言の調整、プログラム推進委員会や参画教員会議の議題調整、他拠点との細かな連絡調整などを、同ワーキンググループが担い、迅速かつ効率的な運営と意思決定を実現しています。

❖ アドバイザー会議

以上の実施体制に加えて、本拠点 STiPS は発足当初より、その教育研究プログラムの運営向上を目的として、有識者から構成される「アドバイザー会議（アドバイザー・ボード）」を設置しています。

第二期アドバイザー・メンバーは下記の5名です。

- ・村尾 和俊 NTT 西日本 相談役
- ・五十嵐 仁一 ENEOS 総研株式会社 代表取締役社長
- ・元村 有希子 毎日新聞社 論説委員
- ・大岡 敏孝 衆議院議員 自民党
- ・熊野 正士 参議院議員 公明党

2020年度は12月12日に、オンラインにてアドバイザー会議を開催しました。教育研究活動や今後の人材育成のあり方について、忌憚のないご意見をいただくとともに、アドバイザーとしての貴重な評価をいただきました。

❖ カリキュラムの発展及び拡充

カリキュラムの科目内容については、本教育プログラム開始以来、さらなる充実を目指して、新たな科目の開設や科目名称変更などを行ってきました。その際、特に心がけてきたことは、講師の相互派遣などを含む大阪大学と京都大学の授業の連携強化です。また、講義は基本的にディスカッションやグループワークを組み込んだものとし、ゲスト講師としては他大学・研究機関などの研究者、省庁や企業、NGOなどの実務者を幅広く招へいしました。対象とする科学技術分野も、生命・医学、原子力やエネルギー、ナノテクノロジー、環境、開発、都市工学、情報通信技術、宇宙などへと拡大してきました。

大阪大学では、本プログラム開始の2013年度の開講科目数は21、うち新設科目数は7でしたが、2014年度の開講科目数は30、うち新たに追加した科目数は9となりました。2015年度の開講科目数は29、2016年度の開講科目数は32でした。2017年度には、4学期制の導入に伴い、開講科目を一部リニューアルした結果、開講科目数は36になり、2018年度の開講科目数は37、2019年度の開講科目数は40、そして、2020年度の開講科目数は40でした。京都大学では、本プログラム開始の2013年度の開講科目数は22、うち新設科目数は5でしたが、2014年度の開講科目数は1科目追加し23科目となり、2015年度の開講科目数は23、2016年度の開講科目数は25、2017年度の開講科目数は23、2018年度の開講科目数は27、そして、2019年度の開講科目数は28、そして、2020年度の開講科目数は30でした。

また、大阪大学副専攻プログラムと京都大学研究科横断型教育プログラム（ともに修了要件14単位以上）が定める修了要件を満たした学生には、2014年度より、プログラム責任者、大阪大学総長、京都大学総長連名の修了認定証を授与しました。これは、2013年3月27日に両大学の総長名で締結されました「科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業「公共圏における科学技術・教育研究拠点」教育プログラム実施に伴う大阪大学と京都大学との間における単位の相互認定に関する協定書および覚書」に基づいています。2013年度より、この協定に基づき、受入大学の指定する授業科目の履修及び単位の修得を学生が希望するときは、当該授業科目の履修及び単位の修得ができるようになっています。

❖ 研究会やイベント開催の企画及び調整

ここでは実施イベント一覧を示します。各イベントについては、「4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施」と「6. 関西ネットワークの発展」を参照ください。

名称	日時	実施形態／ 場所	主催等
「公共圏における科学技術政策」に関する研究会（STiPS Handai 研究会）			
【第 63 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2020 年度夏）」 第 1 回 日本科学未来館／科学ライター・詫摩雅子さん	2020 年 6 月 23 日	オンライン 形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター * 授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 64 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2020 年度夏）」 第 2 回 兵庫県立人と自然の博物館・三橋弘宗さん	2020 年 6 月 30 日	オンライン 形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター * 授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 65 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2020 年度夏）」 第 3 回 朝日新聞 科学医療部 記者・合田禄さん	2020 年 7 月 7 日	オンライン 形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター * 授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 66 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2020 年度夏）」 第 4 回 京都大学 iPS 細胞研究所 国際広報室・和田濱裕之さん	2020 年 7 月 14 日	オンライン 形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター * 授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 67 回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2020 年度夏）」 第 5 回 科学コミュニケーター（フリーランス）・本田隆行さん	2020 年 7 月 21 日	オンライン 形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター * 授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催。
【第 68 回 STiPS Handai 研究会】	2020 年 12 月 15 日	オンライン 形式	主催：STiPS

「つなぐ人たちの働き方（2020年度冬）」 第1回 読売新聞 科学医療部・中島達雄さん			共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター * 授業「科学技術コミュニケーション入門B」の一環として開催。
【第69回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2020年度冬）」 第2回 大阪大学経営企画オフィス URA・川人よし恵さん	2020年 12月22日	オンライン形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター * 授業「科学技術コミュニケーション入門B」の一環として開催。
【第70回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2020年度冬）」 第3回 京都大学 iPS 細胞研究所 医療応用推進室・荒川裕司さん	2021年 1月5日	オンライン形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター * 授業「科学技術コミュニケーション入門B」の一環として開催。
【第71回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2020年度冬）」 第4回 自然エネルギー財団 上級研究員・相川高信さん	2021年 1月12日	オンライン形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター * 授業「科学技術コミュニケーション入門B」の一環として開催。
【第72回 STiPS Handai 研究会】 「つなぐ人たちの働き方（2020年度冬）」 第5回 てつがくやさん／カフェフィロ副代表・松川えりさん	2021年 1月19日	オンライン形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター * 授業「科学技術コミュニケーション入門B」の一環として開催。
【第73回 STiPS Handai 研究会】 シリーズ科学技術×公共政策（2020年度冬） #1 原子力政策をめぐる政治過程	2020年 12月17日	オンライン形式 & 豊中キャンパス	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター * 授業「科学技術と公共政策B」の一環として開催。
【第74回 STiPS Handai 研究会】 シリーズ科学技術×公共政策（2020年度冬） #2 日本の科学技術イノベーション政策：政策立案の実際	2021年 1月7日	オンライン形式 & 豊中キャンパス	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザインセンター * 授業「科学技術と公共政策B」の一環として開催。

【第75回 STiPS Handai 研究会】 多言語コミュニケーション実践の共創 #1 機械翻訳とコミュニケーション	2021年 1月21日	オンライン 形式	主催：STiPS 共催：大阪大学マルチリン ガル教育センター、大阪大 学 CO デザインセンター
【第76回 STiPS Handai 研究会】 多言語コミュニケーション実践の共創 #2 語彙の多義性と多言語主義	2021年 1月28日	オンライン 形式	主催：STiPS 共催：大阪大学マルチリン ガル教育センター、大阪大 学 CO デザインセンター
【第77回 STiPS Handai 研究会】 多言語コミュニケーション実践の共創 #3 言語ポートフォリオとコミュニケーション ストラテジー	2021年 2月4日	オンライン 形式	主催：STiPS 共催：大阪大学マルチリン ガル教育センター、大阪大 学 CO デザインセンター
【第78回 STiPS Handai 研究会】 多言語コミュニケーション実践の共創 #4 多言語主義の実践	2021年 2月18日	オンライン 形式	主催：STiPS 共催：大阪大学マルチリン ガル教育センター、大阪大 学 CO デザインセンター
【第79回 STiPS Handai 研究会】 シリーズ科学技術×公共政策（2020年度 冬） 特別版 米国の国家安全保障宇宙政策	2021年 3月11日	オンライン 形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザイ ンセンター
SpringX 超学校			
【ビジネスとアカデミアのタッグで挑む、 攻めの ELSI】第1回「ELSI を意識した、デ ータビジネスのためのガイドライン」	2021年 2月1日	オンライン 形式	主催：大阪大学 社会技術共 創研究センター、STiPS、一 般社団法人ナレッジキャピ タル
【ビジネスとアカデミアのタッグで挑む、 攻めの ELSI】第2回「メルカリ R4D が目 指す“レスポンシブルな”研究開発スタイルと は？」	2021年 2月17日	オンライン 形式	主催：大阪大学 社会技術 共創研究センター、 STiPS、一般社団法人ナレ ッジキャピタル
【ビジネスとアカデミアのタッグで挑む、 攻めの ELSI】第3回「ELSI というビッグウ ェーブ、乗り越えさせるか？ のみ込まれる か？」	2021年 3月3日	オンライン 形式	主催：大阪大学 社会技術 共創研究センター、 STiPS、一般社団法人ナレ ッジキャピタル
市民参加型ワークショップ			
市民参加型ワークショップ「感染症対策に 使われる情報技術と、わたしたちのくら し」	2020年 8月22日	オンライン 形式	主催：STiPS 共催：大阪大学 CO デザイ ンセンター、大阪大学 社 会技術共創研究センター

市民参加型ワークショップ「ちょっと未来のヒトの移動 ～続 感染症対策に使われる情報技術～」	2021年 2月19日	オンライン 形式	主催：大阪大学 社会技術 共創研究センター、STiPS 共催：大阪大学 CO デザイン センター など
市民参加型ワークショップ「ちょっと未来の食生活～ゲノム編集食品から考えてみる～」	2021年 2月20日	オンライン 形式	主催：大阪大学 社会技術 共創研究センター、STiPS 共催：大阪大学 CO デザイン センター など
共進化実現プロジェクトの一環として開催			
「フォーサイト・デザイン・ワークショップ（バックキャスト的アプローチ）」	2020年 11月25日	オンライン 形式	主催：SciREX 共進化実現 プロジェクト「新興・融合 科学領域における『予見・ 分析手法』の検討と人的ネ ットワークの形成」
「フォーサイト・デザイン・ワークショップ（フォーキャスト的アプローチ）」	2020年 12月4日	オンライン 形式	主催：SciREX 共進化実現 プロジェクト「新興・融合 科学領域における『予見・ 分析手法』の検討と人的ネ ットワークの形成」
政策立案ワークショップ（宇宙）2020年度 第1回	2020年 9月7日	オンライン 形式	主催：SciREX 共進化実現 プロジェクト「国立研究開 発法人宇宙航空研究開発機 構（JAXA）の歴史・現 状・未来像に関する研究： 政府と民間の関係に焦点を 当てて」
政策立案ワークショップ（宇宙）2020年度 第2回	2021年 3月16日	オンライン 形式	主催：SciREX 共進化実現 プロジェクト「国立研究開 発法人宇宙航空研究開発機 構（JAXA）の歴史・現 状・未来像に関する研究： 政府と民間の関係に焦点を 当てて」

その他			
第3回 SciREX オープンフォーラム「科学技術イノベーション政策の新展開」、シリーズ第4回 EBPM に向けた自治体との連携による健康データの活用	2021年 1月21日	オンライン 形式	企画：京都大学 STiPS
第3回 SciREX オープンフォーラム「科学技術イノベーション政策の新展開」、シリーズ第8回 リスクガバナンスとコミュニケーションの新展開－新興感染症、自然災害、気候変動への複合的対応－	2021年 2月16日	オンライン 形式	企画：東京大学 STIG、大阪大学 STiPS

3. SciREX 事業への参画

3. SciREX 事業への参画

❖ サマーキャンプへの参画

サマーキャンプは、全拠点の教員や学生が一堂に参集し、各拠点での取り組みをお互いが理解し合うとともに、共通のテーマでの討論や成果の共有、異分野交流などを行い、ネットワークを構築することを目的としています。2020年度はSTiPSが幹事校として企画を進めていたものの、新型コロナウイルス感染症が全国的に拡大している状況を受け、SciREX サマーキャンプは中止になりました。

2020年度（中止）

予定されていた実施日：2020年9月17日から19日

予定されていた会場：国立オリンピック記念青少年総合センター

主催拠点：政策研究大学院大学、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

参考資料：過去のサマーキャンプの情報

2013年度

実施日：2013年8月23日から25日（事前ワークショップは、8月21日）

会場：オークラフロンティアホテルつくば（茨城県つくば市）

主催拠点：政策研究大学院大学 科学技術イノベーション政策プログラム（GIST）

学生グループワークの設計：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

参加者数：大阪大学からは学生7人と教員3人、京都大学からは学生6人と教員5人

2014年度

実施日：2014年8月31日から9月2日（事前ワークショップは、8月27日）

会場：淡路島夢舞台国際会議場（兵庫県淡路市）

主催拠点：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

参加者数：大阪大学からは学生7人と教員9人、京都大学からは学生9人と教員6人

2015年度

実施日：2015年8月21日から8月23日（事前ワークショップは、8月19日）

会場：名鉄犬山ホテル（愛知県犬山市）

主催拠点：東京大学 科学技術イノベーション政策の科学教育プログラム（STIG）

参加者数：大阪大学からは教員4人および学生7人、京都大学からは学生5人と教員4人

2016年度

実施日：2016年9月15日から17日（事前ワークショップは、9月9日）

会場：松島一の坊（宮城県宮城郡松島町）

主催拠点：一橋大学 イノベーションマネジメント・政策プログラム（IMPP）

参加者数：大阪大学からは学生8人と教職員5人、京都大学からは学生10人と教員5人

2017年度

実施日：2017年8月20日から22日（事前ワークショップは、8月9日）

会場：政策研究大学院大学

主催拠点：政策研究大学院大学

参加者数：大阪大学からは学生5人と教員5人、京都大学からは学生6人と教員3人

2018年度

実施日：2018年8月28日から30日（事前ワークショップは、8月9日）

会場：政策研究大学院大学

主催拠点：政策研究大学院大学

参加者数：大阪大学からは学生6人と教員4人、京都大学からは学生4人と教員5人

2019年度

実施日：2019年8月26日から28日（事前ワークショップは、8月9日）

会場：政策研究大学院大学

主催拠点：政策研究大学院大学

参加者数：大阪大学からは学生14人と教員5人、京都大学からは学生6人と教員5人

🍁 サマースクールへの参画

中止になった SciREX サマーキャンプの代替イベントとして、各拠点の教員を中心とした講師陣によるウェビナーが実施されました。各拠点の取組をお互いが理解し合うとともに、成果の共有や異分野交流などを行う場として、ウェビナーの後に交流会を開催し、ネットワーク形成に取り組みました。

実施日：2020年9月19日（土）10:00～17:30

実施形態：オンライン形式

主催：SciREX 基盤的研究・人材育成拠点、SciREX センター

本拠点の教員は、2つの講義に登壇しました。

講義1「転換期における STI 政策と EBPM」 10:10～12:10

本拠点からの登壇者：川上 浩司（京都大学 教授）、佐野 亘（京都大学 教授）

講義3「危機のガバナンスにおける意思決定のエビデンスとコミュニケーション」 15:15～17:15

本拠点からの登壇者：平川 秀幸（大阪大学 教授）、八木 絵香（大阪大学 教授）

❖ 政策のための科学オープンフォーラムへの参画

第3回 SciREX オープンフォーラム「科学技術イノベーション政策の新展開」（主催：政策研究大学院大学 科学技術イノベーション政策研究センター（SciREX センター））が、2020年12月下旬～2021年3月にかけて開催されました。

本拠点は、2件のセッションに関わりました。また、他にも3件のセッションで、STiPSの教員やSTiPS修了生が登壇しました。

シリーズ第4回

タイトル：EBPMに向けた自治体との連携による健康データの活用

日時：2021年1月21日（木）18:00～19:30

場所：オンライン配信

登壇者：

川上 浩司（京都大学大学院医学研究科 教授／京都大学学際融合教育研究推進センター 政策のための科学ユニット長）

平山 直子（文部科学省初等中等教育局健康教育・食育課 課長）

三木 竜介（神戸市健康局健康企画課 健康創造担当課長）

カール・ベッカー（京都大学学際融合教育研究支援センター 特任教授）

企画：京都大学 STiPS

現在、自治体が保有する様々な健康情報の利活用に向けて基盤整備が進められている。これらの基盤整備により、人が生まれてから死亡するまでの期間における健康情報の接合が可能となる。本セッションでは、まず、基盤整備の意義を捉えるうえで重要なライフコースデータの概念を取り上げるとともに、学校検診情報の可視化をはじめとする学童期の健康情報の活用に焦点を当てる。つづいて、3つの視角から健康情報の利活用に関する取り組みに迫る。一つ目は、文部科学省初等中等教育局における「GIGAスクール構想」の推進及びコロナ禍における「学校等欠席者・感染症情報システム」とのデータ連携、二つ目はデータ活用において先進的な取り組みを実施している神戸市の事例、三つ目は終末期における意思表示のあり方及び取り組み事例である。ライフコースデータの概念にくわえて、先進的な取り組みを実施している国及び自治体の事例を交えた多角的な視点から、健康情報の利活用について今後の方向性を提示する。（企画セッションの概要より）

シリーズ第8回

タイトル：リスクガバナンスとコミュニケーションの新展開—新興感染症、自然災害、気候変動への複合的対応—

日時：2021年2月16日（火）18:00～20:00

場所：オンライン配信

登壇者：

田中 幹人（早稲田大学 政治経済学術院 准教授）

森川 想（東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻講師／政策研究大学院大学 SciREX センター特任フェロー）

江守 正多（国立環境研究所 地球環境研究センター 副センター長）

パネリスト：

城山 英明（東京大学公共政策大学院／法学政治学研究科 教授）

平川 秀幸（大阪大学 CO デザインセンター 教授）

司会：

松尾 真紀子（東京大学公共政策大学院 特任准教授）

企画：東京大学 STIG、大阪大学 STiPS

今日、グローバル化やインフラシステムの相互依存の増大といった多様な環境要因の変化により、社会が直面するリスクは複合化の様相を呈しています。こうした複合的な事態にいかに対応し、レジリエントな社会を構築するかは、ガバナンス上大きな課題といえます。そこで、本セッションはこの問題を考えるため、日本が直面した（している）分野の異なる3つの複合リスク—新興感染症、自然災害、気候変動、を取り上げます。各分野を横断的に比較検討することにより、各リスクの特性・スコープ等の差異と共通点を導出し、求められるガバナンスやリスクコミュニケーションのありかたを議論します。ガバナンス上は、科学的エビデンスと政策決定の課題（評価と管理の分離・相互作用の実態、制度の横連携を阻害する行政上・研究上の要因）といったことが議論の対象として想定されます。また、コミュニケーションでは科学的知見・リスクを社会にどう伝えるかといったことはもちろんのこと、人々がいかに自分事としての認識共有をどうするか、といった課題も取り上げます。（企画セッションの概要より）

❖ 他拠点への講師派遣

他拠点への講師派遣も積極的に行っています。大阪大学の平川秀幸教授が東京大学、九州大学での講義を行いました。2020年10月24日（土）には、九州大学 科学技術イノベーション政策教育研究センター（CSTIPS）が提供している科目「科学技術社会論概説」において、STiPSの教育カリキュラムを紹介した上で、科学技術社会論（STS）については、リスクの問題を中心に科学技術の公共的問題とそのガバナンスについて論じるとともに、責任ある研究・イノベーション（RRI）の概要を紹介しました。また、2020年12月9日（水）、東京大学 科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」教育・研究ユニット（STIG）が提供している科目「事例研究（科学技術イノベーション政策研究）」において、リスクの問題を中心に科学技術の公共的問題とそのガバナンスについて論じました。

❖ コアコンテンツ作成、行政官研修への講師派遣

「科学技術イノベーション政策の科学」コアコンテンツの作成として、これまでに主に第3章「科学技術イノベーションと社会」の執筆を担当しましたが、引き続き、コアコンテンツに関する今後の取り組みについて、コアカリキュラム編集委員会や運営委員会等での議論に参加しました。

2021年1月19日に行われた科学技術イノベーション政策に関する行政官研修には大阪大学の小林傳司教授が講師として参加し、科学技術イノベーションと社会、ガバナンスについての講義を行いました。

4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

4. 公共的関与に関わる基盤的研究の実施

本拠点 STiPS は、「科学技術の倫理的・法的・社会的課題（ELSI）に関する研究を基盤として公共的関与の活動と分析を行い、学問諸分野間ならびに学問と政策・社会の間をつなぐことを通じて政策形成に寄与できる人材」の育成を目的としています。こうした人材育成プログラムの目的を達成すべく、ELSI や公共的関与に関する研究の実践的展開を図り、その成果を検証しつつさらなる研究に結びつけるために、多様な参加型イベントを実施しました。

また、公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、海外の大学機関との積極的な連携による研究を試みると同時に、そうした連携を視野に入れた海外調査及び発表等を行ってきました。2020 年度の国際連携の推進に関わる活動については、「7. 国際連携の推進」を参照ください。

❖ 阪大拠点主催：「公共圏における科学技術政策」に関する研究会 (STiPS Handai 研究会)

「公共圏における科学技術政策」に関する研究会 (STiPS Handai 研究会) では、学内外の研究者や実務家にお越しいただき、話題提供いただきます。学生だけでなく、教員も相互に学び合うことを目的としています。

第 63 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方 (2020 年度夏) #1
- ゲスト：詫摩 雅子 (日本科学未来館 科学コミュニケーション専門主任)
- 日時：2020 年 6 月 23 日 (火) 15:10~16:40
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

2020 年 6 月 23 日 (火)、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方 (2020 年度夏)」第 1 回が開催されました (授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催)。Zoom ウェビナーで開催したオンラインセミナーに 31 人が集いました。

この日のゲストは、詫摩雅子さんでした。詫摩さんは、新聞社に 20 年間近く勤めた後、2011 年から日本科学未来館に勤務されています。日本科学未来館は、来館者に先端技術をどう使っていくのかを考えてもらうような企画や展示を行う、加えて、「科学コミュニケーター」を育てて輩出していくというミッションをもっています。ここで、詫摩さんは、科学コミュニケーターの“親玉”として、若手の科学コミュニケーターがたてた企画にアドバイスをすることなどをされています。

詫摩さんは、昨今の新型コロナウイルスの感染拡大にまつわる企画の仕掛け人でもあります。今回は詫摩さんたちのチームが、どのようなスピード感で新型コロナウイルスに関する情報発信を行っていったのかを時系列に沿って (“日表”という形で) 教えていただきました。他にも詫摩さんが大事にしている「つながり」のコツについても教えていただきました。まずは、自分がつながるということです。詫摩さんは、SNS、特に Twitter を活用されているそうです。「正しく狼煙を上げることが重要」という言葉を使われていました。つまり、自分の立ち位置を明確にした上で、正しい情報を発信することで、周りの人々から適切な情報や意見をもらうことができるようになるというお話でした。そして、日々雑な仕事をしない、最後までそのトピックにつき合うということも相手に信頼されるために重要なことだということでした。詫摩さんの「自分の手に負えない案件には手を出さない」というという言葉が印象的でした。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20200623/>) に開催レポートを掲載しています。



第64回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2020年度夏）#2
- ゲスト：三橋 弘宗（兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員）
- 日時：2020年6月30日（火）15:10～16:40
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2020年度夏）」第2回は、2020年6月30日（火）にZoomウェビナーを活用して、オンライン形式で開催されました（授業「科学技術コミュニケーション入門B」の一環として開催）。大阪大学の学生を中心に34人が参加しました。



今回、「自然史博物館が創り出す新しいコミュニケーションの形」というタイトルでお話をしてくださったのは兵庫県立人と自然の博物館（通称ひとはく）の三橋弘宗さんです。大学院生の時には生態学の研究をされていたそうです。特に、河川生態系のしくみを、食物網を中心に探るというテーマを扱われていました。いまは、ひとはくの学芸員としてお仕事をされています。

三橋さんのお話の後半のトピックは、「ヒアリ」です。2017年5月に兵庫県（神戸港と尼崎市）で初めてヒアリの侵入が確認されました。ひとはくがシンクタンク機関として認知されていたこと、外来種対策関連で兵庫県といろいろなお仕事をされてきたこと、ちょうど日本生態学会の近畿地区会の会長だったこと、などが重なり、三橋さんがヒアリの対応の中心的な役割を担うことになりました。このような事態になった時、役所だけで危機管理を乗り切るのはなかなか難しいので、市民も含めた小さく柔軟で重層的なネットワークが不可欠であるということを示したい、ということを考えながら、対応されていたそうです。

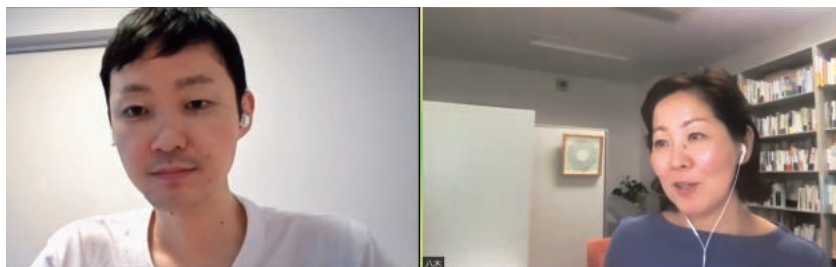
お話の最後、三橋さんは「キュレーション」の大切さを強調されていました。博物館の「つなぐ」仕事をするには、基本的な広い学術知識が必要でもおっしゃっていました。「もっとも基礎的なことが最も役に立つ」土台や原理をしっかりと知っていることが大切という三橋さんの言葉が印象的でした。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20200630/>) に開催レポートを掲載しています。

第 65 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2020 年度夏）#3
- ゲスト：合田 祿（朝日新聞東京本社 科学医療部 記者）
- 日時：2020 年 7 月 7 日（火）15:10～16:40
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2020 年度夏）」第 3 回は、2020 年 7 月 7 日（火）に Zoom ウェビナーを活用して、オンライン形式で開催されました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。大阪大学の学生を中心に 34 人が参加しました。



この日のゲストは、朝日新聞の合田祿さんでした。合田さんは、基礎研究から、応用や臨床研究まで、健康や医療に関わる話題について幅広い記事を執筆されています。4 月からは新型コロナウイルスに関する取材をしていらっしゃいます。刻々と移りゆく状況をどのように捉え、どのようなことに気をつけながら発信されているのか、マスメディアが果たすべき役割とは何か、など、お話をうかがいました。

新型コロナウイルスについて取材するといっても取材先は多様です。主に、行政機関（官邸、省庁、都道府県、市町村・保健所など）、市民（患者、事業者など）、科学者コミュニティ（専門家会議、諮問委員会、学会、研究者など）、病院（日本医師会、感染症指定病院、市中の病院、医師・専門医など）が挙げられます。それぞれの取材先を、新聞社の政治部、科学医療部、経済部、国際報道部、社会部、地域報道部、文化暮らし報道部といったそれぞれの部に所属する記者がお互いに連絡を取り合いながら担当しているそうです。科学医療部だから科学者だけを取材するというわけではなく、患者さんにお話を聞くこともあれば、官邸に取材に行くこともあるというお話でした。実際に掲載された新聞記事を示しつつ、科学記者が具体的にどのような内容を扱っているのか紹介していただきました。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20200707/>) に開催レポートを掲載しています。

第 66 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2020 年度夏）#4
- ゲスト：和田濱 裕之（京都大学 iPS 細胞研究所（CiRA）国際広報室 特定研究員）
- 日時：2020 年 7 月 14 日（火）15:10～16:40
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

2020 年 7 月 14 日（火）、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2020 年度夏）」第 4 回が実施されました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 38 人が参加しました。

この日のゲストは、京都大学 iPS 細胞研究所の和田濱裕之さんでした。サイエンスコミュニケーターとして働く和田濱さんは、プレスリリースや刊行物の作成、メディア対応、一般向けイベントや国際シンポジウムの企画、そして SNS を使った発信、所内交流に至るまでさまざまな業務に関わっています。最近では新型コロナウイルスに関する情報発信や問い合わせへの対応もしています。普段は、iPS 細胞研究と社会をつなぐというお仕事をされている和田濱さんと一緒に、いま社会に発信されるべき情報とは何だろう？それはどのように作られるのだろうか？ということを考えてみました。

後半は、山中伸弥先生による新型コロナウイルス情報発信にまつわるお話でした。普段、CiRA 国際広報室の 1 員として、山中伸弥先生や CiRA の情報発信に関わる立場にいる和田濱さんの視点から見た現状や課題について教えていただきました。

最後に、広報に関わる立場にいる「つなぐ人」として、普段意識していることは、研究成果を一方向的に発信するだけでなく、「研究者側にも何らかのリターンをもたらす」こと、とお話してくださいました。ここでのリターンとは、先ほどの山中伸弥先生の情報発信のように、研究者が社会へ情報発信をする過程で得られる気付きとのことで、そのような気付きが研究者の新たな研究のヒントにつながればうれしいとのことでした。

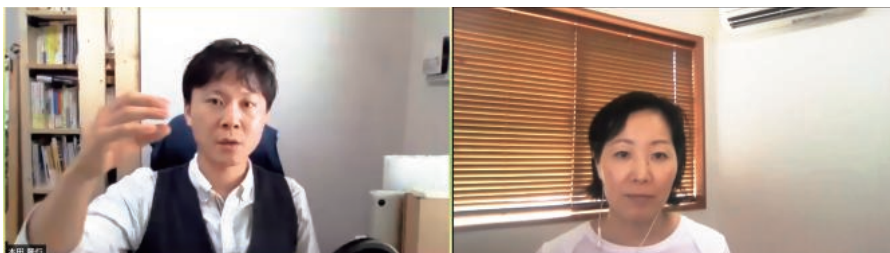
STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20200714/>) に開催レポートを掲載しています。



第 67 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2020 年度夏）#5
- ゲスト：本田 隆行（科学コミュニケーター（フリーランス））
- 日時：2020 年 7 月 21 日（火）15:10～16:40
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

2020 年 7 月 21 日（火）、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2020 年度夏）」第 5 回が実施



されました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。Zoom ウェビナーを活用し、オンライン形式で開催したこの回には、大阪大学の学生を中心に 32 人が参加しました。

今回のゲストは、科学コミュニケーターの本田隆行さんでした。一口に科学コミュニケーターと言ってもいろいろな立場がありますが、本田さんはどこの組織にも所属していないフリーランスであるという点で、他の方とは一線を画しています。本田さんのバックグラウンドについて、また、なぜフリーランスの科学コミュニケーターになろうと思ったのか、どのような姿勢で科学コミュニケーションにのぞんでいるのか、などお話しいただきました。

本田さんは「科学コミュニケーション」や「科学コミュニケーター」はまだまだ知名度が低いことも実感しつつ、科学コミュニケーションに関わるお仕事を続けるために、自分の強みと社会のニーズとを適切に捉えて何ができるか決定したり、状況を把握したりする力が重要だと強調されていました。

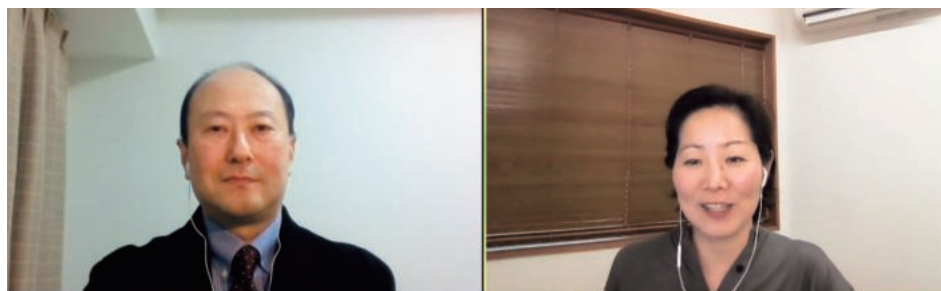
本田さんのお話を聞いて、状況判断を怠らずに適切な行動指針を持ち続けること、自身が強みとする要素を複数持っていることがとても重要だと感じました。社会の分断が叫ばれる今日、本田さんが目指したような「間」をつなぐ活動は、大きな価値があると思います。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20200721/>) に開催レポートを掲載しています。

第 68 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2020 年度冬）#1
- ゲスト：中島 達雄（読売新聞大阪本社 科学医療部 次長）
- 日時：2020 年 12 月 15 日（火）15:10～16:40
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

2020 年 12 月 15 日（火）、セミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2020 年度冬）」が始まりました。本シリーズは授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環としてウェビナー形式で開催され、全 5 回にわたり、科学技術と社会をつなぐ実践者にお話を伺っていきます。初回は、20 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。



今回のゲストは、読売新聞の中島達雄さんでした。中島さんは、理工学部を卒業された後、読売新聞社に入社し、東京の科学部や大阪の科学医療部で記者として取材や記事の執筆をされてきました。その傍らで、大学院に入学して、原子力事故報道の特徴について研究し、学位も取得されています。今回は、科学医療部で日々どのようなお仕事をされているのか、大学院で学んだことをどう活かしているのかなどをお伺いしました。

終盤には、「科学は、必ずしも「正解」があるものではなく、むしろ正解がないことの方が多い。時には、最新の研究結果によって、今まで書いてきた記事が間違いになってしまうこともある」というお話もありました。他にも、記事を執筆する時には、言葉を慎重に選んでいる、とのこと。どんな言葉も人によって微妙に異なるニュアンスで受け止められます。学術用語の中には専門家によって定義に差があり、複数の専門家に確認を取らなければならない場合もあるそうです。

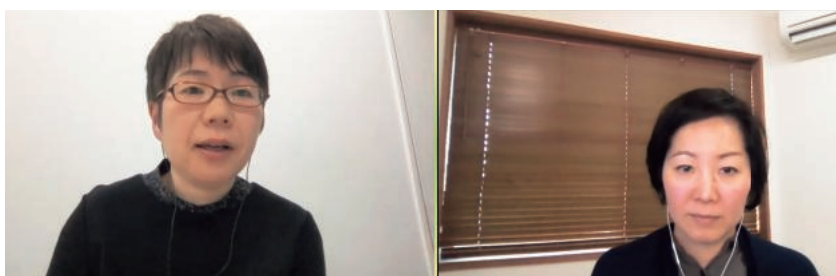
博士課程では工学系の専攻に在籍しつつ、人文社会系の研究テーマ（記事のニュース価値について）に取り組むなど、まさに社会と科学技術とのはざままで活動され続けている中島さんのお話しはとても興味深く、90 分という授業時間はあっという間に過ぎていきました。学生からの質問にも丁寧にお答えいただきました。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20201215/>) に開催レポートを掲載しています。

第 69 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2020 年度冬）#2
- ゲスト：川人 よし恵（大阪大学経営企画オフィス URA 部門 チーフ・リサーチ・アドミニストレーター／社会ソリューションイニシアティブ企画調整室員）
- 日時：2020 年 12 月 22 日（火）15:10～16:40
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2020 年度夏）」の第 2 回が、2020 年 12 月 22 日（火）に開催されました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。Zoom ウェビナーで開催したオンラインセミナーに 22 人が参加しました。



今回のゲストは、大阪大学で URA としてお仕事をされている川人よし恵さんです。URA とはどんなことをしている人？ 研究（特に、人文・社会科学系の研究）と社会をつなぐ仕事って？ 具体的な活動内容をご紹介いただきながら、研究と社会を「つなぐ」ために大切にしなければならないことについてお話しいただきました。

URA といっても、その業務内容は多岐にわたっていて、研究者の外部資金の獲得支援、研究プロジェクトの企画やその支援、研究情報の発信支援など様々です。大学での研究というと、いわゆる理工系分野の研究がイメージされがちかもしれませんが、川人さんは人文社会科学系、いわゆる文系の研究支援に関して精力的な活動をなさっています。

「研究」と「社会」を「つなぐ」ことについての川人さんのお考えについても紹介していただきました。「研究と社会は本来つながっているものだけれど、そのつながりがどこかで切れていたり、気付かれなかったりしている。それがカバーできればと思うが、どこからどこまでつないだら良いのだろう。」こういったことが頭によぎるそうです。また、『「つなぐ」は「紡ぐ」に近い』という言葉も印象的でした。「研究と社会をつなぐという大きな目標に向けて自分にできることは限られている。だからこそ、自分が受け取ったパスを他の人に回す。団体競技のメンバーのように」と。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20201222/>) に開催レポートを掲載しています。

第70回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2020年度冬）#3
- ゲスト：荒川 裕司（京都大学 iPS 細胞研究所（CiRA）医療応用推進室 特命講師）
- 日時：2021年1月5日（火）15:10～16:40
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

2021年1月5日（火）、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2020年度冬）」の第3回が開催されました（授業「科学技術コミュニケーション入門B」の一環として開催）。Zoom ウェビナーで開催したオンラインセミナーに22人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。

今回のゲストは、京都大学 iPS 細胞研究所（CiRA）の荒川裕司さんです。大学院修了後に日本科学未来館の科学コミュニケーターを経て厚生労働省に入省という少し変わった経歴をお持ちの荒川さん。今回は、主に厚生労働省での経験について、行政官という立場だからこそできる「科学技術と社会のつなぎ方」をお話いただきました。



荒川さんは、科学技術を社会に応用する時に生じる課題を解決するために規制や手続きを整えるお仕事をされてきました。その際、各領域の専門家、医療者、メーカーや患者等を「つなぐ」役割を担っていたとのこと。厚生労働省での仕事の魅力については、「最新の科学技術に関わることができる」と「最新の科学技術を実社会で活用していくための手伝いができる」ということを挙げていました。

また、「役所の仕事として重要なのは、民主主義のプロセスを回すことである」というお話もありました。具体的には、委員会という会議体の中で、全関係者が納得するような案を確認していく手続きをすすめていくことです（他にも、パブリックコメント、関係者やメディアとの意見交換、ときには国会での議論など）。厚生労働省として何がしたいかというよりも、厚生労働省が各ステークホルダーの意見をまとめ、利害調整を行うことの方に重きを置いているとのことでした。印象的だったのは、専門委員会の中では、多数決ではなく、基本は「全会一致」となることを目指して意見を調整するというお話でした。

参加者からは、「言葉そのままではなく、その言葉が出た背景を想う事が大切というのが印象的でした。また、医療関係のことであれば、最終的に患者さんに説明できるか、ということ判断材料にしているというのが素晴らしいなと思いました」といった感想も寄せられました。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20210105/>) に開催レポートを掲載しています。

第71回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2020年度冬）#4
- ゲスト：相川 高信（自然エネルギー財団 上級研究員）
- 日時：2021年1月12日（火）15:10～16:40
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

2021年1月12日（火）に、科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2020年度夏）」第4回を開催しました（授業「科学技術コミュニケーション入門B」の一環として開催）。Zoom ウェビナーで開催したオンラインセミナーに22人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。

今回のゲストは森林生態学・政策学をバックグラウンドに、林業やバイオマスエネルギーの「実践の現場」と「政策・学術の現場」を行き来しながら活動されている相川高信さんです。複雑化する現代社会の中では、森林に求められる価値や機能も大きく変わってきます。人と森林とのよりよい関わり方を求めて、専門性や立場が違う人たちと協働していくためには、どんな人材が求められているのでしょうか。また、個人としての専門性をどのように深めていけばいいのかについても、お話いただきました。

不確実性が高い今の時代だからこそ、自分の興味の種類を深掘りしていかなければならない。一方で、ご自身の経験から、「自分が『やりたいこと』をやるよりも、他者から『やってほしい』と求められた仕事をする方が良いこともある」というお話もありました。だからこそ、自分自身でしっかり考えてほしい、というメッセージをいただきました。

相川さんによる話題提供の後、質疑応答の時間には、多くの質問やコメントが寄せられました。シンクタンクで働いたり、コンサルタント業務を行ったりする上での相川さんのスタンスについて、また、業種間移動の実情について、「音楽を鳴らす人」としての考え方についてなどに関する質問がありました。業界で多様な経験を積んできた相川さんの独自の視点や信条を垣間見る事ができました。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20210112/>) に開催レポートを掲載しています。



第 72 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：つなぐ人たちの働き方（2020 年度冬）#5
- ゲスト：松川 えり（てつがくやさん／カフェフィロ副代表）
- 日時：2021 年 1 月 19 日（火）15:10～16:40
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

科学技術と社会のあいだで活躍する実践者から学ぶセミナーシリーズ「つなぐ人たちの働き方（2020 年度冬）」第 5 回は、2021 年 1 月 19 日（火）に Zoom ウェビナーを活用して、オンライン形式で開催されました（授業「科学技術コミュニケーション入門 B」の一環として開催）。大阪大学の学生を中心に 22 人（スタッフや授業の受講生も含む）が参加しました。



今回のゲストはてつがくやさん／カフェフィロ副代表の松川えりさんです。松川さんは、阪大文学研究科に在籍していた頃からこれまでに、哲学カフェや対話セミナーのファシリテーターを数多く務めていらっしゃいます。この日は、フリーランスの哲学者として生きる松川さんから、阪大でどのようなことを学び、それをいまどのように活かしているのかをお伺いしました。

松川さんは、哲学対話の特徴は「知らないことを知るのではなく、知っていることを改めて問い直すこと」と考えていらっしゃいます。知識を伝達することではなく、立場の違う誰もが対等に話し合い、学びあうこと。問題の解決方法を探るというよりは、本当の問題は何なのか、じっくり時間をかけて考えること。それこそが哲学対話だそうです。

特任研究員時代に、自分にできるのは、哲学の特徴（前提を問い直す）を活かして、専門家と非専門家、異なる専門領域をつなぐことだと気づかされました。それがフリーランスの「てつがくやさん」としての松川さんの始まりだったそうです。

哲学が「やりたい人が趣味としてやるもの」というだけでなく、社会の中で実際に必要とされる形で力になれること、必要とする人と繋がれること。これからもそんな哲学のあり方を模索することが、「てつがくやさん」として働く中での研究テーマだと締め括られていたのが印象的でした。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20210119/>) に開催レポートを掲載しています。

第73回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：シリーズ科学技術×公共政策（2020年度冬） #1 原子力政策をめぐる政治過程
- ゲスト：上川 龍之進（大阪大学大学院法学研究科 教授）
- 日時：2020年12月17日（木）15:10～18:20
- 実施形態：ハイブリッド形式（オンライン&対面）
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

2020年12月17日（木）に、科学技術に関する公共政策の特徴を、具体例を通じて学ぶセミナーシリーズ「科学技術×公共政策（2020年度冬）」の第1回を開催しました（授業「科学技術と公共政策B」の一環として開催）。

この日は、講師や授業の履修生の一部のみ、豊中キャンパスの教室に集い、セミナーの参加者はオンラインでの参加となりました。授業の受講生に加えて、大阪大学の教職員や学生など計17人が参加しました。



研究会の前半は、上川先生がご著書『電力と政治』に執筆されたことをベースにしながら、原子力政策をめぐる政治過程について話題提供をいただき、後半は質疑応答とディスカッションを行いました。

参加者からは様々な質問が出されました。例えば以下のようなものです。

- ・原発がつくられる地域の地方自治体や住民の意思をどう考えたらよいのか。
- ・3.11前、日本原子力学会などは、電力会社や官庁に対してどのようなスタンスだったのか。
- ・官民一体で国策として原発を推進する「電源三法」のようなやり方はどのようにしてつくられたのか。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20201217/>) に開催レポートを掲載しています。

第74回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：シリーズ科学技術×公共政策（2020年度冬） #2 日本の科学技術イノベーション政策：政策立案の実際
- ゲスト：新井 知彦（スポーツ庁 国際課長）
- 日時：2021年1月7日（木）15:10～18:20
- 実施形態：ハイブリッド形式（オンライン&対面）
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

2021年1月7日（木）に、科学技術に関する公共政策の特徴を、具体例を通じて学ぶセミナーシリーズ「科学技術×公共政策（2020年度冬）」、第2回「日本の科学技術イノベーション政策：政策立案の実際」を開催しました（授業「科学技術と公共政策 B」の一環として開催）。

この日は、講師や授業の履修生の一部のみ、豊中キャンパスの教室に集い、セミナーの参加者はオンラインでの参加となりました。授業の受講生に加えて、大阪大学の教職員や学生など計15人が参加しました。



第2回のゲストは、文部科学省の新井知彦さんをお迎えしました。現在、スポーツ庁 国際課長を務めていらっしゃいます。

研究会の前半は、新井さんがこれまでに経験されてきた、日本の科学技術イノベーション政策、核融合等の国際プロジェクト、東日本大震災からの復興プロジェクト、大使館業務、スポーツ庁での国際業務などをご紹介いただきました。

後半は質疑応答とディスカッションを行いました。参加者からは様々な質問が出されました。例えば以下のようなものです。

- ・日本の科学技術予算の半分を文部科学省が占めているが、いろいろな省庁が予算を持つ方が科学技術政策を多様にする意味でよい、ということはないのか。
- ・日本、米国、ロシア、カナダ、欧州諸国が参加している国際宇宙ステーション（ISS）運用延長の行政文書に、日米同盟の政治的重要性について言及した部分があるというお話だったが、このような文書に政治的表現を使うことはよくあることなのか。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20210107/>) に開催レポートを掲載しています。

第 75 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：多言語コミュニケーション実践の共創 #1 機械翻訳とコミュニケーション
- メインファシリテーター：工藤 充（大阪大学 CO デザインセンター 特任講師）
- 日時：2021 年 1 月 21 日（木）13:30～14:30
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学マルチリンガル教育センター、大阪大学 CO デザインセンター

2021 年 1 月 21 日（木）に、オンライン対話プログラム「多言語コミュニケーション実践の共創（Co-creation of Multilingual Communication Practice）」がスタートしました。

今回企画された「多言語コミュニケーション実践の共創」は全 4 回。当初は、豊中キャンパス サイバーメディアセンター4 階にある「OU マルチリン

ガルプラザ」で開催を予定していたのですが、1 月 13 日付で発表された大阪大学の活動基準の見直しに伴い、Zoom を使ったオンライン開催に切り替えて実施しました。

初回「機械翻訳とコミュニケーション（Machine translation and communication）」には、企画に関わっている教員 4 人と参加申し込みのあった学生 5 人など計 10 人が集いました。この日のメインファシリテーターは、CO デザインセンターの工藤充特任講師が担当しました。

「言語に興味があり、さらに、少人数でいろいろ話ができるというので参加した」、「留学や国際学会での発表の経験を経て、多言語に興味を持った」という学生や、「博士課程での研究に直結するテーマだったので」という大学院生が参加をしていました。

「機械翻訳」は、私たちの生活、今回は特に大学での学生生活（例えば、レポートを書くとき、自己紹介するとき、など）をどのように変えていくのだろうか？ そんなことを、実際の体験を通じて考える 1 時間になりました。この会自体は、14 時半で一旦終了したのですが、その後も、参加者の一部が残り、言葉のあれこれを楽しく話す場になっていました。

今日のセッションの趣旨

「機械翻訳」という技術によって、こうした課題に取り組むことが容易になっているのだろうか。

もしくは、「機械翻訳」は、私たちのコミュニケーション上の課題解決に資するというだけではなく、コミュニケーションのあり方そのものを変えていくことになるのだろうか。

日本語と英語で試しながら、考えてみましょう。

Aim of this seminar series

Is the technology of "machine translation" making it easier for us to tackle these issues?

Or will "machine translation" not only help us solve our communication problems, but also change the way we communicate?

Think about it as you try it out in Japanese and English.

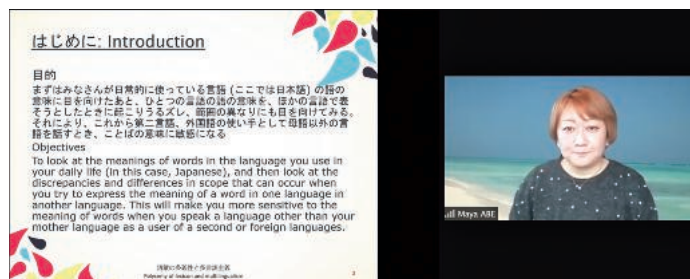
(DeepL)

6

第76回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：多言語コミュニケーション実践の共創 #2 語彙の多義性と多言語主義
- メインファシリテーター：安部 麻矢（大阪大学マルチリンガル教育センター特任講師）
- 日時：2021年1月28日（木）13:30～14:30
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学マルチリンガル教育センター、大阪大学 CO デザインセンター

2021年1月28日（木）に、オンライン対話プログラム「多言語コミュニケーション実践の共創（Co-creation of Multilingual Communication Practice）」の第2回「語彙の多義性と多言語主義（Polysemy of lexicon and multilingualism）」を開催しました。



メインファシリテーターは、マルチリンガル教育センターの安部麻矢特任講師でした。企画に関わっている教員4人と参加申し込みのあった学生7人（+STiPSスタッフ1人）の計12人が集まりました。

安部さんが日々使っている言語は、日本語、英語、スワヒリ語。とのこと。今日の参加者のみなさんも、このテーマに興味をもってきた方々だけあって、多言語を操る（操りたいと思っている）人ばかりでした（さすが!）。

- ・同じ「行く」でも、ドイツ語だと、乗り物によって、別の動詞が使われる、とか。
- ・ロシア語も、例えば、同じ「使う」で、複数の動詞を使い分けたりすることがあるよ、とか。
- ・どこからが「怒ってる」っていうかは、日本語（いらっとしてるぐらい）とスワヒリ語（激怒してるぐらい）で違う!とか。
- ・「ししとう」と「ピーマン」は、中国語では同じ単語なのだって。とか。

言語によって、指す範囲が違ったり、意味がちがったり。こんないろいろな経験談を語り合う時間でした。

第 77 回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：多言語コミュニケーション実践の共創 #3 言語ポートフォリオとコミュニケーションストラテジー
- メインファシリテーター：瀬井 陽子（大阪大学国際教育交流センター特任助教）
- 日時：2021年2月4日（木）13:30～14:30
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学マルチリンガル教育センター、大阪大学 CO デザインセンター

2021年2月4日（木）に、オンライン対話プログラム「多言語コミュニケーション実践の共創（Co-creation of Multilingual Communication Practice）」の第3回「言語ポートフォリオとコミュニケーションストラテジー（Language portfolio and communication strategy）」を開催しました。

メインファシリテーターは、国際教育交流センターの瀬井陽子特任助教でした。企画に関わっている教員4人と、参加申し込みのあった学生5人の合計9人が集いました。



セッションの冒頭では、議論する上で有効なツール・考え方として、言語ポートフォリオとコミュニケーションストラテジーの2つについての紹介がありました。言語ポートフォリオとは、自分が使うことのできる言語の能力を、読む、聞く、書く、話すといった技能ごとに自己評価したものです。コミュニケーションストラテジーとは、コミュニケーションのピンチを乗り越えるために、自分の得意な技能を用いるための戦略のことです。相手の話す言葉が聞き取れないとき、「文字で書いて頂けますか？」の一言が話せると、その言語について自分の持つ語彙や知識を総動員して、なんとかピンチを乗り切れるかもしれません。

言語ポートフォリオとコミュニケーションストラテジーについての基本的な理解を得た後は、皆で議論の時間です。少人数でのグループに分かれて、また、全員で、参加者がそれぞれに想定する「ピンチ」の状況や、そこで試してみたいコミュニケーションストラテジーについて議論しました。

第78回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：多言語コミュニケーション実践の共創 #4 多言語主義の実践
- メインファシリテーター：バレット ブレンダン（大阪大学 CO デザインセンター 特任教授）
- 日時：2021年2月18日（木）13:30～14:30
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学マルチリンガル教育センター、大阪大学 CO デザインセンター

2021年2月18日（木）に、オンライン対話プログラム「多言語コミュニケーション実践の共創（Co-creation of Multilingual Communication Practice）」の第4回（最終回）「多言語主義の実践

（Multilingualism in practice）」を開催しました。



今回のメインファシリテーターは、CO デザインセンターのバレット ブレンダン（Barrett, Brendan F.D.）特任教授でした。企画に関わっている教員4人と参加申し込みのあった学生4人（+STiPS スタッフ1人）の合計9人が集いました。

「気候変動に関わる課題を扱うドキュメンタリーを多様な地域で撮影をしたい、でも、現地の人は母国語しか話せない。」という状況を考えた時に、どういう課題がありうるのだろうか？ということ、グループにわかれて考えてみました。

「もしかして“気候変動”を表す語彙や概念がその地域には無いのかもしれない？」

「映像を撮るための許可を得ることが必要なのだけど、どんな言語でそれを伝えたらいいのだろうか？」

「誰が誰に話しかけていいのか、というのも、文化によってはいろいろなハードルがあるかも??」

「インタビューに協力をしてもらった人に、出来上がったものを還元できない……」

などなど、考えてみると、いろいろなハードルが思い浮かびました。

第79回「公共圏における科学技術政策」に関する研究会

- タイトル：シリーズ科学技術×公共政策（2020年度冬）特別版 米国の国家安全保障宇宙政策
- ゲスト：ピーター・ヘイズ（米国ジョージ・ワシントン大学 客員教授）
- 進行：渡邊 浩崇（大阪大学 CO デザインセンター 特任准教授）
- 日時：2021年3月11日（木）10:10～12:00
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター

科学技術に関する公共政策の特徴を、具体例を通じて学ぶセミナーシリーズ「科学技術×公共政策（2020年度冬）」の特別版「米国の国家安全保障宇宙政策」を、2021年3月11日（木）にオンライン形式で開催しました。主に大阪大学の学生・教職員など23人（STiPS関係者も含む）が参加しました。

今回のゲストは、米国ジョージ・ワシントン大学 客員教授のピーター・ヘイズ氏です。米国の首都ワシントン DC から時差を乗り越え（当地では3/10夜）、オンラインでつないでお話しくできました。米国の国家安全保障にかかわる宇宙政策の経緯と現状について、ご所属等とは関係なく個人の見解として、その概略をお話いただきました。



話題になったのは、地上での紛争と宇宙システムの関係が切り離すことができない現状やそのようになった経緯、米国の宇宙政策の特徴です。また、衛星システムの複雑さや民間利用でも日常生活に欠かせないものとなっていること、そして、紛争を避けるための国際的な取り組みの歴史、スペースデブリ（宇宙ごみ）への対応についても紹介いただきました。

学生を中心とした参加者からは質問が複数寄せられ、ヘイズ氏からは回答やコメントをいただきました。質問としては、例えば「なぜ宇宙兵器に関する国際的な条約が成立しないのか」、「政権交代で国家宇宙会議（NSpC）が設置されなくなったとしたらどんな影響があるのか」などでした。参加者からは、「国防と宇宙という観点からの話は初めて聞いたが、とても印象的で勉強になりました」といったコメントが寄せられました。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20210311/>) に開催レポートを掲載しています。

🍷 その他

市民参加型ワークショップ「感染症対策に使われる情報技術と、わたしたちの暮らし」

- タイトル：市民参加型ワークショップ「感染症対策に使われる情報技術と、わたしたちの暮らし」@オンライン
- ゲスト：岸本 充生（大阪大学データビリティフロンティア機構 教授／社会技術共創研究センター センター長）、詫摩 雅子（日本科学未来館 科学コミュニケーション専門主任／科学ライター）
- 日時：2020年8月22日（土）13:00～15:45
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター、大阪大学 社会技術共創研究センター

2020年8月22日（土）に、市民参加型ワークショップ「感染症対策に使われる情報技術と、わたしたちの暮らし」をオンラインで開催しました。

昨年度まで実施してきた市民参加型ワークショップの進め方をベースにして、対面でのワークショップの良さをできるだけ残しつつ、また、オンライン開催のメリットも生かせるように心がけながら企画しました。一般参加者は20代から80代までの17人。1グループあたり、3～5人の一般参加者とグループファシリテータ2人で対話を進めました。



全体進行は八木絵香（大阪大学 CO デザインセンター／社会技術共創研究センター 教授）が、また、グループファシリテータは、主に STiPS で学んでいる学生や修了生が務めました。

ワークショップの流れは下記の通りです。

- 13:00- みんなで考えてみる時間「あなたは、接触確認アプリ（COCOA）を入れている？ 入っていない？ それはなぜ？」
- 14:15- ゲストからのコメント
- 14:35- 休憩
- 14:45- もう一度みんなで考えてみる時間「COCOAのような感染症対策のための情報技術が社会の中で浸透していく際に、大切にしなければならないことは何？」
- 15:35- まとめ
- 15:45 ワークショップ終了

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20200822/>) に開催レポートを掲載しています。

市民参加型ワークショップ「ちょっと未来のヒトの移動～続 感染症対策に使われる情報技術～」

- タイトル：市民参加型ワークショップ「ちょっと未来のヒトの移動～続 感染症対策に使われる情報技術～」@オンライン
- ゲスト：工藤 郁子（大阪大学 社会技術共創研究センター 招へい教員）、荒金 美知子（NEC/世界経済フォーラム第四次産業革命日本センター コラボレーター）
- 日時：2021年2月19日（金）18:30～21:00
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）、大阪大学 社会技術共創研究センター
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター
- 後援：JST-RISTEX『科学技術の倫理的・法制度的・社会的課題（ELSI）への包括的実践研究開発プログラム』『携帯電話関連技術を用いた感染症対策に関する包括的検討』（研究代表者：東京大学 米村滋人）
- 協力：大阪大学共創機構 社会学共創部門

2021年2月19日（金）に、市民参加型ワークショップ「ちょっと未来のヒトの移動～続 感染症対策に使われる情報技術～」をオンラインで開催しました。

昨年度まで実施してきた市民参加型ワークショップの進め方をベースにして、対面でのワークショップの良さをできるだけ残しつつ、また、オンライン開催のメリットも生かせるように心がけながら企画しました。一般参加者は20代から60代までの16人。1グループあたり、3～5人の一般参加者とグループファシリテータ2人で対話を進めました。



ワークショップは、グループで対話をした後、全体で各グループの議論内容を共有するというスタイルで実施しました。専門家からのコメントや情報共有なども交えながら、前半は主に自分や家族など身近な視点から考える、後半は社会や世界全体に視野を広げて考えるという形で話し合いを進めました。

全体進行は八木絵香（大阪大学 CO デザインセンター／社会技術共創研究センター 教授）が、また、グループファシリテータは、主に STiPS で学んでいる学生や修了生が務めました。

*このワークショップは、公益財団法人倶進会 科学技術社会論・柿内賢信記念賞（実践賞）「新型コロナウイルス感染症対策アプリに関するリアルタイム・テクノロジーアセスメントの実践と応用（工藤郁子）」、及び、厚生労働行政推進調査事業費補助金（新興・再興感染症及び予防接種政策推進研究事業）「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の倫理的法的社会的課題（ELSI）に関する研究」の支援のもと開催しました。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20210219/>) に開催レポートを掲載しています。

市民参加型ワークショップ「ちょっと未来の食生活～ゲノム編集食品から考えてみる～」

- タイトル：市民参加型ワークショップ「ちょっと未来の食生活～ゲノム編集食品から考えてみる～」@オンライン
- ゲスト：村中 俊哉（大阪大学大学院工学研究科 教授）、標葉 隆馬（大阪大学 社会技術共創研究センター 准教授）
- 日時：2021年2月20日（土）13:30～16:00
- 実施形態：オンライン形式
- 主催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）、大阪大学 社会技術共創研究センター
- 共催：大阪大学 CO デザインセンター
- 後援：大阪大学先導的学際研究機構産業バイオイニシアティブ研究部門、ジャガイモ新技術連絡協議会（農水省「知」の集積と活用場 産学官連携協議会 研究開発プラットフォーム）
- 協力：大阪大学共創機構 社学共創部門

2021年2月20日（土）に、市民参加型ワークショップ「ちょっと未来の食生活～ゲノム編集食品から考えてみる～」をオンラインで開催しました。

この日の参加者は20人。10代から70代まで幅広い年代の方に全国各地からご参加いただきました。参加者のみなさんの対話をお手伝いしたグループファシリテータは、主にSTiPSで学んでいる学生や修了生がつとめました。



対面でワークショップを実施していた2019年度の事例と同じように、グループごとの対話の時間と、出てきた論点を全体で共有する時間を組み合わせた進行でした。全体で共有した論点や疑問点については、ゲストに適宜コメントをお願いしました。

参加者からは「少人数のグループで何度か議論できたことは、相手のバックグラウンドを理解して話を聞くことができたので良かった」、「参加者の多様性があったことで、食育から食文化まで意外性のある展開があって興味深かった」といった感想が寄せられました。

*このワークショップは、JST-RISTEX『科学技術の倫理的・法制度的・社会的課題（ELSI）への包括的実践研究開発プログラム』「萌芽的科学技術をめぐるRRIアセスメントの体系化と実装（研究代表者：標葉 隆馬）」の支援のもと開催しました。

STiPS ウェブサイト (<http://stips.jp/20210220/>) に開催レポートを掲載しています。

5. 共進化実現プロジェクトの実施

5. 共進化実現プロジェクトの実施

2019年度より、政策への具体的貢献ができるような成果の創出や、行政官と研究者の真の共進化を強力に推進するため、課題設定から行政官が積極的に関わる新たな研究プロジェクト「重点課題に基づく研究プロジェクト（共進化実現プロジェクト）」9件が実施されています。このうち2件に、STiPS 参画教員が関わっています。

❖ 新興・融合科学領域における「予見・分析手法」の検討と人的ネットワークの形成

研究課題名

新興・融合科学領域における「予見・分析手法」の検討と人的ネットワークの形成

プロジェクト期間

2019（H31）年4月～2021（R3）年3月

プロジェクトメンバー

- ・有本 建男（政策研究大学院大学 客員教授） *研究代表者
- ・平川 秀幸（大阪大学 CO デザインセンター 教授） *研究代表者
- ・岡村 麻子（政策研究大学院大学 専門職）
- ・安藤 二香（政策研究大学院大学 専門職）
- ・畑中 綾子（政策研究大学院大学 ポストドクトラルフェロー）

行政担当部署

文部科学省 科学技術・学術政策局企画評価課 新興・融合領域研究開発調査戦略室

取り組む課題

国内外において、新興・融合科学領域の重要性が認識され、その取組が加速しています。エビデンスに基づいた新興・融合領域政策の具体化のためには、国内外の新しい手法や取組から随時示唆を得ながら、「予見・分析手法」を整理・体系化し、政策形成の各場面・目的に応じて適切に組み合わせて活用していくことが重要です。それらを支援する仕組みの構築に向け、モデルケースの創出と、これを実現する人的ネットワークの形成が必要となっています。

プロジェクト概要

新興・融合科学領域において予見されるインパクトを多角的に把握し、政策形成に資するエビデンスを作成し政策形成プロセスに働きかけをおこなうために、以下の3点を行います。

- ①「予見・分析手法」の整理・体系化
- ②「予見・分析手法」の実証（プロトタイプの構築・試行）と、これを通じた、政策形成において実践的に活用されるための課題抽出
- ③プロジェクトを通じた、研究者、政策担当者のより実践的なネットワークの構築

「予見・分析手法」のマッピングなど、以上のプロセスにおいて中間的に得られた知見についても、政策担当者に向けた Policy Briefing Notes としてまとめます。

2020 年度の主たる研究成果

2019 年度の研究期間中、世界的にミッション志向型イノベーション政策の重要性が高まり、特定の科学技術を起点にしたフォーキャスト型の予見・分析手法だけではなく、ありたい未来社会像を見据え、足元の研究開発戦略立案に繋げるバックキャスト型の予見・分析手法も同様に重要と捉えられるようになりました。このため、「新興・融合科学領域において予見されるインパクトを多角的に把握し、政策形成に資するエビデンスを作成するための手法の整理と体系化」という当初の目標を次のように修正しました。

ある研究開発成果を起点とした「インパクトとして予見される未来」、あるいは研究開発の目標となる「目指すべきありたい未来」を多角的に把握し、政策形成に資するエビデンスを作成するための手法の整理・体系化。

また、上記「プロジェクト概要」の①（2019 年度）と②（2020 年度）を検討する過程で、日本の実務家がフォーサイトを業務として取り入れるために役立てられる情報・資料が不足していることがより明確になりました。そこで、フォーサイト初心者への導入となる簡潔なまとめ及びリソース集に資する資料の作成を目的として、①、②の検討結果のエッセンスをとりまとめ、関連省庁、ファンディング・エージェンシー、研究開発関係機関、産業界等の実務者を想定読者とした、日本版ツールキット（仮称、β版）の作成を行うこととなりました。

以上の観点から、2020 年度の後半では、フォーサイトの方法を大きく、(1)バックキャスト型、(2)フォーキャスト型に大別し、それぞれのフォーサイトを行う場合のデザインを検討するワークショップを開催することとしました。2020 年 11 月 25 日には「フォーサイト・デザイン・ワークショップ（バックキャスト的アプローチ）」を、12 月 4 日には「フォーサイト・デザイン・ワークショップ（フォーキャスト的アプローチ）」を、いずれもオンライン会議システムを用いて開催しました。

現在は、2019 年度と 2020 年度の以上の検討結果のエッセンスをとりまとめ、日本版ツールキット（仮称、β版）の作成を行っています。またプロジェクトの実施を通じて、日本の科学技術イノベーション政策関係のフォーサイト関係者を包含するネットワーク形成を徐々に行いつつあることも一つの成果といえます。さらに、これらの成果を基盤として、2021 年 6 月からは、共進化実現プロジェクト（第 II フェーズ）「『将来社会』を見据えた研究開発戦略の策定における官・学の共創」プロジェクト（代表：平川秀幸・大阪大学教授）を開始する予定です。

🍁 国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構（JAXA）の歴史・現状・未来像に関する研究

研究課題名

国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構（JAXA）の歴史・現状・未来像に関する研究：政府と民間の関係に焦点を当てて

プロジェクト期間

2019 (H31) 年 4 月～2021 (R3) 年 3 月

プロジェクトメンバー

- ・渡邊 浩崇 (大阪大学 CO デザインセンター 特任准教授) *研究代表者
- ・平川 秀幸 (大阪大学 CO デザインセンター 教授)
- ・城山 英明 (東京大学公共政策大学院 教授)
- ・小林 俊哉 (九州大学科学技術イノベーション政策教育研究センター 准教授)

行政担当部署

文部科学省研究開発局宇宙開発利用課

取り組む課題

宇宙基本計画においては、日本の宇宙機器産業の事業規模を 10 年間で官民合わせて累計 5 兆円を目指すことが掲げられています。諸外国においては、既存の宇宙関連企業に加えて、新興企業が宇宙の研究開発利用において大きな役割を果たす中、日本においても、宇宙分野における政府と民間の関係、とくに役割分担の再構築、さらには宇宙航空研究開発機構 (JAXA) が今後、何を求められるかの幅広い分析・検討が必要となっています。

プロジェクト概要

本研究プロジェクトは、国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構 (JAXA) がこれまで求められてきたこと、そして今後、求められることを、政府と民間の関係に焦点を当てて研究します。

日本の政府予算が厳しい中、どのような宇宙政策を推進し、どのように宇宙産業規模を拡大していくか、それらへの回答の一つとして、政府と民間の役割分担が求められています。研究手法として、文献調査・資料収集、国内外の政策実務者・研究者・企業や一般の人々との意見交換 (対話)・研究会・ワークショップ等を、効果的に組み合わせて繰り返し行うことによって検証し、本研究プロジェクトの成果は、宇宙基本計画 (工程表) や JAXA 中長期目標・計画等への反映を目指します。

2020 年度の主たる研究成果

本年度は、本研究プロジェクトの行政担当者 (文部科学省研究開発局宇宙開発利用課) と約 2 か月毎の打合せを行いながら、JAXA を始めとする政策実務者、研究者、宇宙民間企業の担当者との意見交換を行いました。

加えて、オンライン会議システムによって、2020 年 9 月 7 日に「政策立案ワークショップ (宇宙) 2020 年度第 1 回」を、2021 年 3 月 16 日には、「政策立案ワークショップ (宇宙) 2020 年度第 2 回」を開催しました。また 2020 年 12 月には、一般市民を対象とした「宇宙と JAXA に関するインターネット調査」を実施しました。

以上のような研究調査活動の最終成果の一つとして、「研究者側からの成果としての提言」(①JAXA の役割・取組の整理と取捨選択、②日本の宇宙研究開発利用体制における JAXA の位置づけ、③宇宙人材の育成・供給における JAXA の役割) をまとめました。

6. 関西ネットワークの発展

6. 関西ネットワークの発展

❖ SpringX 超学校シリーズ

SpringX は、一般社団法人ナレッジキャピタルが運営するスタートアップ支援のための学びと交流の場で、そこで行われているプログラムの1つが「SpringX 超学校」です。2020年度は、大阪大学社会技術共創研究センターが提供する SpringX 超学校シリーズ「ビジネスとアカデミアのタッグで挑む、攻めの ELSI」全3回を、STiPS とナレッジキャピタルが共同で開催しました。

以下、「ビジネスとアカデミアのタッグで挑む、攻めの ELSI」シリーズの案内文です。

日々新しい技術が世に生み出される一方、その技術が社会に浸透していく時、ELSI(Ethical, Legal and Social Issues／倫理的・法的・社会的課題)に直面することがあります。大阪大学 ELSI センターは、技術を生み出す側とそれを受け入れる側の間に立って議論を深め、知見のフィードバックをおこなうことを目指しています。このシリーズでは、ELSI センターと協働している企業の方々をお招きし、アカデミアとビジネスをつなぐための実例をご紹介します。



SpringX 超学校 ビジネスとアカデミアのタッグで挑む、攻めの ELSI 第 1 回

- タイトル：ELSI を意識した、データビジネスのためのガイドライン
- ゲスト：川島 邦之（一般社団法人 LBMA Japan 代表理事／Pinmicro 株式会社 取締役 CRO）、内山 英俊（一般社団法人 LBMA Japan 理事／株式会社 unerry 代表取締役 CEO）、山下 大介（一般社団法人 LBMA Japan ガイドライン委員会 主任編集委員／株式会社ブログウォッチャー プロファイルサポート事業部）
- ホスト：岸本 充生（大阪大学 社会技術共創研究センター センター長／データビリティフロンティア 機構 教授）
- 司会：八木 絵香（大阪大学 CO デザインセンター／社会技術共創研究センター 教授）
- 日時：2021 年 2 月 1 日（月）19:00～20:30
- 実施形態：オンライン形式（申し込み制で YouTube Live 配信）
- 主催：大阪大学 社会技術共創研究センター、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）、一般社団法人ナレッジキャピタル

第 1 回「ELSI を意識した、データビジネスのためのガイドライン」は、一般社団法人 LBMA Japan のみなさんをゲストにお迎えして、2021 年 2 月 1 日（月）に実施しました。この日、リアルタイムで配信をご覧になっていたのは 86 名でした。

さまざまな業界でパーソナルデータの活用が進む中で、その取り扱いへの不安の声も聞かれます。そんな中で、2020 年 6 月、位置情報データを利活用する事業者向けのガイドライン策定したのが一般社団法人 LBMA Japan です。このガイドラインを策定した経緯や、そこに大学の研究者がどのように関わったのかということなどをお伺いしました。

視聴者からの質問なども交えながら、「アカデミアと協働してみて、実際にどうだったか？」「攻めの ELSI とは何か」「ELSI を企業と共に考える時、アカデミアの立ち位置はどうあるべきか」などのテーマについて、活発な議論が交わされました。ゲストからは「今の会社では、ELSI の法律（L）は弁護士、社会（S）の部分はマーケティング担当となっているけれど、ソーシャルグッドを目指す会社としては、エシカル（E）を担保するときに何をベースにして良いかわからなかったのが助かった」といったコメントがありました。



SpringX 超学校 ビジネスとアカデミアのタッグで挑む、攻めの ELSI 第 2 回

- タイトル：メルカリ R4D が目指す“レスポンスブルな”研究開発スタイルとは？
- ゲスト：高橋 三徳（メルカリ R4D Manager）、多湖 真琴（メルカリ R4D Operations Manager）、藤本 翔一（メルカリ R4D Operations Research Administrator）
- ホスト：岸本 充生（大阪大学 社会技術共創研究センター センター長／データビリティフロンティア 機構 教授）
- 司会：八木 絵香（大阪大学 CO デザインセンター／社会技術共創研究センター 教授）
- 日時：2021 年 2 月 17 日（水）19:00～20:30
- 実施形態：オンライン形式（申し込み制で YouTube Live 配信）
- 主催：大阪大学 社会技術共創研究センター、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）、一般社団法人ナレッジキャピタル

第 2 回「メルカリ R4D が目指す“レスポンスブルな”研究開発スタイルとは？」は、メルカリの研究開発組織 R4D のみなさんをゲストにお迎えして、2021 年 2 月 17 日（水）に実施しました。この日、リアルタイムで配信をご覧になっていたのは 90 名でした。



メルカリ R4D と ELSI センターは、ELSI（倫理的・法的・社会的課題）に配慮した

新しい研究開発プロセス・社内の人材育成のための教育プログラムをつくることを目的に共同研究を進めています。新たな取り組みに、企業の側は何を期待し、何を得たのか。また、大学はそこにどう関わり、何を見出しているのか。両方の視点から語り合いました。

今回の SpringX 超学校では、昨年 3 月から取り組まれている、メルカリ社内での研究倫理審査プロセスの見直しについて、そして、その過程で始まった ELSI センターとの共同研究について取り上げました。

岸本センター長からは、メルカリ R4D が目指している「社会実装まで視野に入れた研究開発を事前に評価するということ」は、つまり、「テクノロジーアセスメントまでを含めた研究開発プロセスを構築しようとしていること」なのでは、ということに気づき、アカデミックな世界で議論されていることと、メルカリ R4D が進めようとしていることがどんどん結びついていった、よい事例になりそうという手応えを感じているというコメントがありました。また、この共同研究を進めることで、アカデミア側からビジネス側に知見を提供するだけでなく、アカデミアで行われている研究開発のあり方を捉え直すこともできるのではないかと、といった期待も語られました。

SpringX 超学校 ビジネスとアカデミアのタッグで挑む、攻めの ELSI 第 3 回

- タイトル：ELSI というビッグウェーブ、乗り越えさせるか？ のみ込まれるか？
- ゲスト：朱 喜哲（株式会社電通ソリューション・デザイン局 主任研究員／大阪大学 社会技術共創研究センター 招へい教員）、工藤 郁子（世界経済フォーラム第四次産業革命日本センター プロジェクト戦略責任者／大阪大学 社会技術共創研究センター 招へい教員）
- ホスト：岸本 充生（大阪大学 社会技術共創研究センター センター長／データビリティフロンティア 機構 教授）
- 司会：八木 絵香（大阪大学 CO デザインセンター／社会技術共創研究センター教授）
- 日時：2021 年 3 月 3 日（水）19:00～20:30
- 実施形態：オンライン形式（申し込み制で YouTube Live 配信）
- 主催：大阪大学 社会技術共創研究センター、公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）、一般社団法人ナレッジキャピタル

第 3 回は、「ELSI というビッグウェーブ、乗り越えさせるか？ のみ込まれるか？」というタイトルを掲げて実施しました。この日、リアルタイムで配信をご覧になっていたのは 63 名でした。ゲストは、ELSI センターの招へい教員でもある、朱 喜哲氏と工藤 郁子氏です。

今シーズン最終回となる第 3 回は、ここまでの 2 回を振り返りつつ、ELSI（倫理的・法的・社会的課題）をキーワードにしたときに、ビジネスとアカデミアがどのように連携していくことができるのか、また、そこはどのような課題があるのかということ語り合いました。

ビジネスとアカデミアの連携については、アカデミアが第三者的に批判ばかり行ったり、企業がアカデミアにお墨付きだけを求めたりするのではなく、コミュニケーションの往復を重ねることによって（＝監修ではなく共創によって）問題を考えていくべきだというコメントがありました。また、今回のテーマでもある「攻めの ELSI とは何か」については、「何かが起こったときに事後的な対応をするのではなく、企業としてどうありたいか意思を示す能動的な姿勢が『攻め』という言葉につながる」「第三者的に関わろうとするのではなく、チームの一員、当事者として貢献することが『攻めの姿勢』なのではないか」というゲストからのコメント、さらにはそれを受けて八木教授から「『攻める』というよりむしろ、ELSI という概念を共に『つくる』ということなのではないか」という意見も出されました。



7. 国際連携の推進

7. 国際連携の推進

❖ 国際連携

今後より一層教育研究プログラムの内容を拡充させていくためには、科学技術政策研究領域に関する国際的な動向を調査し、さらに海外拠点との連携を強化し、その成果を本拠点独自の教育プログラムに反映させていくことが不可欠です。2020年度には、以下の活動を行うことができました。

I) 「責任ある研究・イノベーション (Responsible Research and Innovation)」に関する国際的ネットワーク機関 (VIRI) への加盟について

米国アリゾナ州立大学が構築した「責任ある研究・イノベーション (RRI)」に国際ネットワーク「Virtual Institute of Responsible Innovation (VIRI)」に、本拠点 STiPS は、2014年6月から加盟しており、2020年度も連携を継続しました。

II) InSPIRES プロジェクト アドバイザリーボードへ参加

欧州連合 (EU) のイノベーション推進施策である Horizon2020 の下で行われている公共的関与のプロジェクト「Ingenious Science shops to promote Participatory Innovation, Research and Equity in Science; InSPIRES」にアドバイザリーボードの一員として参加しています。

III) 教育・研究面での新たな連携の試み

豪州国立大学の Australian National Centre for the Public Awareness of Science (ANU-CPAS)、米国ジョージ・ワシントン大学国際科学技術政策研究所・宇宙政策研究所と教育・研究面での連携に向けた議論を行いました。

❖ 海外調査及び発表等

2020年度、公共的関与に関わる基盤的研究の発展に向け、海外調査及び発表を行いました。具体的な活動は以下のとおりです。

2021年2月1日、工藤充 特任講師が、科学コミュニケーションをテーマにした国際的な研究会“2nd Webinar on Science Communication Research for time-zones in ASIA & PACIFIC”において、指定討論者として登壇しました。科学コミュニケーションという領域にこれから求められる研究とは何か、そしてそれはどのような国際的な協働のもとに進めていくことができるのか、といったトピックについて、視聴者も交えて議論を行いました。

8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）

8. STiPS 参画教員による活動リスト（研究業績等）

2020年度のSTiPS参画教員による活動リストを掲載します。なお、リストアップの方針が大阪大学と京都大学では異なりますので、それぞれの方針を一読した上でご覧ください。

大阪大学

大阪大学の活動リストは、企画運営会議（本冊子32ページ参照）構成員の活動について掲載しています。

著書、論文、寄稿等

- 小林傳司. 2020. 「第1章 科学技術の論じ方」, 藤垣裕子, 小林傳司, 塚原修一, 平田光司, 中島秀人編『科学技術社会論の挑戦 1 科学技術社会論とは何か』, 東京大学出版会, 1-33, 2020年4月. 著書
- 藤垣裕子, 小林傳司, 塚原修一, 平田光司, 中島秀人. 2020. 『科学技術社会論の挑戦 2 学技術と社会: 具体的課題群』東京大学出版会, 2020年7月. 協力編集
- 小林傳司. 2020. 「社会と科学技術: テクノロジーアセスメント (TA) と倫理的、法的、社会的課題 (ELSI) の背景」, 『学術の動向』, 25(7), 22-28, 2020年7月. 寄稿
- 小林傳司. 2020. 「(書評) 科学と政治の関係の難しさ」, 『公明しんぶん』, 2020年8月31日. 2020年8月. 寄稿
- 藤垣裕子, 小林傳司, 塚原修一, 平田光司, 中島秀人. 2020. 『科学技術社会論の挑戦 3 「つなぐ」「こえる」「動く」の方法論』, 東京大学出版会, 2020年10月. 協力編集
- 小林傳司. 2020. 「コロナ・科学・専門家」, 『サイエンスコミュニケーション』, 10(2): 1. 2020年11月. 寄稿
- 平川秀幸. 2020. 「科学技術—科学を公共圏に取り戻すことは可能か」, 日本アーレント研究会編『アーレント読本』, 法政大学出版局, 2020年7月, 298-306. 著書
- 平川秀幸. 2020. 「(書評) 専門知の『柔らかさ』とどうつきあうか」, 『世界』, 2020年9月号: 252-257, 2020年9月. 寄稿
- 村上陽一郎, 平川秀幸. 2020. 『解放されたゴーレム: 科学技術の不確実性について (著: ハリー・コリンズ, トレヴァー・ピン)』, 筑摩書房, 2020年11月. 翻訳
- 平川秀幸. 2020. 「コロナをめぐる科学と政治」, 『アステイオン』, 93: 162-179, 2020年11月. 寄稿
- 平川秀幸. 2020. 「コミュニケーションのすれ違いをどう理解するか」, 電気学会電気学会倫理委員会編『鋼鉄と電子の塔: いかにして科学技術を語り、科学技術とともに歩むか』, 森北出版, 2020年12月, 105-144. 著書
- 平川秀幸. 2021. 「科学と政治のあるべき関係とは」, 『月刊 公明』, 2021年3月, 183: 22-27. 寄稿
- 岸本充生. 2020. 「トランプ政権における規制改革—規制影響分析 (RIA) とレギュラトリーサイエンスの役割—」, 『季刊 評価クォーターリー』, 53: 3-13, 2020年4月. 寄稿
- 八代嘉美, 標葉隆馬, 井上悠輔, 一家綱邦, 岸本充生, 東島仁. 2020. 「日本再生医療学会による社会とのコミュニケーションの試み」, 『科学技術社会論研究』, 18: 137-146, 2020年4月. 学術論文

- 岸本充生. 2020. 「エマージングリスクとしての COVID-19 —科学と政策の間のギャップを埋めるには—」, 『日本リスク研究学会誌』, 29(4): 237-242, 2020 年 5 月. 寄稿
- 岸本充生. 2020. 「エマージングリスクという新発見—どう発見し、どう社会に生かすか」, 『学術の動向』, 25(12): 26-29, 2020 年 12 月. 寄稿
- 岸本充生. 2020. 「デジタル技術の社会実装には規制影響分析とテクノロジーアセスメントの一体化を」, 『月刊経団連』, 2020 年 12 月号: 24-25, 2020 年 12 月. 寄稿
- 神里達博. 2020. 「(月刊安心新聞 plus) 甘くみた新型コロナ 最悪から逆算、不得手でも」, 『朝日新聞』, 4 月 17 日朝刊, 2020 年 4 月. 寄稿
- 神里達博. 2020. 「(月刊安心新聞 plus) 専門家によるデータ公開 「科学を装った政治」を防ぐ」, 『朝日新聞』, 5 月 22 日朝刊, 2020 年 5 月. 寄稿
- 神里達博. 2020. 「(月刊安心新聞 plus) コロナ一色の世界 「生き残り」ルール変わった」, 『朝日新聞』, 6 月 19 日朝刊, 2020 年 6 月. 寄稿
- 神里達博. 2020. 『リスクの正体—不安の時代を生き抜くために』, 岩波書店, 2020 年 6 月. 著書
- 神里達博. 2020. 「(月刊安心新聞 plus) コロナ対策と経済のバランス 細かく舵を切り、最適値探れ」, 『朝日新聞』, 7 月 17 日朝刊, 2020 年 7 月. 寄稿
- 神里達博. 2020. 「第 6 章 リスク論」, 藤垣裕子, 小林傳司, 塚原修一, 平田光司, 中島秀人編 『科学技術社会論の挑戦 2 学技術と社会: 具体的課題群』, 東京大学出版会, 106-126, 2020 年 7 月. 著書
- 神里達博. 2020. 「(月刊安心新聞 plus) 新型コロナ「最新の研究成果」 勇み足次々、信頼性確認を」, 『朝日新聞』, 8 月 21 日朝刊, 2020 年 8 月. 寄稿
- 神里達博. 2020. 「新型コロナウイルス感染症: “COVID-19”の科学論—「疾病の認識」と「専門家の役割」」, 『法律時報』, 92(9): 78-84, 2020 年 8 月. 依頼原稿
- 神里達博. 2020. 「(月刊安心新聞 plus) 情報化の大波 遅れ挽回、広い視野で」, 『朝日新聞』, 9 月 18 日朝刊, 2020 年 9 月. 寄稿
- 神里達博. 2020. 「(月刊安心新聞 plus) 経産省の存在感、消えたあと 戦前の企画院、頭に浮かぶ」, 『朝日新聞』, 10 月 16 日朝刊, 2020 年 10 月. 寄稿
- 神里達博. 2020. 「(月刊安心新聞 plus) 格差が広げるポピュリズム 専門家を『贅沢品』と敵視」, 『朝日新聞』, 11 月 20 日朝刊, 2020 年 11 月. 寄稿
- 神里達博. 2020. 「(月刊安心新聞 plus) 科学者と政治の関係 理想は『誠実な仲介者』」, 『朝日新聞』, 12 月 18 日朝刊, 2020 年 12 月. 寄稿
- 神里達博. 2021. 「(月刊安心新聞 plus) 感染拡大の責任、政治軽視の社会にも」, 『朝日新聞』, 1 月 23 日朝刊, 2021 年 1 月. 寄稿
- 神里達博. 2021. 「(月刊安心新聞 plus) 「指数関数」と「振動」 コロナ禍、雄弁な知恵袋を」, 『朝日新聞』, 2 月 19 日朝刊, 2021 年 2 月. 寄稿
- 神里達博. 2021. 「(月刊安心新聞 plus) 震災 10 年「単なる通過点」だけど 人も社会も傷、鎮魂の道は」, 『朝日新聞』, 3 月 19 日朝刊, 2021 年 3 月. 寄稿
- 八木絵香, 三上直之. 2020. 「気候変動問題をめぐる市民参加の可能性」, 『環境情報科学』, 49(2):12-16, 2020 年 7 月. 学術論文
- 八木絵香. 2020. 「第 4 章 市民参加型ワークショップの設計」, 藤垣裕子, 小林傳司, 塚原修一, 平田光司, 中島秀人編 『科学技術社会論の挑戦 3 「つなぐ」「こえる」「動く」の方法論』, 東京大学出版会, 68-93, 2020 年 10 月. 著書

- 八木絵香. 2021. 「第 3 章 日本国内への導入と展開」, 八木絵香, 三上直之編 『リスク社会と市民参加』, 放送大学教育振興会, 52-71, 2021 年 2 月. 著書
- 八木絵香. 2021. 「第 4 章 福島第一原子力発電所事故と市民参加」, 八木絵香, 三上直之編 『リスク社会と市民参加』, 放送大学教育振興会, 72-92, 2021 年 2 月. 著書
- 八木絵香. 2021. 「第 6 章 高レベル放射性廃棄物処分問題と市民参加」, 八木絵香, 三上直之編 『リスク社会と市民参加』, 放送大学教育振興会, 110-125, 2021 年 2 月. 著書
- 八木絵香. 2021. 「第 13 章 市民参加の視点の移動—気候変動問題を事例として—」, 八木絵香, 三上直之編 『リスク社会と市民参加』, 放送大学教育振興会, 235-252, 2021 年 2 月. 著書
- 八木絵香. 2021. 「第 14 章 熟議と市民参加の場の設計」, 八木絵香, 三上直之編 『リスク社会と市民参加』, 放送大学教育振興会, 253-270, 2021 年 2 月. 著書
- Watanabe, M. & Kudo, M. 2020. "Western science and Japanese culture" in T. Gascoigne et al. (eds.) *Communicating Science: A Global Perspective*. Canberra: ANU Press. 521-538, 2020 年 9 月. 著書
- 工藤充. 2021. 「7 章 超スマート社会と市民参加」, 八木絵香, 三上直之編 『リスク社会における市民参加』, 放送大学教育振興会, 126-144, 2021 年 2 月. 著書
- 工藤充. 2021. 「12 章 科学技術イノベーションに関する市民参加の広がり」, 八木絵香, 三上直之編 『リスク社会における市民参加』, 放送大学教育振興会, 216-234, 2021 年 2 月. 著書
- 加納圭, 一方井祐子, 水町衣里. 2020. 「科学イベントへの参加意向と実際の参加者層の分析—「サイエンスカフェ」と「サイエンスとアートの融合イベント」との比較—」, 『科学教育研究』, 44(4): 254-260. 2020 年 12 月. 学術論文
- 水町衣里. 2021. 「第 3 章 対話の場に参加する研究者の声と思い」, 加納圭, 水町衣里, 城綾実, 一方井祐子編 『研究者・研究職・大学院生のための対話トレーニング—きく、伝える、分かち合う』, ナカニシヤ出版, 31-46, 2021 年 3 月. 著書
- 元木環, 加納圭, 水町衣里, 城綾実. 2021. 「第 5 章 対話を支援する場のデザイン」, 加納圭, 水町衣里, 城綾実, 一方井祐子編 『研究者・研究職・大学院生のための対話トレーニング—きく、伝える、分かち合う』, ナカニシヤ出版, 67-84, 2021 年 3 月. 著書
- 水町衣里, 加納圭. 2021. 「第 6 章 対話トレーニングプログラムの事前講習」, 加納圭, 水町衣里, 城綾実, 一方井祐子編 『研究者・研究職・大学院生のための対話トレーニング—きく、伝える、分かち合う』, ナカニシヤ出版, 85-98, 2021 年 3 月. 著書

学会発表等

- 小林傳司. 2020. 研究発表「STS と大学」, 科学研究費補助金基盤 A 「知のオープン化時代の大学・科学関連システムの再構築」, 2020 年 11 月 8 日. 口頭発表
- 岸本充生. 2020. 「接触確認アプリと ELSI に関する 10 の視点」, 2020 年度 科学技術社会論学会総会・年次学術大会 (オンライン), 2020 年 12 月 5 日. 口頭発表
- 神里達博. 2020. 「原子炉における「受動的安全」概念の検討」, 2020 年度 科学技術社会論学会総会・年次学術大会 (オンライン), 2020 年 12 月 5 日. 口頭発表
- 渡邊浩崇. 2020. 「宇宙の歴史 5—宇宙政策史、宇宙法制史、宇宙科学技術史、宇宙産業史—」, 第 64 回 宇宙科学技術連合講演会 (WEB オンライン開催), 2020 年 10 月 29 日. 企画・司会

渡邊浩崇. 2020. 「日本における宇宙政策・計画に関する歴史研究—宇宙科学技術連合講演会「宇宙の歴史」シリーズ」, 第 64 回宇宙科学技術連合講演会 (WEB オンライン開催), 2020 年 10 月 29 日. 口頭発表

水町衣里, 八木絵香. 2020. 「科学技術に関する ELSI をテーマとした「対話ツール」の開発」, 日本科学教育学会第 44 回年会 (オンライン), 2020 年 8 月 25-27 日. 一般研究発表 (誌上発表)

社会活動 (講演会・展示会などアウトリーチ活動等)

小林傳司. 2020. コメント掲載, 「コロナ専門家会議の迷走、独立性なくあいまいな組織」, 『日経新聞』, 5 月 15 日 電子版, 2020 年 5 月 15 日.

小林傳司. 2020. コメント掲載, 「コロナ対策、揺れた科学的助言『震災の教訓生かさず』」, 『朝日新聞』, 7 月 2 日 電子版, 2020 年 7 月 2 日.

小林傳司. 2020. インタビュー掲載, 「『震災の教訓生きず』 コロナで露見、科学と政治の関係」, 『朝日新聞』, 7 月 9 日 電子版, 2020 年 7 月 9 日.

小林傳司. 2020. インタビュー掲載, 「明日への考【コロナ禍と原発事故】 科学 解答には相応の時間」, 『読売新聞』, 8 月 2 日朝刊, 2020 年 8 月 2 日.

小林傳司. 2020. 話題提供, 「社会の中の科学・社会のための科学」, 公開シンポジウム「健康で長生き—未来社会を開くヘルステック・イノベーション—」(オンライン), 2020 年 8 月 6 日.

小林傳司. 2020. コメンテーター, 公開シンポジウム「健康で長生き—未来社会を開くヘルステック・イノベーション—」(オンライン), 2020 年 8 月 6 日.

小林傳司. 2020. コメント掲載, 「新型コロナ～政治と科学 不確実性と向き合う データや知見不足 誤りから学ぶ科学受け入れる社会を」, 『朝日新聞』, 8 月 28 日朝刊, 2020 年 8 月 28 日.

小林傳司. 2020. インタビュー掲載, 「【with/post コロナ社会に生きる】科学と社会の対話で、ありがたい未来をつくる」, 『サイエンスウィンドウ』, 2020 年 9 月 17 日.

小林傳司. 2020. コメント掲載, 「パチンコ店名公表した都道府県、意見聴いた専門家数に差」, 『朝日新聞』, 10 月 19 日 電子版, 2020 年 10 月 19 日.

小林傳司. 2020. 基調講演「「エビデンスに基づく…」とは」, 令和二年度近畿地区教育研究(修)所連盟研究発表大会, 2020 年 11 月 6 日.

小林傳司. 2020. 話題提供, 日本社会心理学会/JST-RISTEX 共催ワークショップ「人・社会・科学技術のあるべき関係を求めて: ELSI 研究と社会心理学」(オンライン), 2020 年 11 月 8 日.

小林傳司. 2020. 柿内賢信記念賞受賞講演, 「日本の科学技術社会論誕生へのささやかな貢献について」, 科学技術社会論学会, 2020 年 12 月 5 日.

小林傳司. 2020. 講演「新規科学技術と ELSI について: 社会と科学技術の関係はどうあるべきか」, 日本工学会技術倫理協議会第 16 回公開シンポジウム (オンライン), 2020 年 12 月 7 日.

小林傳司. 2020. 講演, 「社会科学技術の関係～過去 50 年を振り返る～」, 令和 2 年度 大阪大学適塾記念講演会 (大阪大学中之島センター 佐治敬三メモリアルホール), 2020 年 12 月 8 日. (中止)

小林傳司. 2020. ポジショントーク, COCN フォーラム 2020「COCN が考える『今やらなければならないこと』」(オンライン), 2020 年 12 月 16 日.

小林傳司. 2020. インタビュー掲載, 「トランス・サイエンスをめぐる展望—コロナ・パンデミックを踏まえて」, 『こころの未来』, 24, 2020 年 12 月.

小林傳司. 2021. 座談会, 「「教養教育」とは何かを考える」, 『大学時報』, 396(1), 2021 年 1 月.

- 小林傳司. 2021. 基調講演, 「社会の中の科学、社会のための科学：ブダペスト宣言から 20+1 年」大阪大学社会技術共創研究センター設立記念シンポジウム「科学技術イノベーションと倫理・法・社会」(オンライン), 2021 年 3 月 2 日.
- 小林傳司. 2021. コメンテーター, 「東京電力福島第一原子力発電所事故から 10 年を迎えて」, 日本原子力学会シンポジウム「VISION2050—事故を振り返り未来を見据える」(オンライン), 2021 年 3 月 11 日.
- 小林傳司. 2021. インタビュー掲載, 「リスクコミュニケーションは科学者と市民の「対話」」, 『ヘルシスト』, 45,(2), 2021 年 3 月.
- 平川秀幸, 奈良由美子. 2020. 講師, 「リスクコミュニケーション俯瞰講座」(オンライン), 2020 年 5 月 22 日.
- 平川秀幸. 2020. コメント掲載, 「3・11 から 10 年 教訓どう残す コロナ禍で作業中断・催し延期相次ぐ」, 『東京新聞』, 2020 年 6 月 8 日.
- 平川秀幸. 2020. インタビュー掲載, 「新型コロナ対応 問われる科学と政治の関係性」, 『公明新聞』, 9 月 2 日電子版, 2020 年 9 月 2 日.
- 城山英明, 松尾真紀子, 平川秀幸, 八木絵香. 2020. 講義, 「危機のガバナンスにおける意思決定のエビデンスとコミュニケーション」, SciREX サマースクール (オンライン), 2020 年 9 月 19 日.
- 平川秀幸. 2020. コメント掲載, 「基礎からわかる日本学術会議 科学技術社会に還元」, 『読売新聞』, 10 月 21 日. 朝刊, 2020 年 10 月 21 日.
- 平川秀幸. 2021. コメント掲載, 「菅首相、その言葉 心に響きません」, 『東京新聞』, 2021 年 1 月 15 日. 2021 年 1 月 15 日.
- 平川秀幸. 2021. パネリスト・企画, 「リスクガバナンスとコミュニケーションの新展開—振興感染症、自然災害、気候変動への複合的対応—」, 第 3 回 SciREX オープンフォーラム「科学技術イノベーション政策の新展開」(オンライン), 2021 年 2 月 16 日.
- 平川秀幸. 2021. パネリスト, 「政策と科学の共進化—その望ましい姿と現実、次のステージに向けて—」, 第 3 回 SciREX オープンフォーラム「科学技術イノベーション政策の新展開」(オンライン), 2021 年 2 月 17 日.
- 岸本充生. 2020. 講演, 「ELSI センターの概要説明」, 大阪大学社会技術共創研究センター (ELSI センター)キックオフ・トーク「今、なぜ、ELSI センターなのか」(オンライン), 2020 年 7 月 1 日.
- 岸本充生, 赤坂亮太, 標葉隆馬, 神里達博. 2020. パネリスト, 大阪大学社会技術共創研究センター (ELSI センター) キックオフ・トーク「今、なぜ、ELSI センターなのか」(オンライン), 2020 年 7 月 1 日.
- 岸本充生, 赤坂亮太, 工藤郁子. 2020. パネリスト, 大阪大学社会技術共創研究センター (ELSI センター) キックオフ・トーク「情報科学と ELSI —AI・データビジネスを例に—」(オンライン), 2020 年 7 月 2 日.
- 岸本充生, 標葉隆馬, 八代嘉美. 2020. パネリスト, 「ELSI センターの概要説明」, 大阪大学社会技術共創研究センター (ELSI センター) キックオフ・トーク「生命科学と ELSI —再生医療を例に—」(オンライン), 2020 年 7 月 3 日.
- 岸本充生. 2020. 講演, 「「リスク」と「ELSI」の視点から考える感染症問題」, JST-CRDS セミナー「リスクと社会」(オンライン), 2020 年 7 月 16 日.

- 岸本充生. 2020. 講演, 「新規科学技術と ELSI: 阪大 ELSI センターの設立と新型コロナウイルス接触確認アプリ (COCOA) の事例」, 第 93 回 STIG PoP オンラインセミナー (オンライン), 2020 年 7 月 27 日.
- 岸本充生. 2020. 講演, 「パーソナルデータ利活用と ELSI (倫理的・法的・社会的課題)」, Society5.0 実現/SDGs 達成に向けたセンシング技術分科会 (一般社団法人 電子情報技術産業協会) (オンライン), 2020 年 8 月 21 日.
- 岸本充生. 2020. コメント掲載, 「(追う DNA 捜査: 中) DNA 型、無罪でも原則保管」, 『朝日新聞』, 8 月 24 日朝刊, 2020 年 8 月 24 日.
- 岸本充生. 2020. 講演, 「新しい医療のリスクとベネフィットを考える枠組み: COVID-19 対策技術 (接触確認アプリ) のケースを例に」, 患者・市民参画イベント「患者・社会と考える再生医療～新たな医療情報にどう接するか～」(一般社団法人日本再生医療学会) (オンライン), 2020 年 9 月 5 日.
- 岸本充生. 2020. コメント掲載, 「考 次期政権の課題 (1) PCR 増やせず 10 年 新型インフル教訓、置き去り」, 『朝日新聞』, 9 月 7 日朝刊, 2020 年 9 月 7 日.
- 岸本充生. 2020. 講演, 「科学技術イノベーションとエマージングリスク」, 公開シンポジウム「新知見の扱いとその活用」(オンライン), 2020 年 9 月 10 日.
- 岸本充生. 2020. 講演・企画, セッション「異分野融合研究プロジェクトにおける URA の役割について考える」内「社会技術共創研究センター (通称、ELSI センター) の目指していること」, RA 協議会第 6 回年次大会 (オンライン), 2020 年 9 月 18 日.
- 岸本充生. 2020. 講演, ミニシンポジウム「ELSI 対応なくして、データビジネスなし: データと ELSI を考える」, 位置情報・ビッグデータ カンファレンス 2020 (オンライン), 2020 年 9 月 18 日.
- 岸本充生. 2020. 講演, 「阪大「ELSI センター」の発足と取組」, オンライン・ミニシンポジウム「これまでの ELSI、これからの ELSI」(オンライン), 2020 年 9 月 18 日.
- 岸本充生. 2020. コメント掲載, 「接触アプリ改善急ぐ 感染拡大防止、一翼担うが… 通知うけ「不具合?」」, 『朝日新聞』, 9 月 19 日朝刊, 2020 年 9 月 19 日.
- 岸本充生. 2020. コメント掲載, 「新技術、攻めの「ELSI」で」, 『日経新聞』, 10 月 5 日朝刊, 2020 年 10 月 5 日.
- 岸本充生. 2020. 話題提供, 「大阪大学における ELSI の取組 ～社会技術共創研究センター (通称、ELSI センター) の目指していること」, 文部科学省 科学技術社会連携委員会 (第 13 回) (オンライン), 2020 年 10 月 30 日.
- 岸本充生. 2020. 講演, 研究紹介 3 「脳とサイバー世界がつながる社会と倫理的・法的・社会的課題 (ELSI)」, 第 10 回 CiNet シンポジウム「脳サイバーインタフェースの拓く未来」(グランフロント大阪), 2020 年 11 月 9 日.
- 岸本充生. 2020. 講演, “Towards responsible innovation: Establishment of the “ELSI Center” at Osaka University”, The 3rd International Symposium on Symbiotic Intelligent Systems: “A New Era towards Responsible Robotics and Innovation” (オンライン), 2020 年 11 月 19 日.
- 岸本充生. 2020. 講演, 「データサイエンスにおける ELSI」, 応用脳科学アカデミー&ワークショップ 2020 「ベーシックコース 3: ELSI」(NTT データ経営研究所), 2020 年 11 月 26 日.
- 岸本充生. 2020. 講演, 「ELSI の観点からの次世代セキュリティーパーソナルデータ利活用のための ELSI」, 第 7 回 ASF 次世代セキュリティシンポジウム (オンライン), 2020 年 12 月 14 日.

- 岸本充生. 2021. コメント掲載, 「(時時刻刻) 苦肉の宣言、見えぬ収束 政権ちぐはぐ、都も後手 緊急事態宣言」, 『朝日新聞』, 1月8日朝刊, 2021年1月8日.
- 岸本充生. 2021. 講師, 「規制の政策評価のこれまでとこれから」, 政策評価に関する統一研修(中央研修)(総務省行政評価局)(オンライン), 2021年1月27日.
- 岸本充生. 2021. 講演, 「リスクと ELSI の考え方ーコロナ新時代に向けて」, 国・地方連携会議ネットワークを活用した男女共同参画推進事業「リスクマネジメントとジェンダー平等」(オンライン), 2021年1月30日.
- 岸本充生. 2021. ホスト, 「ELSI を意識した、データビジネスのためのガイドライン」, SpringX 超学校「ビジネスとアカデミアのタグで挑む、攻めの ELSI」(オンライン), 2021年2月1日.
- 岸本充生. 2021. 講演, 「社会技術共創研究センター (ELSI センター) の紹介と、パーソナルデータの利活用の仕組みとそのためのガバナンスについて」, inochi 未来・WAKAZO 適塾 オンライン講演会第5回「データを用いた新しい『いのちを守り合う社会』の実現に向けて」(オンライン), 2021年2月12日.
- 岸本充生. 2021. ホスト, 「メルカリ R4D が目指す“レスポンスブルな”研究開発スタイルとは?」, SpringX 超学校「ビジネスとアカデミアのタグで挑む、攻めの ELSI」(オンライン), 2021年2月17日.
- 岸本充生. 2021. コメント掲載, 「<検証 コロナ時代>専門家会議 提言30回超 政治とあつれきも強い危機感、科学者自ら発信 官邸不満「彼らは経済分かってない」」, 『神戸新聞』, 2月18日朝刊, 2021年2月18日.
- 岸本充生. 2021. コメント掲載, 「検証特集 知る 防ぐ 新型コロナ 専門家集団の果たすべき役割は? お墨付きから提言へ 危機感強まり 権限「逸脱」」, 『中日新聞』, 2月20日朝刊, 2021年2月20日.
- 岸本充生. 2021. コメント掲載, 「深層断面/プラットフォーム×人文社会系研究 オンラインの秩序共創」, 『日刊工業新聞』, 2月24日朝刊, 2021年2月24日.
- 岸本充生. 2021. ホスト, 「ELSI というビッグウェーブ、乗り越えさせるか? のみ込まれるか?」, SpringX 超学校「ビジネスとアカデミアのタグで挑む、攻めの ELSI」(オンライン), 2021年3月3日.
- 岸本充生. 2021. パネリスト, Round Table 「位置情報データとプライバシー」, 位置情報ビジネスカンファレンス 2021 (オンライン), 2021年3月18日.
- 神里達博. 2020. コメント掲載, 「コロナで拡散するデマ 不安が土壤に、鍵は情報公開」, 『朝日新聞』, 5月18日朝刊, 2020年5月18日.
- 神里達博. 2020. 講演, 「ELSI センターに期待すること」, 大阪大学社会技術共創研究センター (ELSI センター) キックオフ・トーク「今、なぜ、ELSI センターなのか」(オンライン), 2020年7月1日.
- 神里達博. 2020. コメント掲載, 「新型コロナは「自然災害」ではない リスクと責任を理解しない日本」, 『毎日新聞』, 8月2日電子版, 2020年8月2日.
- 神里達博. 2020. 書評掲載, 「「ウィズコロナの社会とリスクに向き合う」科学史家・神里達博さんが選ぶ、今読みたい本」, 『クロワッサン』, 1025, 2020年8月.
- 神里達博. 2020. コメント掲載, 「地下 40m 超を掘削機通過…その後に予兆 調布道路陥没」, 『朝日新聞』, 10月21日電子版, 2020年10月21日.

- 神里達博. 2020. 講演, 「科学技術の社会的価値」, 応用脳科学アカデミー&ワークショップ 2020「ベーシックコース3: ELSI」(NTT データ経営研究所), 2020年11月26日.
- 八木絵香. 2020. インタビュー掲載, 「理解への対話 橋渡し ～意見を聞き 自分が変われるか考えて」, 『読売新聞』, 5月27日夕刊, 2020年5月27日.
- 八木絵香. 2020. 司会, 大阪大学社会技術共創研究センター (ELSI センター) キックオフ・トーク「今、なぜ、ELSI センターなのか」(オンライン), 2020年7月1日.
- 八木絵香. 2020. 全体進行, 市民参加型ワークショップ「感染症対策に使われる情報技術と、わたしたちの暮らし」(オンライン), 2020年8月22日.
- 八木絵香. 2020. 講演, 「科学コミュニケーションを知らう! - 「人間工学」と「科学コミュニケーション」の交点を探る -」, 第1回 人間工学を社会に活かすためのサイエンスミーティングーコロナ禍で役立てよう! 人間工学の科学的知見ー (オンライン), 2020年9月24日.
- 八木絵香. 2020. 講師, 臨時講座「<リスクコミュニケーション>リスクある内容をどう相手と相互理解するか」, 静岡市立静岡科学館「静岡科学館科学コミュニケーター育成講座」(静岡科学館・く・る), 2020年9月27日.
- 八木絵香. 2021. 司会, 「ELSI を意識した、データビジネスのためのガイドライン」, SpringX 超学校「ビジネスとアカデミアのタグで挑む、攻めの ELSI」(オンライン), 2021年2月1日.
- 八木絵香. 2021. 司会, 「メルカリ R4D が目指す“レスポンシブルな”研究開発スタイルとは?」, SpringX 超学校「ビジネスとアカデミアのタグで挑む、攻めの ELSI」(オンライン), 2021年2月17日.
- 八木絵香. 2021. 全体進行, 市民参加型ワークショップ「ちょっと未来のヒトの移動 ～続 感染症対策に使われる情報技術～」(オンライン), 2021年2月19日.
- 八木絵香. 2021. 全体進行, 市民参加型ワークショップ「ちょっと未来の食生活～ゲノム編集食品から考えてみる～」(オンライン開催), 2021年2月20日.
- 八木絵香. 2021. コーディネーター, 滋賀県「リスクコミュニケーション研修会」(オンライン), 2021年2月26日.
- 八木絵香. 2021. 司会, 大阪大学 ELSI センターシンポジウム「科学技術イノベーションと倫理・法・社会」(オンライン), 2021年3月2日.
- 八木絵香. 2021. 司会, 「ELSI というビッグウェーブ、乗り越えさせるか? のみ込まれるか?」, SpringX 超学校「ビジネスとアカデミアのタグで挑む、攻めの ELSI」(オンライン), 2021年3月3日.
- 渡邊浩崇. 2020. コメント掲載, 「新政権の課題 (下) 宇宙産業の競争力強化」, 『読売新聞』, 10月11日朝刊, 2020年10月11日.
- 渡邊浩崇. 2021. パネリスト, パネルディスカッション「公共財としての ISS・「きぼう」の秘めたポテンシャルとは」, 宇宙航空研究開発機構 (JAXA) 主催「国際宇宙ステーション「きぼう」利用シンポジウム 2021」(オンライン), 2021年1月29日.
- 渡邊浩崇. 2021. 報告, 報告会「科学技術イノベーション政策における「政策のための科学」推進事業共進化実現プロジェクト成果報告会」, 第3回 SciREX オープンフォーラム「科学技術イノベーション政策の新展開」(オンライン), 2021年2月17日.
- Kudo M. 2021. 指定討論者, “2nd Webinar on Science Communication Research for time-zones in ASIA & PACIFIC” (オンライン), 2021年2月1日.

- 水町衣里. 2020. 企画, 市民参加型ワークショップ「感染症対策に使われる情報技術と、わたしたちの暮らし」(オンライン), 2020年8月22日.
- 水町衣里. 2021. 企画, 「ELSIを意識した、データビジネスのためのガイドライン」, SpringX 超学校「ビジネスとアカデミアのタグで挑む、攻めのELSI」(オンライン), 2021年2月1日.
- 水町衣里. 2021. パネリスト, 「科学コミュニケーション研究会の10年を振り返り、次の10年を展望する」, 第17回科学コミュニケーション研究会 年次大会(オンライン), 2021年2月6日.
- 水町衣里. 2021. 企画, 「メルカリ R4D が目指す“レスポンシブルな”研究開発スタイルとは?」, SpringX 超学校「ビジネスとアカデミアのタグで挑む、攻めのELSI」(オンライン), 2021年2月17日.
- 水町衣里. 2021. 企画, 市民参加型ワークショップ「ちょっと未来のヒトの移動 ~続 感染症対策に使われる情報技術~」(オンライン), 2021年2月19日.
- 水町衣里. 2021. 企画, 市民参加型ワークショップ「ちょっと未来の食生活~ゲノム編集食品から考えてみる~」(オンライン), 2021年2月20日.
- 水町衣里. 2021. 企画, 「ELSIというビッグウェーブ、乗り越えさせるか? のみ込まれるか?」, SpringX 超学校「ビジネスとアカデミアのタグで挑む、攻めのELSI」(オンライン), 2021年3月3日.

京都大学

京都大学の活動リストは、参画教員の活動について掲載いたしました。

著書、論文、寄稿等

- Ide K, Yoshida S, Kimura T, Oita Y, Kawakami K. 2020. The general understanding and perceptions of the practical use of school health records: A questionnaire survey of parents from seven local municipalities in Japan. *School Health*. 16: 33-42. 2020年4月. 学術論文
- Kunitomi Y, Nakashima M, Seki T, Ide K, Kawakami K. 2020. Intergenerational comparison of 5-HT3RA in the prevention of chemotherapy-induced nausea and vomiting in gastric cancer patients receiving cisplatin-based chemotherapy: An observational study using a Japanese administrative claims database. *Support Care Cancer*. in press. 2020年5月. 学術論文
- Nagai K, Ide K, Kawasaki Y, Tanaka-Mizuno S, Seto K, Iwane S, Eguchi Y, Kawakami K. 2020. Estimating the cost-effectiveness of screening for hepatitis C virus infection in Japan. *Hepatology Res*. 2020; 50: 542-556. 2020年5月. 学術論文
- Woo Jin Joo, Ide K, Kei Nishiyama, Tomotsugu Seki, Hiroyuki Tanaka, Junpei Tsuchiya, Noritoshi Ito, Kosuke Yoshida, and Kawakami K. 2020. Prediction of the neurologic outcome using regional cerebral oxygen saturation in patients with extracorporeal cardiopulmonary resuscitation after out-of-hospital cardiac arrest: A multicentre retrospective cohort study. *Acute Medicine & Surgery*, in press. 2020年. 学術論文
- Yuji Kunitomi, Masayuki Nakashima, Tomotsugu Seki, Ide K, and Kawakami K. 2020. Intergenerational comparison of 5-HT3RA in the prevention of chemotherapy-induced nausea and vomiting in gastric cancer patients receiving cisplatin-based chemotherapy: An observational study using a Japanese administrative claims database. *Supportive Care in Cancer*, in press. 2020年. 学術論文
- Kota Nagai, Keisuke Matsubayashi, Ide K, Kahori Seto, Yohei Kawasaki, and Kawakami K. 2020. Factors influencing placebo responses in rheumatoid arthritis clinical trials: A meta-analysis of randomized, double-blind, placebo-controlled studies. *Clinical Drug Investigation*, in press. 2020年. 学術論文
- Masayuki Nakashima, Masato Takeuchi, and Koji Kawakami. 2020. Effectiveness of barrier agents for postoperative bowel obstruction in laparoscopic surgery: A retrospective cohort study. *Surgery Today*, in press. 2020年. 学術論文
- Jingwei Gao, Tomotsugu Seki, and Koji Kawakami. 2020. Comparison of adherence, persistence, and clinical outcome of generic and brand-name statin users: A retrospective cohort study using the Japanese claims database. *Journal of Cardiology*, in press. 2020年. 学術論文
- Masato Takeuchi and Koji Kawakami. 2020. Association of baloxavir marboxil prescription with subsequent medical resource utilization among school-aged children with influenza. *Pharmacoepidemiology and Drug Safety*, in press. 2020年. 学術論文
- Tomotsugu Seki, Masato Takeuchi, Shin Kawasoe, Kazufumi Takeuchi, Ryusuke Miki, Kenji Ueshima, and Koji Kawakami. 2020. Outpatient cardiac rehabilitation after acute myocardial infarction: Propensity analysis using Japanese administrative database. *Annals of Clinical Epidemiology*, in press. 2020年. 学術論文

- Kazufumi Takeuchi, Izumi Sato, Masato Takeuchi, Tomotsugu Seki, Yohei Kawasaki, and Koji Kawakami. 2020. Association between oral anticoagulants and the risk of cardiogenic thromboembolism in patients with atrial fibrillation undergoing cancer chemotherapy. *Annals of Clinical Epidemiology*, 2(4): 95-106. 2020 年. 学術論文
- Masanobu Ishii, Tomotsugu Seki, Kenji Sakamoto, Koichi Kaikita, Yoshihiro Miyamoto, Kenichi Tsujita, Izuru Masuda, and Koji Kawakami. 2020. Short-term exposure to Asian dust and blood pressure: A cross sectional study of health check-up data in Japan. *Scientific Reports*, in press. 2020 年. 学術論文
- Takumi Imai, Shiro Tanaka, and Koji Kawakami. 2020. Exploratory assessment of the random-effects distribution dependent on treatments using gradient function, *Statistics in Medicine*, in press. 2020 年. 学術論文
- Kayoko Mizuno, Masato Takeuchi, Masahiro Kikuchi, Koichi Omori, and Koji Kawakami. 2020. Outcomes in patients diagnosed with tongue cancer before and after the age of 45 years. *Oral Oncology*, in press. 2020 年. 学術論文
- Satomi Yoshida, Shiro Tanaka, Yuichi Adachi, Hajime Yoshisue, Masanari Kozawa, and Koji Kawakami. 2020. Assessment of asthma severity according to treatment steps in Japanese pediatric patients: A descriptive cross-sectional study using an administrative claims database. *Journal of Asthma*. 2020 年. 学術論文
- Masato Takeuchi and Koji Kawakami. 2020. Universal palivizumab prophylaxis for children with Down syndrome in Japan: analysis with interrupted time-series. *Human Vaccines & Immunotherapeutics*, in press. 2020 年. 学術論文
- Madoka Yamamoto-Sasaki, Satomi Yoshida, Masato Takeuchi, Sachiko Tanaka-Mizuno, and Koji Kawakami. 2020. Association between antidepressant use during pregnancy and congenital anomalies in children: a retrospective cohort study based on Japanese claims data. *Congenital Anomalies*. 2020 年. 学術論文
- Kayoko Mizuno, Yuji Kanazawa, Masato Takeuchi, Yo Kishimoto, Koji Kawakami, and Koichi Omori. 2020. Indications and postoperative outcomes of surgery for laryngotracheal stenosis: A descriptive study. *Auris Nasus Larynx*, in press. 2020 年. 学術論文
- Masayuki Nakashima, Masato Takeuchi, and Koji Kawakami. 2020. Effectiveness and safety of regorafenib vs. trifluridine/tipiracil in unresectable colorectal cancer: A retrospective cohort study. *Clinical Colorectal Cancer*, 2020.05.003. 2020 年. 学術論文
- Takeshi Kimura, Masato Takeuchi, and Koji Kawakami. 2020. Utilization and efficacy of palivizumab for children with Down syndrome. *Pediatrics International*. 2020 年. 学術論文
- Masanobu Ishii, Tomotsugu Seki, Koichi Kaikita, Kenji Sakamoto, Michikazu Nakai, Yoko Sumita, Kunihiro Nishimura, Yoshihiro Miyamoto, Teruo Noguchi, Satoshi Yasuda, Hiroyuki Tsutsui, Issei Komuro, Yoshihiko Saito, Hisao Ogawa, Kenichi Tsujita, and Koji Kawakami, on the behalf of JROAD Investigators. 2020. Short-term exposure to desert dust and the risk of acute myocardial infarction in Japan: A time-stratified case-crossover study. *European Journal of Epidemiology*, 35:455-464. 2020 年. 学術論文
- Masahiro Noda, Satomi Yoshida, Hiroki Mishina, Keisuke Matsubayashi, and Koji Kawakami. 2020. Association between maternal hypertensive disorders of pregnancy and child neurodevelopment at 3

- years of age: a retrospective cohort study. *Journal of Developmental Origins of Health and Disease*, 18:1-8. 2020 年. 学術論文
- Keisuke Matsubayashi and Koji Kawakami. 2020. Prevalence, incidence, comorbidities, and treatment patterns among Japanese patients with acromegaly: A descriptive study using a nationwide claims database. *Endocrine Journal*, in press. 2020 年. 学術論文
- Masayuki Kohno, Kunihiro Musashi, Hanako Ohashi Ikeda, Tomohisa Horibe, Aki Matsumoto, and Koji Kawakami. 2020. Oral administration of ferulic acid or ethyl ferulate attenuates retinal damage in sodium iodate induced retinal degeneration mice. *Scientific Reports*, 10:8688. 2020 年. 学術論文
- Kanna Shinkawa, Satomi Yoshida, Tomotsugu Seki, Motoko Yanagita, and Koji Kawakami. Risk factors of venous thromboembolism in patients with nephrotic syndrome: a retrospective cohort study. *Nephrology Dialysis and Transplantation*, in press. 2020 年. 学術論文
- Izumi Sato, Hideki Onishi, Chiaki Kawanishi, Shuhei Yamada, Mayumi Ishida, and Koji Kawakami. Neuroleptic malignant syndrome in cancer patients: A systematic review. *BMJ Supportive & Palliative Care*, in press. 2020 年. 学術論文
- Masanobu Ishii, Tomotsugu Seki, Koichi Kaikita, Kenji Sakamoto, Michikazu Nakai, Yoko Sumita, Kunihiro Nishimura, Yoshihiro Miyamoto, Teruo Noguchi, Satoshi Yasuda, Yoshihiko Saito, Hiroyuki Tsutsui, Issei Komuro, Hisao Ogawa, Kenichi Tsujita, and Koji Kawakami, on the behalf of JROAD Investigators. 2020. Association of short-term exposure to air pollution with myocardial infarction with and without obstructive coronary artery disease. *European Journal of Preventive Cardiology*. 2020 年. 学術論文
- Guan Jia, Shiro Tanaka, Shuhei Yamada, Izumi Sato, and Koji Kawakami. 2020. Treatment patterns in newly diagnosed multiple myeloma patients in Japan using a nationwide claims database: Retrospective cohort study. *Japanese Journal of Pharmacoepidemiology*, in press, 25(2). 2020 年. 学術論文
- Satomi Yoshida, Masato Takeuchi, Chihiro Kawakami, Koji Kawakami, Shunichi Ito, and Japan Environment and Children's Study Group. 2020. Maternal multivitamin intake and orofacial clefts in offspring: Japan Environment and Children's Study (JECS) cohort study. *BMJ Open*, 10(3):e035817. 2020 年. 学術論文
- Chikashi Takeda, Masato Takeuchi, Toshiyuki Mizota, Hiroshi Yonekura, Isao Nahara, Woo Jin Joo, Li Dong, Yohei Kawasaki, and Koji Kawakami. 2020. The association between arterial pulse waveform analysis device and in-hospital mortality in high-risk non-cardiac surgeries. *Acta Anaesthesiologica Scandinavica*. 2020 年. 学術論文
- Masato Takeuchi, Masahito Ogura, Takaaki Minoura, Nobuya Inagaki, and Koji Kawakami. 2020. Comparative effectiveness of SGLT2 inhibitors vs other classes of glucose-lowering medications on renal outcome in type 2 diabetes. *Mayo Clinic Proceedings*, 95(2):265-273. 2020 年. 学術論文
- Keisuke Matsubayashi and Koji Kawakami. 2020. Syphilis testing among spouses of patients with syphilis in Japan: an epidemiological study using an administrative claims database. *International Journal of STD & AIDS*. 2020 年. 学術論文

- Siming Chen, Satomi Yoshida, Riki Matsumoto, Akio Ikeda, and Koji Kawakami. 2021. Prescription patterns of medications for adult patients with newly diagnosed focal epilepsy from 2006 to 2017. *Epilepsy Research*, 169:106503. 2021 年. 学術論文
- Masato Takeuchi, Kanna Shinkawa, Motoko Yanagita, and Koji Kawakami. 2021. Prevalence, recognition and management of chronic kidney disease in Japan: population-based estimate using a healthcare database with routine health checkup data. *Clinical Kidney Journal*. 2021 年. 学術論文
- Masayuki Nakashima, Masato Takeuchi, and Koji Kawakami. 2021. Clinical outcomes of acute appendicitis during pregnancy: Conservative management and appendectomy. *World Journal of Surgery*, in press. 2021 年. 学術論文
- Masayuki Nakashima, Masato Takeuchi, and Koji Kawakami. 2021. Salvage therapy after regorafenib or trifluridine/tipiracil treatment of metastatic colorectal cancer: A conditional landmark analysis. *Anticancer Research*, in press. 2021 年. 学術論文
- Tomostugu Seki, Masato Takeuchi, and Koji Kawakami. 2021. Eating habits and its association with obesity in Japanese healthy adults: Retrospective longitudinal big data analysis using a health check-up database. *British Journal of Nutrition*, in press. 2021 年. 学術論文
- Becker, C. B. 2020. Commentary on “Cremation and Grief: Are Ways of Commemorating the Dead Related to Adjustment Over Time?” *OMEGA - Journal of Death and Dying*. 81(4):706-709. 2020 年 4 月. 学術論文
- Ikeda, Y., Egawa, M., Hiyoshi, K., Ueno T., Ueda, K., Becker, C. B., Takahashi, Y., Nakayama, T., Mandai, M. 2020. “Development of a Japanese version of the Daily Record of Severity of Problems for Diagnosing Premenstrual Syndrome” *Women's Health Reports* 1. 2020 年 4 月. 学術論文
- 鎌田實, カール・ベッカー. 2020. 「輝く人生の「終い方」」, 『潮』, 733号: 176-183, 2020 年 4 月. 寄稿
- カール・ベッカー. 2020. 「未来創成学国際研究から考える生き方と学問の優先順位」, 山極寿一他編『未来創成学の展望』, ナカニシヤ出版, 122-127, 2020 年 4 月. 学術論文
- 鎌田實, カール・ベッカー. 2020. 『コロナ時代を生きるヒント』就中 44-58, 潮出版, 2020 年 7 月. 寄稿
- Becker, C. B., Taniyama, Y., Kondo-Arita, M., Yamada, S., Yamamoto, K. 2020. How Grief, Funerals, and Poverty Affect Bereaved Health, Productivity, and Medical Dependence in Japan. *OMEGA - Journal of Death and Dying*. 2020 年 8 月. 学術論文
- 小野木康雄, カール・ベッカー. 2020. 「葬儀不満なら医療費増」, 『文化時報』, 12769: 1, 2020 年 9 月. 寄稿
- カール・ベッカー. 2020. 「京都大学、東北大学共同での死別による悲嘆コスト研究調査」, 『フュネラルビジネス』, 288 : 54, 2020 年 11 月. 寄稿
- カール・ベッカー. 2020. 「どのような葬儀をするかで、死別悲嘆が遺族と社会に及ぼす影響が変わる」, 『葬祭流儀』, 特別号: 6-9, 2020 年 11 月. 寄稿
- 大崎百紀, カール・ベッカー. 2020. 「後悔しない親との別れ方」, 『週間朝日』, 125(65): 114-117, 2020 年 12 月. 寄稿
- Becker, C. B. 2020. “Prioritizing Sustainable Living.” *Pacific Asia Inquiry: Multidisciplinary Perspectives* 11 (1) pp. 178-179. Fall. 2020 年. 寄稿

- Becker, C. B., Taniyama, Y., Kondo-Arita, M., Sasaki, N., Yamada, S., Yamamoto, K. 2021. Unexplored Costs of Bereavement Grief in Japan. *OMEGA - Journal of Death and Dying*. 2021 年 1 月. 学術論文
- カール・ベッカー. 2021. 「日本における「続く絆」の重要性」, 新春随想『医学界新聞』, 第 3402 号, 2021 年 1 月. 学術論文
- Becker, C. B. 2021. “How Japanese Spirituality Addresses Grief.” in Kashio, N. & Becker, C. eds. *Spirituality as a Way: the Wisdom of Japan*. Kyoto University Press, 27-43. 2021 年 3 月. 学術論文
- Hoy, W., Becker, C. B., and Holloway, M. 2021. “Memorialization and Death-Related Rituals,” in *ADEC Handbook of Thanatology, 3rd Edition*, ed. Helen Chapple & Heather Servaty-Seib. NY: Routledge. 2021 年 3 月. 学術論文
- Seike, A., Sumigaki, C., Takeuchi, S., Hagihara, J., Takeda, A., Becker, C. B., Toba, K., Sakurai, T. 2021. Effectiveness of Group-based Multi-Component Psycho-Education for PWD Caregivers: A randomized controlled study. *The Gerontologist* (in Press). 2021 年 3 月. 学術論文
- 富田直秀. 2020. 「正常な狂気」, 『未来創成学の展望—物質・生命・こころ・社会・宇宙をつらぬく創発原理を求めて』, ナカニシヤ出版, 2020 年. 共著 (第 11 章)
- 富田直秀. 2021. 「「奥行き」を求めだした科学・技術」, 『「奥行き感覚」を求めて -美術をめぐる新たな鑑賞と実践-』京都市立芸術大学, 2021 年. 共著 (第 5 章)
- 富田直秀. 2021. 「6 生体材料」, 『膝関節外科テキスト』南江堂, 2021 年. 著書
- 富田直秀, 森川健太郎. 2021. 「社会に『質』なる目標を与える『型』(Art-Science Link Worker: 実感する実践者たち)」, 『日本哲学史研究』, 第 17 号 (土井シンポジウム「日本哲学と科学」講演論文集), 2021 年. 学術論文
- 森川健太郎, 富田直秀. 2021. 「生命と『わかる』の数理モデル化の試み」, 『日本哲学史研究』, 第一七号(土井シンポジウム「日本哲学と科学」講演論文集), 2021 年. 学術論文
- Fujiki S, Ishizaki T, Nakayama T. 2020. Clinical pictures, treatments, and resource use of norovirus gastroenteritis in long-term care facilities: a survey with a chart review in Japan. *BMC Geriatr.* 20(1):148. 2020 年 4 月. 学術論文
- Takeya A, Adachi E, Takahashi Y, Kondoh E, Mandai M, Nakayama T. 2020. Trial of labor after cesarean delivery (TOLAC) in Japan: rates and complications. *Arch Gynecol Obstet.* 301(4):995-1001. 2020 年 4 月. 学術論文
- Toyama M, Okuma Y, Yamamoto M, Kashihara K, Yoshida K, Saiki H, Maeda T, Tsuboi Y, Takahashi Y, Nakayama T. 2020. Non-motor symptoms depending on motor severity in Japanese patients with Parkinson's disease: A multicenter cross-sectional study. *J Neurol Sci.* 412:116641. 2020 年 5 月. 学術論文
- Mo X, Tobe RG, Takahashi Y, Arata N, Liabsuetrakul T, Nakayama T., Mori R. 2020. Economic evaluations of gestational diabetes mellitus screening: A systematic review. *J Epidemiol.* 2020 年 5 月. 学術論文
- Ueda K, Sado T, Takahashi Y, Igarashi T, Nakayama T. 2020. Applicability of care quality indicators for women with low-risk pregnancies planning hospital birth: a retrospective study of medical records. *Sci Rep.* 10(1):12484. 2020 年 7 月. 学術論文

- Kohno A, Techarivichien T, Suguimoto SP, Dahlui M, Nik Farid ND, Nakayama T. 2020. Investigation of the key factors that influence the girls to enter into child marriage: A meta-synthesis of qualitative evidence. *PLoS One*. 15(7):e0235959. 2020 年 7 月. 学術論文
- Fukuma S, Ikenoue T, Yamada Y, Saito Y, Green J, Nakayama T, Fukuhara S. 2020. Changes in drug utilization after publication of clinical trials and drug- related scandals in Japan: an interrupted time series analysis, 2005-2017. *J Epidemiol*. 2020 年 7 月. 学術論文
- Mo X, Gai RT, Tachibana Y, Bolt T, Takahashi Y, Nakayama T. 2020. The burden of disease and the cost of illness attributable to child maltreatment in Japan: long-term health consequences largely matter. *BMC Public Health*. 20(1):1296. 2020 年 8 月. 学術論文
- Nishikawa Y, Hoshino N, Horimatsu T, Funakoshi T, Hida K, Sakai Y, Muto M, Nakayama T. 2020. Chemotherapy for patients with unresectable or metastatic small bowel adenocarcinoma: a systematic review. *Int J Clin Oncol*. 25(8):1441-1449. 2020 年 8 月. 学術論文
- Ongosi AN, Wilunda C, Musumari PM, Techarivichien T, Wang CW, Ono-Kihara M, Serrem C, Kihara M, Nakayama T. 2020. Prevalence and Risk Factors of Elevated Blood Pressure and Elevated Blood Glucose among Residents of Kajiado County, Kenya: A Population-Based Cross-Sectional Survey. *Int J Environ Res Public Health*. 17(19):6957. 2020 年 9 月. 学術論文
- Goto Y, Mandai M, Nakayama T, Yamazaki S, Nakayama SF, Isobe T, Sato T, Nitta H. 2020. Association of prenatal maternal blood lead levels with birth outcomes in the Japan Environment and Children's Study (JECS): a nationwide birth cohort study. *Int J Epidemiol*. dyaa162. 2020 年 11 月. 学術論文
- Mo X, Cao J, Tang H, Miyazaki K, Takahashi Y, Nakayama T. 2020. Inability to control gestational weight gain: an interpretive content analysis of pregnant Chinese women. *BMJ Open*. 10(12):e038585. 2020 年 12 月. 学術論文
- Yamashita H, Takahashi Y, Ishizaki T, Imura H, Nakayama T. 2020. Associations of multimorbidity with breast, cervical, and colorectal cancer screening delivery: a cross-sectional study of a nationally representative Japanese sample. *Cancer Epidemiol*. 69:101798. 2020 年 12 月. 学術論文
- Nakaoku Y, Takahashi Y, Tominari S, Nakayama T. 2021. Predictors of New Dementia Diagnoses in Elderly Individuals: A Retrospective Cohort Study Based on Prefecture-Wide Claims Data in Japan. *Int J Environ Res Public Health*. 18(2):629. 2021 年 1 月. 学術論文
- Dadras O, Nakayama T, Kihara M, Ono-Kihara M, Seyedalinaghi S, Dadras F. 2021. The prevalence and associated factors of adverse pregnancy outcomes among Afghan women in Iran; Findings from community-based survey. *PLoS One*. 16(1):e0245007. 2021 年 1 月. 学術論文
- Motegi N, Morisaki N, Suto M, Tamai H, Mori R, Nakayama T. 2021. Secular trends in longevity among people with Down syndrome in Japan, 1995-2016. *Pediatr Int*. 63(1):94-101. 2021 年 1 月. 学術論文
- Naoyuki Iwashita. 2020. "Facebook's Libra is far from broad acceptance as a world currency", *Evolutionary and Institutional Economics Review*, Volume 17, Number 1, Mar 7, 2020, Note. 2020 年 5 月. 寄稿
- Naoyuki Iwashita. 2020. "Bitcoin's Deviations from Satoshi's World", *Advanced Studies of Financial Technologies and Cryptocurrency Markets*, Chapter 6, pp.101-116, July 2020,.Book. 2020 年 7 月. 共著 (第 6 章)

- 伊藤順一, 倪鏡, 曹斌. 2020. 「日本の農政改革と直接支払制度」, 『日本研究』, 第 173 号: 1-10 (中国語), 2020 年. 学術論文
- 広井良典. 2020. 「有限性の経済学に向けて」, 『ひらく』, 第 3 号: 109-124, 2020 年 6 月. 寄稿
- 広井良典. 2020. 「ウィズコロナ時代と分散型福祉社会」, 『ガバナンス』, 232 号: 14-16, 2020 年 6 月. 寄稿
- 広井良典. 2020. 「ポスト成長社会のデザイン: 気候変動とパンデミックを超えて」, 『建築雑誌』, 135 (1740) 号: 3-6, 2020 年 8 月. 寄稿
- 広井良典. 2020. 「ポスト・コロナの社会構想: 分散型システムへの移行と「生命」の時代」, 『労働の科学』, 75 巻 12 号: 708-712, 2020 年 12 月. 寄稿
- 要藤正任. 2021. 「ソーシャル・キャピタルの世代間継承—時間・空間・歴史も踏まえた概念であるソーシャル・キャピタルをうまく利用して心地よく生きる」, 稲葉陽二編『ソーシャル・キャピタルからみた人間関係 社会関係資本の光と影』, 日本評論社, 2021 年 3 月. 著書
- 宮野公樹. 2020. 「産学連携の形而上学—大学のあり方を添えて—」, 『現代思想 2020<特集: コロナ時代の大学>』 10 月号, 2020 年 9 月. 寄稿
- 宮野公樹. 2021. 「消費された「学術会議問題」…いま日本の大学が忘れつつある「大切なこと」」, 『現代ビジネス WEB』, 2021 年 1 月 15 日. 寄稿
- 宮野公樹. 2021. 『問いの立て方』ちくま新書, 2021 年 2 月. 著書
- 宮野公樹. 2021. 「学問の在り方—真理探求、学会、評価をめぐる省察—」, 『ユニオンエー』, 2021 年 3 月. 編集・共著
- Tomitaka S, Kawasaki Y, Ide K, Akutagawa M, Ono Y, Furukawa TA. 2020. Age-related changes in item responses to the Patient Health Questionnaire-9: Evidence from the National Health and Nutrition Examination Survey. *Front Psychiatry*. 2020; 11: 723 (9 pp). 2020 年. 学術論文
- Aoki Y, Kawasaki Y, Ide K, Shimizu Y, Sato S, Yokoyama J. 2020. Landiolol hydrochloride for prevention of atrial fibrillation during esophagectomy: A randomized controlled trial. *JA Clin Rep*. 2020; 6: 34 (9 pp). 2020 年 5 月. 学術論文
- 今井匠, 井出和希. 「第 1 回: ランダムに分ける」, 『毒舌妻と統計家 臨床試験論文を読んでみる』, 2020; 71(12): 89-94, 2020 年. 寄稿
- 今井匠, 井出和希. 2020. 「第 2 回: 盲検化, 主要評価項目, ITT」, 『毒舌妻と統計家 臨床試験論文を読んでみる』, 2020; 71(13): 131-140, 2020 年. 寄稿
- 祐野恵. 2021. 「市町村レベルにおける EBPM の推進を妨げる要因—小中学校における健康診断情報の可視化に関する政策決定要因の分析—」, 『社会システム研究』, 24, 2021 年 3 月. 学術論文

学会発表等

- 錦織達人, 肥田侯矢, 小濱和貴, 角田茂, 川上浩司, 中山健夫, 星野伸晃, 坂本享史, 松村由美, 坂井義治. 2020. 「若手外科医の夢を実現するためのデータサイエンス教育システム」, 「第 120 回日本外科学会定期学術集会」, 2020 年 4 月 16 日-18 日, 横浜. 口頭発表
- 坂本享史, 錦織達人, 後藤励, 肥田侯矢, 角田茂, 川上浩司, 中山健夫, 小濱和貴, 久森重夫, 坂井 義治. 2020. 「食道切除術の Hospital volume と周術期医療費との関連: 食道癌患者 5132 例の分析.」, 第 120 回日本外科学会定期学術集会, 2020 年 4 月 16 日-18 日, 横浜. 口頭発表

- 佐藤亮, 森島敏隆, 松林恵介, 中田佳世, 川上浩司, 宮代勲. 2020. 「がん罹患歴が肺癌予後に及ぼす影響-大阪府がん登録とがん診療拠点病院 DPC データを用いた多施設研究」, 第 60 回日本呼吸器学会学術講演会, 2020 年 4 月 24 日-26 日, 名古屋. 口頭発表
- 國富悠司, 川上浩司, 関知嗣, 中畠雅之. 2020. 「胃癌患者における高度催吐性抗癌剤を含むがん薬物療法による悪心・嘔吐に対する 5-HT3 受容体拮抗薬の世代間比較: DPC データベースを用いた観察研究」, 第 14 回日本緩和医療薬学会, 2020 年 5 月 29 日-31 日, 岡山. 口頭発表
- 土田哲也, 尾板靖子, 野田雅裕, 川上浩司. 2020. 「乳幼児健康診査と学校健康診断データの接続の現状と今後の展望」, 第 67 回日本小児保健協会学術集会, 2020 年 6 月 26 日-27 日, 久留米. 口頭発表
- 川上浩司. 2020. 「幼少期からの健康の歴史を紡ぐ、デジタル時代に対応したライフコースデータ基盤構築の現況」, 日本小児科学会 モーニングセミナー (オンライン開催), 2020 年 8 月 23 日. 講演
- Masato Takeuchi and Koji Kawakami. 2020. Hypothetical intervention of sodium-glucose cotransporter-2 inhibitors on renal outcome in type 2 diabetes. 36th International Conference on Pharmacoepidemiology and Therapeutic Risk Management Annual Meeting 2020, Berlin, Germany, 2020 年 8 月 26 日-29 日. 口頭発表
- 土田哲也, 吉田都美, 竹内正人, 川上浩司. 2020. 「乳児期の抗菌薬処方とアトピー性皮膚炎診断との関連: 大規模レセプトデータによる検討」, 第 79 回公衆衛生学会総会, 2020 年 10 月 20 日-22 日, 京都, 口頭発表
- 竹内正人, 川上浩司. 2020. 「特定健診の受検間隔と糖尿病発症に関する検討: 健診データを用いた parametric g-formula によるリスク推定」, 第 79 回公衆衛生学会総会, 2020 年 10 月 20 日-22 日, 京都. 口頭発表
- 川上浩司. 2020. 「医療リアルワールドデータベースの構築と臨床疫学研究の実際」, 日本肺癌学会 シンポジウム (オンライン開催), 2020 年 11 月 12 日. 講演
- 辻達也, 佐藤泉美, 上村友二, 太田晴子, 武田親宗, 祖父江和哉, 川上浩司. 2021. 「小児 MRI 検査時の鎮静における施行実態の調査と有害事象のリスク因子の探索」, 第 48 回日本集中治療医学会学術集会, 2021 年 2 月 12 日-14 日, 神戸. 口頭発表
- 中山健夫. 2020. 「シェアード・ディジションメイキングとは何か?: エビデンスと価値観の視点から」, 第 16 回日本クリティカルケア看護学会 (大阪国際交流センター), 2020 年 6 月 28 日. 口頭発表
- 中山健夫. 2020. 「Shared Decision Making 〈SDM〉とは何か?」, 第 82 回日本血液学会モーニングセミナー (オンライン開催), 2020 年 10 月 10 日. 口頭発表
- 中山健夫. 2020. 「EBM を用いた診療ガイドライン」, 第 74 回日本臨床眼科学会 (東京国際フォーラム), 2020 年 10 月 17 日. 口頭発表
- 中山健夫. 2020. 「健康長寿・笑顔のまち・京都」の実現に向けた地域の健康関連データの有効活用」, 第 79 回日本公衆衛生学会総会 (オンライン開催), 2020 年 10 月 22 日. 口頭発表
- 中山健夫. 2020. 「診療ガイドラインの作成と評価: Minds よりのメッセージ」, 第 58 回日本癌治療学会学術集会, グランドプリンスホテル京都, 2020 年 10 月 24 日. 口頭発表
- 中山健夫. 2020. 「EBM を臨床適応し良好な患者アウトカムを得るための 4 本柱」, 日本病院薬剤師会 関東ブロック第 50 回学術大会, 木村情報技術 (株) 東京第 2 スタジオ, 2020 年 10 月 31 日. 口頭発表

- 中山健夫. 2020. 「SDM の意義とその可能性」, 第 62 回日本消化器病学会大会, 神戸国際展示場, 2020 年 11 月 7 日. 口頭発表
- 中山健夫. 2020. 「EBM と診療ガイドライン～最近の考え方」, 第 140 回関東連合産科婦人科学会総会 学術集会 (オンライン開催), 2020 年 11 月 12 日. 口頭発表
- Li, Xinyi and J, Ito. 2021. “Determinants of technical efficiency of agricultural production in Gansu, China: A stochastic frontier output distance function approach.” 日本農業経済学会 (茨城大学) 個別報告, 2021 年 3 月 28 日. 口頭発表
- 要藤正任. 2021. 「地域活動への参加と主観的幸福度」, 日本社会関係学会 (オンライン開催), 2021 年 3 月 20 日. 口頭発表
- 宮野公樹. 2020. 「異分野融合, その取り組みの紹介と可能性」, 日本塑性加工学会関西支部 (オンライン開催), 2020 年 10 月 8 日. 講演
- 宮野公樹. 2020. 「変革をどう起こすか? と問うことの意味」, 第 10 会地域イノベーション学会, 2020 年 12 月 5 日. 基調講演
- 井出和希. 2020. 「健康情報の根拠となる学術誌の質の評価: 書誌データベースを活用した量的分析」, 第 20 回日本抗加齢医学会総会 (オンライン開催), 2020 年 9 月 25 日. 口頭発表
- 井出和希, 八田太一, 藤田みさお. 2020. 「幹細胞研究・再生医療領域における Predatory Journal の実態: 書誌データベースを用いた定量的分析」, 第 32 回日本生命倫理学会年次大会 (オンライン開催), 2020 年 12 月 3 日. 口頭発表
- 井出和希, 八田太一, 藤田みさお. 2020. 「幹細胞研究・再生医療領域における Predatory Journal の動向: 書誌データベースを用いた探索的評価」, 第 41 回日本臨床薬理学会学術総会 (オンライン開催), 2020 年 12 月 5 日. 口頭発表

社会活動 (講演会・展示会などのアウトリーチ活動等)

- 川上浩司. 2020. 講演, 「ヘルスケア x デジタル: ヘルスケアサービスの未来予想図」, 三菱商事株式会社ヘルスケア本部 (オンライン開催), 2020 年 8 月 19 日.
- 川上浩司. 2020. 講演, 「ヘルスケア x デジタルの未来予想図と薬剤疫学」, ファルマビジネスアカデミー (オンライン開催), 2020 年 9 月 7 日.
- 川上浩司. 2020. 講演, 「ヘルスケア x デジタルと医学研究」, 国際高等教育研究所 ヘルスリテラシー向上研究会 (オンライン開催), 2020 年 9 月 28 日.
- 川上浩司. 2020. 講演, 「RWD の活用による健康アウトカムの向上に向けて」, シードプランニング第 5 回 HOT フォーラム (オンライン開催), 2020 年 10 月 22 日.
- 川上浩司. 2020. 講演, 「医療・健康系データベースを用いた新しい医学研究」, 一橋大学 IMPP コース (オンライン開催), 2020 年 11 月 4 日.
- 川上浩司, カール・ベッカー, 三木竜介, 平山直子, 祐野恵. 2021. シンポジウム, 「EBPM に向けた自治体との連携による健康データの活用」, 第 3 回 SciREX オープンフォーラム「科学技術イノベーション政策の新展開」 (オンライン開催), 2021 年 1 月 21 日.
- Jill Harrington, Carl Becker, et al. 2020. 出演 COVID-19: Grief, Bereavement, and Death at a Distance: International Perspectives on its Impact. Association for Death Education and Counseling, 2020 年 4 月 13 日.

- カール・ベッカー. 2020. 基調講演, 「日本仏教の死生観を医療に活かす」, 飛騨千光寺 2020年8月1日.
- カール・ベッカー. 2020. 出演, 『日本人の死生観の行方: 生老病死を積極的に見詰める』京都大学 ELP オンライン, 2020年10月24日.
- カール・ベッカー. 2021. 基調講演, 「日本仏教の遺族ケア」, 臨済宗妙心寺派愛知教区青年僧の会, 2021年1月26日.
- カール・ベッカー. 2021. 講演, 「日本人が持っていた生老病死感」, 「いのちに寄り添う医療」, 養生塾設立20周年記念シンポジウム, 東京都新宿, 2021年1月30日.
- 桑田知明, 楠麻耶, 富田直秀. 2020. 【CONNECT⇔】 ないをたのしむ展~ひねくれ編~@京都府立図書館. 2020年12月3~20日.
- 中山健夫. 2020. 講演, 日本腎臓学会 がん薬物療法時の腎障害ガイドライン改訂委員会 (オンライン開催), 2020年12月9日.
- 中山健夫. 2020. 講演, 第12回日本創傷外科学会総会学術集会, ホテルクレメント徳島, 2020年12月11日.
- 中山健夫. 2021. 講演, 研究計画と英文論文執筆のための国際ルール~公正な科学研究に向けて~, 日本看護研究学会 (オンライン開催), 2021年2月10日.
- 岩下直行. 2020. 講演, 「デジタル通貨を巡る論争を読み解く」, 『東京大学金融教育研究センター FinTech 研究フォーラム公開シンポジウム『デジタル通貨と決済システムの未来』 (オンライン開催), 2020年7月22日.
- 岩下直行. 2020. 講演, 「with コロナ時代のフィンテックとは」, 『国立情報学研究所(NII) 金融スマートデータ研究センターシンポジウム』 (オンライン開催), 2020年12月14日.
- 岩下直行. 2021. 講演, 「現金のデジタル化を巡って~電子現金研究が生んだ暗号資産とデジタル通貨」, 『電子情報通信学会 暗号と情報セキュリティシンポジウム (SCIS2021)』 (オンライン開催), 2021年1月19日.
- Ito, Junichi. 2020. 講演, “Food security and comparative disadvantage of agriculture in the Asian region.” Zhejiang university (浙江大学) (オンライン開催), 2020年8月25日.
- Ito, Junichi. 2020. 講演, “Japan’s direct payment scheme for collective stewardship of farmland and common property resources.” Zhejiang university (浙江大学) (オンライン開催), 2020年8月26日.
- 要藤正任. 2021. 講演, 「まちづくりとソーシャル・キャピタル」, 京の三条まちづくり協議会 (京都市), 2021年1月23日.
- 宮野公樹. 2020. インタビュー掲載, 「異分野を知り己を問う」電通育英会冊子 IKUEI NEWS vol. 90: 11-12, 2020年5月1日.
- 宮野公樹. 2020. 講演, 「学問論とは何か?」, academist BAR (YouTube), 2020年6月18日.
- 宮野公樹. 2020. インタビュー掲載, 「今流行りの「課題解決」は本当に善なのか? 現代人の思考の殻を破るヒント (前編)」 「ハンケイ京都新聞」WEBサイト, 2020年9月8日.
- 宮野公樹. 2020. 講演, 「なぜ今 steam 教育が注目されているのか? ~今後の社会・経済が必要とする人材像を探る~」, Venture Café Tokyo (オンライン開催), 2020年9月17日.
- 宮野公樹. 2020. インタビュー掲載, 「京大“アナキズム”没頭の衝動#0 枠を破壊せよ」 THE KYOTO 京都新聞サイト, 2020年9月18日.

- 宮野公樹. 2020. 講演, 「第4回京都大学研究データマネジメントワークショップ～科学研究費補助金基盤研究(A)キックオフイベント～」, 京都大学学際融合教育研究推進センター葛ユニット(オンライン開催), 2020年9月19日.
- 宮野公樹. 2020. インタビュー掲載, 「"異職"で交流 真の学びを」毎日新聞朝刊[京都面], 2020年9月25日.
- 宮野公樹. 2020. 講演, 「働くこと、学ぶこと」, 立命館大学キャリアセミナー2020(オンライン開催), 2020年11月13日.
- 宮野公樹. 2021. インタビュー掲載, 「大学とは何か」中日新聞・東京新聞・北陸中日新聞 新春特集, 新春特集, 2021年1月11日.
- 宮野公樹. 2021. 司会, 第2回学術知共創プロジェクトワークショップ「パラヒューマン社会の未来図」セッション, 2021年1月19日.
- 宮野公樹. 2021. 講演, 東京理科大学社会人向け講義「学びの学びについてーなぜ私達は学ぶのかー」, 東京理科大学, オープンカレッジ [東京理科大学 オンライン講座(東京都)], 2021年2月9日.
- 宮野公樹. 2021. 講演, 島根大学第二回研究マッチングイベント「異分野融合の意味と意義」, SAN'IN ダイバーシティ推進ネットワーク(オンライン開催), 2021年3月15日.
- 祐野恵. 2021. インタビュー掲載, 「政治家を辞めた理由 京大"アナキズム" #4 没頭の衝動」THE KYOTO 京都新聞サイト, 2021年1月26日.
- 城山英明, 林隆之, 西條正明, 嶋田義皓, 見田真木子, 六田充輝, 吉田篤, 祐野恵, 藤山泰成. 2021. シンポジウム, 「科学技術イノベーション政策研究・教育の現在と未来」, 第3回 SciREX オープンフォーラム「科学技術イノベーション政策の新展開」(オンライン開催), 2021年2月12日.

大阪大学・京都大学
公共圏における科学技術
活動報告 2020

2021年8月31日発行

編集・発行 公共圏における科学技術・教育研究拠点 (STiPS)
〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16
TEL 06-6850-6111 (大阪大学代表)
URL <http://stips.jp/>
E-mail stips-info@cscd.osaka-u.ac.jp



公共圏における
科学技術・教育研究拠点 (STiPS)
Program for Education and Research on
Science and Technology in Public Sphere [STiPS]